

ナホビノと蘭丸とザコ
ちゃん

気力♪

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

砂漠に落ちた流星に、外宇宙からの蘭丸キミがいた。



『真・女神転生V』とFGOのクロスオーバーです。FGOより謎の蘭丸X、というより蘭丸星人を異物混入させてみました。一応、真Vのネタバレ注意です。

目次

- 外宇宙からの来訪者X（になれなかった
モブ蘭丸）—— 1
- 美少女悪魔アマノザコ（内心は除く）
7
- 餓鬼のお食事！（腹は膨れない）
14
- 水も滴る（心汚い）人魚様！—— 22
- 東京タワーの（やけっぱちな！）毒龍様！
32
- みんなのコウリユウおじいちゃん！（試
練は与えるよ！）—— 39
- ナホビノくんたちは（なるべく無事に）帰
りたい！—— 49
- ベテル東京支部の！（あんまり記憶に残
らない！）偉い人のお話！—— 62
- 制服のヤバイ！（カレーの美味しい！）学
校の話！—— 71
- 頑張れ東京防衛軍！（正式名称はベテル
東京支部です）—— 81
- 突然の襲撃！（東京はいつもピンチ！）
95
- メガテン的的女子高生問題！（友情のもつ
れにも気をつけて！）—— 104
- 魔界のシナガワ大冒険！（したのは主に
太宰くんです）—— 113

マガツカ怖いぞ悪魔の巢！（倒せばポー
ナスがつぼりです）—— 121
嫌よ嫌よはやっぱ嫌！（好きな訳ではな
いのです）—— 129
似たモノ同士の僕たちは—— 136
優しき（ハーベストな！）女神達！
144
魔王軍撃退戦！（みんなやる気はありま
せん）—— 153
ラフムとサホリとマツクール！（天狗さ
ん達はキンクリです）—— 163
東京都千代田区魔王城！（切符はあなた
の命です！）—— 174

今日の天気は晴れ時々雷、たまに地獄の
炎！（ハラスメントは基本です）
181
見るがいい（コミュ力微妙な）人類の極点
を！—— 190
魔王城の三柱！（仲良くないけど仕事は
してる）—— 203
終結の大決戦！（未来に希望はあります
か？）—— 213
妖精の森開拓中？（アイドル農家はまだ
いない）—— 225
ナホビノくんの小旅行！（区切るところ
が見つからねえ！）—— 236

生贄の神モロク様！（いつもお世話に
なってます！）

外宇宙からの来訪者X（になれなかつたモブ蘭丸）

目の前の砂漠は広大だった。

友人の様子を見に行ったただけの筈が、気付いたらこんな砂漠の只中に放り出されている。遠くに見える廃ビルと、背後の砂に埋もれているトンネルのほかに理解できるモノはない。

空に輝く太陽でないナニカを見て、“此処はもう違う世界なのか”と途方に暮れた時だった。

一筋の美しい流星が、砂漠に着弾した。

衝撃で巻き上がる砂が収まった頃、流星の落ちた場所には2本の棒が見えていた。

というか、足だった。犬神家スタイル（砂漠の姿）だ。

なんだか笑えてきたので、俺は足を動かし始めていた。

ジタバタ抜け出そうと動いている、両足の主を一目見てみたくなったのだ。

そんな事が、『俺たち』の始まりだった。

ずんばらりと悪魔を切り裂く。両手から出るライトセイバー（仮）はとても鋭く、雷の力は強力で、なにより身体は頑丈だ。

これが、『アクマ』の力らしい。

俺、デーモンになっちゃったよ……

『少年、体を融合させているだけだ。君は人間のままだ』

ネタに真面目に返されると少し辛いけど、だいたいデビルマンみたいなものだろうコレは。なんか青っぽいし、俺は様々なコンテンツに対して『わかるマン』になれるぞ。

『……少年がそう言うのなら、きつとそうなのだろう』

相棒が純粹過ぎて心配なんだが。

……とまあ、数分前とは大分状況が変化した。

まず、砂漠の両足を見るためにホイホイ出歩いたら、悪魔っぽい悪魔に襲われた。ダイモーンというらしい。

さつき殺したが、この『アオガミ』と合体しなければ死んでいたのは俺だ。とても運が良かった。

と、一息ついてから流星の落ちた場所に目を向けた。するとそこには、砂漠のど真

ん中で体育座りで落ち込んでいる少女？ がいた。

「ブツブツと言いながら砂に〃の〃の字を書いている。古風だ。」

『少年、注意しろ。そいつは強力な力を持っているぞ』

「だとしても、話を聞くくらいは良いだろう。多分。」

「落ち込んでいる彼女に声をかけてみる。「どうしたんだ？」と。」

「……ああ、この星の人類の方ですか。蘭丸は……まあ、落ち込んでいるであります」
理由を聞いても？

「最も強い蘭丸を決める超蘭丸決闘に参加できなかったのではありません……あの宇宙生物を殺した事に後悔はなかったのですが、超時空ブラックホールから逃れられずにこの星に漂流してしまっただけでありますよ……」

宇宙人だったのか

「はい。ただ、蘭丸は『謎の蘭丸X』に意志を預けられなかった蘭丸星人の面汚しではあります……」

「だからそんなに落ち込んでいるのか。なりたかった『最強の蘭丸』になれず、『謎の蘭丸X』に思いを託す事も出来ずに此処に迷い込んでしまったから。」

『少年？ 意味が分かるのか？』

……人助けをして試験を受けられなかったとかそんな感じだろう、多分。

「という訳です、貴方は蘭丸を放っておいてさっさと行つて下さい」

なら、迷子仲間として協力をしないか？ 俺も気付いたらこの砂漠に放り出されていんだ。ブラックホールだとかワープゲートとか、そういうのを探すにしても手がかりも何もない状態で、とても困っている。

君もここで落ち込んでいるよりは、ぶらぶら歩きながら帰る方法を探した方が、いくらかマシだろうとは思わないか？

「……それで、ありますね。蘭丸は貴方と同行する事にします」

俺はユート、よろしく。

「はい、今後ともよろしくであります。ユート殿」

来訪者：『蘭丸』が仲魔になった！

「あ、所でランマニウムの補充をお願い出来ますか？」

マガツヒで良いだろうか？

「大丈夫であります。……これはこれでそこそこ美味しいでありますね」

『グルメ、なのだろうか？』

と、正体不明にして性別不詳。ついでに言うなら理解不能な蘭丸が仲魔になったのが確認したい事はいくつかある。

「なんでありますか？ ユート殿」

蘭丸は自由自在に駆け回っているが……空中ダツシユとか、できてしまうのだろうか？

「？ もちろんできるであります。蘭丸基礎講習の初日で身につける基礎中の基礎でありますから」

その時、俺の感じた衝撃を言葉にするのは難しいだろう。ダツシユ速度をジャンプで空中軌道に反映させることができない身としては是非とも身につけたい技術だった。ショートカットをする為、物陰に隠れたモノを探す為、この短い間で感じたストレスから解放されるのならば！

そんな熱意をそのままに空中ダツシユのコツを聞いてみた。

「まずは刀を用意するでありますよ。蘭丸の守り刀が最良であります、無いのでしたらランマニウムで代用刀を作ります」

らんまにうむ

「はい。蘭丸殺法とは鍛え抜かれた肉体操作とランマニウム粒子のコントロールを組み合わせた技でありますから」

……なるほど、そうだったのか！

『少年、理解できたのか？』

俺は蘭丸ではないのだから無理なものは無理なのだ。大人しくぴよんぴよんすることにしよう。

蘭丸は「参考になりましたか？」とキラキラした目で、体の中のアオガミは『大丈夫かコイツ』という目で俺を見ていた。

東京砂漠は辛い所だ、うん。

美少女悪魔アモノザコ（内心は除く）

この東京砂漠には龍脈というものがある。土地に流れる力の流れであり、そこからは“マガツヒ”というエネルギーを取り出せる。

見た目はセーブポイントだし、効能的にも休憩ポイントだ。

ただし、金がかかる。

「ヒヒツ！ マツカを出さねえと休ませてはやれねえなあ！」

「ユート殿！ こいつをぶつ殺すであります！」

「オイオイオイ、龍脈つてのは荒れてるんだぜ？ ちゃんとした場所から力を抜かねえと逆に飲み込まれちまう。嬢ちゃんにそんな知識があるようには見えねえがなあ！」

ま、死んでも良いなら止めねえよ」

「うぐぐぐぐぐ」

歯噛みする蘭丸。ケラケラと笑うガイコツの“ギユスターヴ”。背後に見える金銀財宝に薬や道具の数々。

この東京砂漠で実に“良い”商売をしているようだった。

「で、どうすんだ？」

「お金は……足りないであります」

そんな訳で、何か自分達に振れるバイトはないだろうか。なかなか強い俺たちは、使えると思うぞ。

「あー、なら“ミマン”を探して来ちやくれねえか？」

「ミマン、でありますか？ これまで戦った悪魔にはそんな者たちは居なかったであります」

「まあ、連中は悪魔とはちと違ってな。弱い、しぶとい。だから探し物とかに行かせたんだがちつとも帰って来ねえ。最近では魔界が荒れてるからな、手軽に使える駒は手元に戻してえのさ」

「……なるほど」

つまり、従業員が心配だから探しに行ってくれと？

「そんな感じだ。さ、行つてきな」

「うぐぐ、了解したであります」

龍脈点の内側から出る。蘭丸は結構複雑な表情だ。

ギユスターヴはそんなに悪い奴ではなかったようだ……

「分かつてるであります。ただ、ミマンという者を語る時の顔がどうにも……」

まあ、本人というか本悪魔に聞いてみれば良いだろう。互いに思う所があつてもとりあえずの納得があれば雇用関係は続けられるのだから。

「そんなものでありますかね？」

これは現代日本で軽いバイトしかしていない奴の意見だから、悪魔だつたり過去の人だつたりして違う意見になると思うが、な。

などと雑談をしながら砂に埋もれつつある道路を進んでいく。すると、ガキの群れがピクシーほどの大きさの小さい悪魔と紅い結晶を頭にした悪魔を襲っていた。

小さいのは紅いのをうまく盾にして無傷だつた。喚き声がうるさいが。

「ぎゃー！　ぎゃー！　ちよつとやめて！　口臭い！　私食べても美味しくないから！

コイツ！　コイツ食べときなさいよ！　ねえ！」

「オマエも、美味そう！」

「喰う、喰う！」

「オレサマ、オマエ、マルカジリ！」

蘭丸と目を合わせ、不意打ちを仕掛ける。目の前の奴を食おうと集中しているその背中では隙だらけだつた。一人ずつ始末して、終わらせた。

「ああー、私死ぬんだ、此処で死ぬんだあ！」頭を抱えて蹲り、諦めたそいつを紅いのが慰めている。人間味とかクソ雑魚な空気がある悪魔もいるのだな。

「えっと、ミマンという方はいらっしやいますか？」

「エツ、ボク？」

「おや、貴方でしたか。ギユスターヴ殿から探して来いとどの依頼を受けたモノであります。無事……ではないようですが、生きていて何よりです」

「イマ、帰ル所ダツタ」

と、頭の上に小さいのを乗せたままミマンは龍脈点まで同行し、ギユスターヴの領域へとやってきた。頭の上の奴は疲れて寝ている。なんだコイツ。

「おう、戻ったか……って何乗せてんだ？」

「土産」

土産だったのか。

「土産だったんでありますね」

『土産だった……のか？』

と、小さい悪魔を落として、頭から何かを取り出してギユスターヴへと渡した。

それは、空き缶だった。なんか変哲もないコーヒーの空き缶だ。

「良くやった！ 状態の良い遺物じゃねえか！」

「え、そつちでありますか!?!?」

「悪魔なんてどこにでも居るだろうが。それよりもコレよコレ!」

ギユスターヴは缶を手にとってクルクルと舐め回すように見ていた。とても楽しそう
うだ。

「うっし、そんじゃ休んでいいぜ。ついでにいくつか薬も融通してやるよ」

「ギユスターヴ殿はその空き缶を探していたのでありますか?」

「まあな、東京がこんなになってから人の作った面白いもんは見なくなっちゃったのさ。
そういう遺物を集めてるんだよ、俺は」

空き缶は面白いものなのか……

「ギユスターヴ様、変。気ニスルナ」

と、そんなこんなで俺と蘭丸と小さいのはマガツヒを補充して、一休みするのだった。

「え、なんか知らない連中に囲まれてるんだけど」

「ユート殿。この悪魔、気が付いたでありますよ」

起きたか。助けてやったから報酬を寄越せ。マッカでいい。

「え、何で寝起き一発目でタカられなきゃならないの私」

「ユート殿、とりあえず自己紹介が先では？」

そうだな。俺はユート。コイツは蘭丸。迷子をやっている。

「私はアマノザコ。……探しものをして旅してやるよ」

「ほう！ ユート殿、旅人でありますよ！」

それは良い。聞きたいことがあるんだが

「……いいけど、高いよ？」

おつと手が滑ったー（棒読み）

「痛ッ！ 痛いから！ 指だけでアイアンクローとかしなくていいからー」

「ユート殿、器用でありますねー」

と、*「快く」* 情報を渡してくれるようになったらしい。まあ、命を助けられた身の上で何かしらの要求を重ねてくるような奴は悪魔にも居ないらしい。

「……ねえ、アンタはコイツやばいと思わないの？」

「何がでありますか？」

「おかしいと思おうよ……」

そんなやりとりののちに、アマノザコの知る情報は語られた。

ここ、『魔界』では十八年前に大きな戦いがあったのだとか。その戦いは『誰が勝ったのかすら分からない』ほど凄惨なものだったようで、その戦いでまともな自分保てなく

なつた悪魔も多くなつたのだとか。

その一体が東京タワーの大蛇。炎と毒で目の前の敵を跡形もなく溶かし殺すのだとか。

「……毒ですか。厄介な手合いでありますね」

「多少の毒なら私が魔法で治せるんだけど、跡形もなくなつてたらねえ……」

東京タワーまでまだ距離があるのだから、熱対策ができる奴の協力でも取り付けよう。

幻魔：アマノザコ が仲魔になつた！

「じゃ、今後ともよろしく。あんたらはそれなりに強そうだしね。けど、適当な所で逃げないとヤバイよねえ……」

餓鬼のお食事！（腹は膨れない）

「ここ、東京砂漠はどうにも面倒な作りになっている。

倒壊したビルと吹き荒れる砂が視界を遮り、まともに作られた道が残っている事はあまりない。東京育ちの土地勘が全く役に立たないのは少し辛い所だ。なにせ、普通に進んでいるのに洞窟の中で迷子になっているのだから。

「……いやいやいや、さつき『こっちは行き止まりじゃぞ』って言われたのに無視して進んだからでしょ」

いや、こっちにアレがるかもしれないし。

「『写し身』でありましたか？ 絵とも写真とも違う美しきモノでありましたが、素晴らしい芸術品でありますよ。蘭丸アートの取り入れたいであります」

「……蘭丸アート？」

ザコちゃんや、気にするだけ無駄だぞ。蘭丸が『蘭丸ほにやらら』と言う時はフィリングで感じるのだ。

「英語混じりで頭痛が痛いとか面倒にボケないですよ。伝わらない奴多いからね？ 悪魔って基本学はないんだから」

「ザコ殿は勉強をしていたでありますか?」

「そんなとこ。『勉強とは、楽をするためのモノである』って誰かに言われたのさ。……まあ、いつまで経つても楽にならないからもう辞めたんだけどね」

人に歴史ありとは言うが、悪魔にも歴史はあるのだな。

「で、ありますねー」

と、そんな話をしているとふとアマノザコが振り返ってきた。

「てか、あんたら私のこと何て呼んでた?」

ザコちゃん?

「ザコ殿、でありますよ?」

「しれっと雑魚呼ばわりすんなし」

しかしながら、この面子で一番弱いのはザコちゃんでは? 俺はデビルマンだし、蘭

丸は蘭丸だし。

「比較対象がおかしいだけだからねソレ。ナホビノと宇宙生物とかなんなのさ本当に」

……ナホビノ?

「あれ、あんたつてそうなんじゃないの? 人の知恵と悪魔の体のヤツ。由来は忘れた

けど、そんな感じの」

「ナホビノ……はい! 蘭丸は全く知らないであります!」

語感が良いので、俺はこれからナホビノと名乗るとしよう。デビルマンはやはり不動明だ。スマホのスパロボでもそう言っている。

などと歩いて行くと、少し開けた場所に出たそこには弱り倒れているガキの群れがいた。

「なんか弱っているでありますね。飢えているのでありますか?」

「餓鬼つてのは食つても食つても腹一杯になれない奴らだけど、それにしたつて弱つてるね。何かあつたのかな?」

何があつたんだ?

「腹が、減つてんだよ……仲間が、飯を取りに行つてる仲間が帰つてこねえんだ……ツ!」

「畜生……ツ! 力が入らねえ。これも弱いせいなのかよツ!」

「生きたかつた、だけなのによお……」

つらつらと出てくる恨み言。要するに、食料調達に行つた仲間が帰つてこない為に、弱りきつてしまったのだとか。

しかし、餓鬼が、というか悪魔が弱さを嘆くとは何だか不思議な気分になる。人間の身としては果てしなく恐ろしい相手だったのだ。

「…………え？」

ナホビノになってからは、小蠅と左程違いが無いぞ勿論。

「足元を掬われないように気をつけなければ死んでしまいますよユート殿」
分かっている。

とりあえずは食料調達に向かったというガキの行方を追いかけて歩いていく。道は荒れ果て悪魔が暴れる東京砂漠は相変わらずに世紀末だ。ポストアポカリプスだった。

ただ、食糧になり得るモノを持っている奴となるととても目立つようで、そこいらの連中にインタビューをすると案外楽に行方はわかった。

行き先はある悪魔の元。そいつは弱い悪魔を集めて、施しを与えているらしい。

その名は、『アプサラス』。水に関係するインドの天女だそうだ。

「へえ……タダで買物配つてるとか変なヤツだね」

「タダより高いモノはない、とはよく言う話であります。裏があるのでしよう。インドの方々が領土を得るための足がかりにするのでしようか」

とはいえ日本の神や悪魔は海外の影響をかなり受けていると保健の授業で聞いた。魔界での勢力がどんな意味があるのかは知らないが、適当に暮らすだけなら左程気にする必要もないだろう。

「あ、見えた見えた。根城はあの洞窟だよ。アプサラス自身にはそんな凄い力は無い感

じかな?」

「二回り二回りつよい力を感じます。が、ユート殿でも蘭丸でもどうにでもなるはずでありますよ」

殺し合いにならないで済むならそのの方が楽でいい。城攻めは愚策らしいのだから。

「……ていうか、あんたって考えがかなり浅い気がするんだけど」

一般的な男子高校生だからな。身についていないうる覚えの知識で生きている自覚はある。

「はいはい 一般的 一般的」

しかし、驚くことにあっさりと洞窟の中に倒された。

まるで待ち構えられていたかのように。アプサラスとその手下達が迎えてくる。質素だが清潔な水や食事があり、悪魔達は皆理性的だった。

礼儀正しい、のだろうか。

「お待ちしておりましたユート様。何のご用件で?」

「はい。ガキの集落より食糧調達に来たモノが居るかを確かめに来たのであります」

「残ってる連中が腹減って死にそうなんだってさ」

もちろん俺たちには助ける義理も理由もない。だから事を荒立てる気はない。居ないと言えば信じるつもりだ。

「……ガキ」

「はい！ アプサラス様！」

「貴方ですか？」

「はい！」

そう元気に言葉を返すガキの姿を見て一瞬頭を抱えてから、俺たちに食糧を持たせてきた。

「私の目的は弱い悪魔でも命を繋げられるようにする事です。それは目の前の貴方だけではないのですよ？」

「……はい！ ありがとうございますアプサラス様！」

「考えるの止めていませんか？ あの餓鬼殿」

「ガキってほら、頭悪いから」

まあ大体わかった。どうせ食糧を届けなくてはならないのなら、ついでにこの集まりの事を話しておこうと思う。

「それならば、追加で私からの頼み事をして構いませんか？」

「頼み事、でありますか？」

「はい。あなた方にはリヤナンシーという悪魔を討伐していただきたいのです。色と混沌と力で墮落を誘うあの魔女を」

暗殺の依頼か。

「……できれば正面から戦ってほしいですが、リヤナンシーが消えるのならどうとでも。あの悪魔は許しておけませんから。」

……リヤナンシーは、一体何を？

「彼女は力だけしか見ていないのです。心を持たず力だけ強くなった悪魔を側に置き、力さえ有れば何をしても良いのだという振る舞いを教えてしまうのです」

「それは別に変なことじゃないんじゃない？ 結局悪魔は力だし」

「否定はできません。しかし、それだけではダメなのです。だから私たちは救いを与えているのですから」

「……なるほど、であります」

了解した。見かけたら懲らしめることにする。

「……はい。お願いします」

少しのモヤモヤを飲み込んで語ったその言葉。アップサラスはそれなりに強かで、それなりに大人だった。

水も滴る（心汚い）人魚様!

プラプラと東京砂漠を歩いていく。

相変わらず遠くに見える東京タワー以外にランドマークは見当たらないが、大きさをらみて近づいてきたのだろうと思う。なにせ自分以外に人間を見つけたのだから。

まあ、砂漠に打ち上げられた人魚を助けようとしているとかいう妙な状況なのだけども。

「しつかりするんだ!」

「……ああ、大丈夫よあなた。楽になってきたから」

なんだかやらかしそうなそいつをちよつと睨むと、何となく空気が変わったのを感じた。やる気だったなあの人魚。

「人間でありますね。知り合いでございますか?」

クラスの面白優しいメガネくんだ。それなり程度に話すな。

などと若干のぐだぐだが起きた後に、彼はこちらに向き直ってきた。

彼の名前は敦田ユヅル。この東京砂漠に入り込むきっかけになった一人であり、個人的に崇めている後輩の兄である。真面目で誠実で、しかし意外と冗談が通じる現代風の優等生だ。

「君は……そうか、君もここに来ていたんだな」

残念ながら帰り道のわからない迷子だが、なんとか生きています。そっちは無事なのか？

「ああ。僕はもともと悪魔と戦う資質を買われていて、対抗するための術を身に付けていたんだ。悪魔召喚プログラムという」

ハイテックでハイカラなのだ。俺は雰囲気デビルマンもどきになったというのに。

「時に、こちらの人魚殿はどうなされたのでありますか？ 介錯が必要ならば行きますが」

「ああ。こちらは“マーメイド”という悪魔だ。襲われている所を見かけてしまったな」

「へえ、人間にもいい奴つてのはいるんだね。どっかの誰かとは違って」

心外だぞ。メガネくんを一般的な人間と一緒にするな。俺を見れば分かるだろうが、人

間というのはもつと小賢しく自分勝手なのだから。

「ところで……彼女たちは？」

「あ、蘭丸は蘭丸であります。ユート殿とは迷子仲間でありますよ」

「私はアマノザコ。こいつといるのは……危険から目を離さないため？」

ザコちゃんや、別にちゃんとした事情と説明と手切れ金があればザコちゃんを殺すつもりはもうないぞ。俺は。

「とはいえザコ殿は蘭丸たちの手の内を知っていますから。それなりの対処はするでありますよ」

「血も涙もないこいつらと組んだのが間違이었다よ……」

「……なんだか愉快的事になっているのだな、君は」

生きているというのは案外楽しい事みたいだぞ。今まで気にした事はなかったのだから。

とりあえずメガネくんと情報のすり合わせをする。

ここは『魔界』で『東京』らしい。十八年ほどで砂漠になったそうだが、街にある遺物を見た限りでは十八年前の東京を元にして作られた異世界である。とは彼の言葉だった。

しかし人間の拠点となるような場所は見当たらず、善玉悪魔の根城も見当たらない。あいも変わらず八方塞がりだった。

「所で、太宰は一緒ではないのか？ トンネルからこの世界に入ったのなら近くにいても不思議では無いのだが」

太宰……ヘタレ動画配信者である太宰ユウイチロウの事は遠目に見た。砂漠に入つてすぐの、何もする気が無かつた時に。

「無事だったのか？」

白い羽と衣の天使っぽい悪魔に連れていかれた姿だったが。正直アイツの命は連れて行つた悪魔次第だろう。取つて食うような空気ではなかつたのが救いかもしれないが。

「ならばその天使の根城を探すべきだろう。僕は予想が正しければ、その天使達は僕に力を与えてくれた組織とパイプがあるんだ」

「……天使に守つてもらつてるーって感じなの？」

「そうだ。日本では今退魔の力がある者達が少ないんだ。だから悪魔から守る為に天使の力を借りていた」

「その天使という方々は信用できるのでありますか？」

「正直思うところは僕にもある。だが天使の力も悪魔の力も借りなくては日常を守りきれないというのが実情なんだ」

そういう話は後でいいだろう。俺は興味ないし。

「アンタはブレないね」

ブレられるだけの芯がないからな。俺は雰囲気できている！

「そこは威張る所じゃないって」

で、そっちのマーメイドは何をしかしたんだ？ 自分より強い悪魔に突つかかるタチじゃあないみたいだが。痴情のもつれ？

「さつき見つけたばかりだから僕にも分からない。マーメイド、話してくれるか？」

「……は、はい」

あ、こいつ声と表情を作りやがった。と俺とザコちゃんは気づいた。悪魔でも女の強かな恐ろしさは健在なのだ。

「私たちマーメイドの集落はとある悪魔に呪われてしまったのです。奴は水を汚染し、水に依存する私たちの魂に呪いをかけました。そして、その呪いに耐えられなかった者は心を壊されただ暴れるだけの存在へと堕ちてしまったのです……」

「……その、呪った悪魔というのは？」

「彼のモノの名はパズス。4枚の羽と獅子の顔を持つ邪神の石柱です。私は仲間の為にパズスを仕留めようと協力者を求めていましたが、その交渉が上手くいかずに襲われていました。そこをユヅル様に助けていただきました」

「そうなのか。頑張ってくれ。」

「いやいや！ 君は協力するべきとは思わないのか!?」

「思わない。」

「なにせ、報酬についての言質を何一つ取つてない上、パズス側の思惑も分からないのだ。リスクが大きくてリターンはあまりないような事をして誰の得にもならないと思う。」

「それに、そのマーメイドもあんまり信用できる感じじゃないからね」

「そうか……マーメイド」

「何？ ユヅル」

「君は、何を差し出すことが出来るんだ？」

「……私自身の力を込めた、写せ身を」

「ならば引き受けよう。タダで使おうとしていたその性根は気に食わないが、ちゃんと払うモノを払うのなら問題はない。どうせ帰り道のわからない迷子なのだから。」

「アンタ前言撤回早いよね。1秒前の言葉に責任を持つてなさそう」

一応、責任の生まれる言葉はなるべく使わないようにしている。

「二応嘘は吐こうとしてはいないのでありますね」

バレると面倒にしかならないので嘘は言わない方が楽だ。俺にはこの前吐いた嘘の内容を覚えていられる自信はないのだから。

閑話休題。

ユヅルとマーメイドを連れて、マーメイドの集落へと向かっていく。

道中で知り合ったアナーヒターという悪魔は言った。水を基点にした呪いなら、術者を倒してからアナーヒターの神水を混ぜれば解除できると。そしてフレーバー付きの水はとても良いモノだと。

フレーバー付きの水は水じゃなくてジュースだろうが！ と激闘があったが、それでも彼女は強い悪魔で水の神様のために力は信じられるだろう。思想がまったく合わないが。

そして、目の前の敵を見る。

空高く羽ばたく悪魔の名はパズス。これまで見てきた悪魔の中で最も強く、恐ろしい

敵だ。

悪魔と合体した人間として、ナホビノとして、俺は悪魔を殺してきた。力に振り回されてたり、力を振り回したりと好き勝手に。

ただそれは、自分より弱い相手にしか行っていないかった。自分より強い悪魔に立ち向かう理由はなかったし、強い相手もあまりいなかった。

パズスは、明らかに今の俺よりも強い。それが分かるからこそ身体がすくんでしまいうようになる。

だが、その恐れはすぐに消える。

隣の宇宙人蘭丸は、ギリリと歯を輝かせて構えを取る。

隣の悪魔アマノザコはイヤイヤながらも身軽に動けるように構えている。

目の前の人間敦田ユヅルは、気高い心で勇気を叫んでいた。

「パズス！ お前に奪われた彼女達の日常を、返して貰う！」

言葉にならないほどにパズスは逆上し、ユヅルへと雷撃を叩き込もうとする。しかしその雷は壁によって阻まれた。

彼の手にあるのは、“雷障石”。雷を無力化するバリアーを貼る使い捨ての道具だ。

全力の攻撃を撃たせる為に囷になり、明確な隙を作り出す。彼の勇気が、流れを俺たちの手番に引き戻したのだった。

「くたばれ、パズスー！」

マーメイドの氷の魔法がパズスの羽を凍らせる。

心は自然と『戦うためのモノ』に切り替わっている。恐怖だとかはもうどうだっていい。目の前の敵を始末する。

凍ったパズスの羽を俺とザコちゃんの雷魔法で切り落とす。これでもう奴は自由に空中を飛ぶ事ができない。

「クツ貴様らのような雑魚に我が負けるものか！」

「あなたがどれほど強いかは知りませんが……死ぬ時はあっさり死ぬでありますよ」

パズスに向けて流星が流れていく。空中で落下しかできないパズスを確実に殺すために、刀に足を乗せて飛んでいく蘭丸。放たれた一太刀は深く鋭く。パズスを切り裂き、その身を上下二つに切り分けていた。

「力が強いからって戦いに強い訳じゃないんだよね。ホント魔界ってヤダわ」
「違うない。今回はとりあえず殺される側にいなかった事を喜ぼう。」

アナーヒターの神水によってマーメイド達の呪いは解かれた。

マーメイド達は理性を取り戻し、心を持って談笑を始めている。

「良かったー！ コレでまた人間を惑わせるね！」

「うんうん！ 人間共が私たちの歌に魅入られて身投げするのってすつごく滑稽だよ
ねー！」

「あの間抜けな顔はいつ見ても面白くて癖になる！」

なるほど

「分かつてはいたのだがな、彼女達とて所詮は悪魔だとは」

「して、舐められっぱなしというのは癩に触るでありますね」

よし、ちよつと懲らしめておこう。誰がとは言わず、そうなった。

たった数分でマーメイド達の意識は変わった。人間を惑わしたりするのは変わらな
いだろうが、それはそれとして人間にあつきりと潰される恐怖は残ったのだろう。敗北
者の目をしている。

つまり彼女らはおとなしくなり、世界はちよつとくらい平和になったのだろう。う
ん。

「……ねえ、サマナー？ 私これから酷いことするよ？ どうする？ わからせる？」

「君は何を倒錯しているんだ！」

尚、敦田ユヅルは一部の性格の悪魔に目をつけられたそうだった。ケツ、イケメンは
違うぜ。

東京タワーの（やけっぱちな!）毒龍様!

この東京砂漠を進み始めて（気分的に）数日経った。時計の類は役に立たず、日のようなモノが出てから沈むまでの時間は絶対に24時間じゃない。だから正確な時間は分からないのだ。

まあ、とりあえず生きてるのでどうにでもなるのだけでも。

「魔石の融通、ありがたし」

「構わないでありますよネコシヨウグン殿。毒の対策を教えてくださいましたから」
「毒ってか、アイツの毒の息の対策だよね。まあシンプルなモノなんだけどさ」

ネコシヨウグンは、ヒュドラが暴れていたのを遠目で見た事があるらしい。それによるとヒュドラのプレスは2つ。炎のプレスと、毒の含まれている呪いのプレスだ。

どちらも直撃すれば大ダメージを受けざるを得ないだろうが、あくまで炎と呪いでしかない。なので対応する壁を作れば無効化できるのだ。

炎を防ぐ壁、呪いを防ぐ壁、どちらもギユスターヴが仕入れている商品の中にある。よって、ギヤスターヴの財布がまたしても潤うのだ。流通を一手に引き受けるとこんなにも恐ろしい稼ぎができてしまうとか、羨ましくて仕方がない。

やはり金の流れるシステムを作る奴が最強なのだ。不労所得万歳。

「なんだかどうでも良い事を考えていないか？ 君は」

もちろん考えているとも。目の前の困難からは積極的に目を背けなければ。英単語の小テストとか。

「それで期末前に一夜漬けするのでは効率が悪いとは思うのだがな……」

その辺は良いだろう。どうでも。

「……僕の方が足りずにヒュドラの相手を任せてしまつて本当にすまない。可能な援護はするつもりだが、毒は防ぎ切れないのだから」

たまたま俺がアオガミと合体して強くなつてただけだ。敦田が強かったら俺はもちろんお前に寄生したとも。なので次はなんか上手いこと頑張つてくれ。

「要求がふわふわ過ぎるぞ……」

よし。蘭丸、ザコちゃん、行こう。

「了解でありますよー！」

「治療はしてあげるから、適当にね」

東京砂漠を歩いて進み、東京タワーを眼下に捉える。

そこはかつて強大な悪魔達がぶつかり合った戦場跡。よくもタワーが原型を残しているモノだと感心するしかない。

ふと、俺と同化しているアオガミの記憶と混ざる。

彼は、まだ道路が多少残っていたこの辺りで神の軍勢の一員だったようだ。二十年前だとかの事か？

そこでアオガミはあの悪魔を見ていた。鬼のような、悪魔のような顔をした6枚羽の悪魔。あるいは墮天使。

明けの明星ルシファー、そんな化け物だ。

彼は創造神を倒したと言った。彼は、神のルールを破壊したと言った。

天使は戯言だと言ったが、それが本当だとは 俺／アオガミ は理解していた。

そんな事が、昔あった。

『少年、私は……』

その辺りは後で聞く。今は目の前の敵をぶちのめす。

「力に自信があるというより蘭丸達を眼中に入れていないだけでありますね。そこにいたからと八つ当たりをしてるだけですね。正直苛立つてありますよ」

「悪魔つてさ、大事な所に傷が付くとああなるんだよ。良くも悪くも情報でできてるから、欠けた部分を探してひたすらもがくしかない。……本当に辛いよ」

マガツヒをチャージして、強大な呪いのブレス『蛇毒の息』を放つヒュドラ。それを闇障石にて防ぎ、反撃を開始する。

まず、中距離かマーメイドの写せ身より引き出し身につけた力、氷結魔法『ブフ』を撃ちまくる。ブレスを吐き出す頭を凍らせて敵の反撃の手を止める。

そして一つ手を止めれば蘭丸はそれを逃がさない。縦横無尽に駆け回り、刀を煌めかせて命を削っていく。

「無理やり動いてくるよ！ 炎と首に気をつけて！」

そして、蘭丸と俺の攻撃ターンを止めないのがアmanoザコだ。小さな手傷は軽い回復魔法で癒され、大技の予兆を逃さず教えてくれる。

強さ、凶悪さで言えばバズスよりも格段に上の筈なのに負ける気が全くしない。噛み合っているというのはこういうのを言うのだろう。

そうして戦いを有利に続けていくと十分なマガツヒが溜まる。ここが決め時だ。

「いくであります！」

「やっちやうよー！」

『禍時・会心』は貯めたマガツヒを使って自分達の力を最大限発揮できるようにする大技だ。野良悪魔のどいつもこいつもが奇襲のついでに使ってくる基本技でもあるのだけども。

まあ、それはどうでも良いか。

マガツヒを消費して、マガツヒ技を起動させる。使うのは当然、『禍時：会心』。さあ

行くぞー!

「蘭丸、シュトラール!」

「吹き荒れる、ザンマ!」

『龕正連斬……!』

『禍時・会心』の影響下では全ての攻撃が『会心の一撃』になる。これまでの戦いでダメー
ジを負ったヒュドラを仕留めるに十分なモノに。

そして全ての攻撃が通り、酷くあっさりとヒュドラは崩れ落ちた。

「なんだか、弱くない?」

「で、ありますね」

「あー! 私たちが強すぎたのか! そりゃ頭のおかしいの2人と私だもんね!」

「……しかと首は落としました。体が散っているのも見て取れます。殺したのでありま
すよね」

手応えはあった。仕留めた筈だ。だが、違和感が拭えない。

まるで元から満身創痍だったかのようなようだ。

瞬間、地響きが鳴る。

巨大な岩で出来ているかのような巨人がこちらに向けて走ってきていた。

その速度は速くはないが、力強かった。

「……ッ！ アレは大戦の時に暴れてた悪魔だよ！ 国津神のオオヤマツミ！ なんで

こつちに？？」

「まさか、ヒュドラを追ってでありますか！」

「アイツから逃げてた事忘れてたんじゃないよね！ あの蛇！」

「まずい、俺たちのマガツヒは空だ。オオヤマツミが動いている所から致命傷は受けていない。ここで戦えば殺されるッ！」

「目を閉じろ！」

なので、素直に逃げることにする。幸いにもオオヤマツミが見えた段階で動いていた奴がいた。敦田は『くらましの玉』という閃光弾のような道具を起動させていた。なのでスタコラサツサと逃げてしまおう。

東京タワーの、向こう側へと。

「いやー、危なかったねー……」

「こんな危機一髪は不要でありますよ……」

「全くだ。目的地も決めずに走ったせいでここが何処かもよく分かっていないぞ。まあこれから何処に行くかの目処も立ってはいなかったんだが」

あ、それならばアオガミから少し話があるらしい。

『……18年前に天使はナガタチヨウ、旧国会議事堂を拠点にしていた。君たちの友人だという少年が連れ去られるとしたらそちら方面だと思われる』

「なるほど、それはありがたい情報だ。天使が居るのならそこから世界を渡る情報を得られるかも知れないんだから」

「私の探しモノも進展あると良いんだけどねー」

「ザコ殿も進展があると良いでありますね」

「……なんか手がかりが近くにありそうな気はするんだけどね」

とりあえずは今何処に居るのかを調べる事から始めようか。

そんなこんなで、ヒュドラ討伐はひと段落したのだった。

みんなのコウリユウおじいちゃん！（試練は与えるよ！）

相変わらずにぶらぶら歩くは東京砂漠。

メガネくんのスマホの『悪魔召喚プログラム』とアオガミが通話？ できたので別行動を始めてしばらく経った。特に当てがあるわけではないので悪魔をしばいたりミマンさんたちを探していると、空の上に黄金の龍が見えた。神龍とかそんな感じの。

なんだか雰囲気的にありがたい感じだったので拜んでいると、近くの羽の生えた女の子っぽい悪魔『モー・シヨボー』が真似してきた。

そしてすぐに「何も起きないじゃん！」とキレて襲ってきたので写せ身で手打ちにした。3人に勝てるわけないだろうに。

「それで、何で襲ってきたのさ」

「コウリユウに何かしてたじゃん。私ちよつとファンだから話してみたいなーって真似してたのに何も起きないから……っつい」

それは仕方ない。俺でもおそろく同じことをするだろうから。

「ユート殿はあのコウリユウ殿と何か話をしたのでありますか？」

鱗とか牙とか高く売れそうだから、分けてもらえたらと。

「……普通の神経したら『あなたの指は高く売れそうだからください!』みたいな発想にはならないと思うよ? いやアンタが普通じゃないのは知ってるけどさ」

だが、弓矢とかを当てたらワンチャン何か落つことしてくれはしないだろうか。こ
う、ブレワイみたく。

「それで怒らせたら私たちが命を落つことすでしょうが」

それはそうか。

という事で喧嘩を売る事はやめにしたが、どう見ても色々知ってそうな強キャラ臭があつたので話を聞いてみる事にする。具体的には、高いところから大声を出す的な方法で。

「コウリュウ殿ー! お聞きしたい事があるのですがー!」

「コウリュウー! こっち向いてー! かっこいいー!」

蘭丸とモーシヨボー(なんか着いてきた)が高所から声をかけ、俺がマガツヒをチカチカさせて目を引く。とりあえずはこれにか……あ、なった。

『ほう、ナホビノか。珍しい奴が現れたモノじゃのう』

コイツ……直接脳内に! (ファミチキください)

(ファミチキは売っておらぬぞ)

……本当に直接脳内に!? え、すいませんナマ言いました。

「キヤー! コウリユウに話しかけられたー!」

「深みのある声でありますね。とても“らしい”でありますよ!」

「……まあ、怒らせてないなら何でも良いか」

わーきヤーした連中をよそにコウリユウが近づいて来る。しかしながら俺の中になにか懐かしい感覚がある。おそらくだがアオガミはコウリユウと会ったことがあるのだろう。魂が覚えているほどに。まあ、それは聞くべきことを聞いてからにしよう。

『して、何の用じゃ?』

「蘭丸達は道に迷っているのであります。世界規模で」

異世界と外宇宙からの迷子が一人ずつ、探し人の手がかりがない奴が一体だ。あとア
ンタのファンが一羽いるのだがサインは書けるだろうか?

『ふむ……儂の手でもなんとかなるモノじゃの。その凶鳥よ、受け取るが良い』

などと言って格好良く“黄龍”と書かれた傷薬をモーシヨボーに渡してくる。何か
思った以上に面白い爺さんだ。

『さて、主らの進む道には心当たりはあるとも。儂はコウリユウじゃからな。まず、ナホ
ビノたる其方の帰る為に進む道は北西じゃ。あつちじゃあつち』

ありがたい。方位磁石も地図もgoogleもないので本当に。

『次に幻魔アマノザコよ……主の探し人はこの者たちと共に居れば見つかるじやろう。一度人の世に行つてみるのも良いぞ』

「……え、なんでそこまで知つてるの? 怖つ」

『高い所に居るからの。良く見えるのじや』

取り合えず害意はないのだからいいだろう。向こうがその気になったら指先一つでダウンだぞ。

と、ありがたく道案内を貰ったのは良いが何か対価は必要ないのだろうか。後払いで『何かをしろ』というのは避けたい。

『ふむ……ならば主らには僕の配下の四霊獣を倒して貰おうかの。連中は最近怠けておるのでな』

……なるほど。

「遠回しに死ねと言われているでありますか?」

「まあ、多分。セイリュウとかビヤッコとかのヤバい奴らだよな? 四霊獣つて。私らで勝てるわけ無いし」

『それでもない。主らは力を使いこなせておらぬだけじゃ。今の時点でも充分に僕とでも戦えるぞ』

……え?

「……え？」

「あー、そうなんでありますか。言われてみれば蘭丸は調子出てないでありますね。ランマニウム不足だとばかり」

あの強さで万全ではなかったのか……恐るべし蘭丸。もはや蘭丸・ザ・グレートでは？

「グレートでありますか。なかなか素敵でありますね」

「レスラーな気配を漂わせてどうするのさ」

とりあえず口車に乗るとしよう。蘭丸が良い感じになれば霊獣など余裕よ。

「ぎゃー！ にゃー！ 死ぬ、死ぬからー！」

「蘭丸は、やれるであります……よ……」

くらましの玉！ 撤退！

早速に喧嘩を売ってボコボコにされました。確かに潜在能力は俺にはある。蘭丸も本調子ならこいつらなどけちよんけちよんよ。ザコちゃんは本気を出せばきつと強いのだろう（多分）

だが、それらは今の俺たちには関係のない事だった。

ちよつと体調を整えようが、ちよつと鍛えていようが、ちよつと自信を付けようが、現在の俺たちには関係はないのだ!

「……で、どうすんのさ。バックれても良いけど、そしたらコウリユウとやり合うんだよ? そしたら流石に死ぬでしょ」

「そうでありますね。高い所を取られているのは面倒でありますよ」

さしあたっては特訓でもするべきだろうか? 鍛え方など知らないが。

「特訓とか嫌だよ私。めんどいじゃん」

「ひとまずランマニウムを補充するでありますよ。お二人も取り入れれば強くなるのでは?」

それだ

という訳で再戦。きちんと4匹を分断して、ランマニウムを摂取した俺たちが奇襲をかける。

ランマニウムとは何か? マガツヒとどう違うのか? そもそも俺たちはランマニウムを摂取して問題はないのだろうか?

などの疑問を放り投げた俺は目の前の霊獣の一体であるゲンブを切り刻む。ビームソードでひたすらに。

俺の攻撃ではゲンブの外皮を少ししか傷つける事はできない。だからといって一発に頼ってはならない。1000発のスリケン……もとい斬撃を放つのだ！」

「……ねえ蘭丸。アイツ変な薬でもキメたの？」

「いえ、普通にマガツヒを取り込んだだけかと。ランマニウムは見つからなかったでありますから」

後の話は気にしない！ アオガミ、出しやすい小技とかないか!??

『人造魔人の戦闘技法の一つにあるにはある』

だったらその使い方を教えろください！

『今君が使っている。それが一度に多くの斬撃を叩き込む技、あらまき 麴正連斬だ』

あ、コレがそうなのか。

そんなふんわりした戦い方だが、ゲンブをぶちのめすのには十分だった。

「やるのお主ら。久方ぶりに負けたぞ」

「一回ボッコボコにされたんだけどね、私ら」

「ゲンブ殿もとても強かったでありますよ。しかし、怠けているようには思えなかった

であります」

「おそろくだが、コウリュウ殿はお主らに強くなって欲しかったのではないか? 創世のナホビノなのだからな」

……なるほど?

「アンタにはなんも分かってないって事がわかったよ」

仕方ないだろう。俺はナホビノ一年生だぞ。

とりあえず、他の連中にも喧嘩を売っていくとしよう。ランマニウムがあれば割となんとかなる。

という訳で蘭丸。くれ

「もう無いでありますよ」

なん……だと……ッ!??

俺はランマニウムなしでどうすれば良いんだ? ランマニウムが無ければ、奴らには勝てないッ!

「……残りの3匹倒したらランマニウムが補充できるかもってさ」

なるほど

何故か蘭丸の口を塞いでいるザコちゃんを無視して、残りの3匹に喧嘩を売ることを決めた。

そして、なんか勝った。

「……アンタ、ちよつと強すぎて引くんだけど」

「お溢れで貰ったマガツヒで調子が戻ったでありますよ。蘭丸もアレくらいはいけるであります」

さて、ランマニウムを頂けるだろうか。

「無いでありますよ」

……さて、ランマニウムを頂けるだろうか

「無いでありますよ」

らんま、にうむは？

「無いでありますよ」

……なるほど、騙されたのか

「アンタが勘違いしたただだよ」

すまない、少し時間をくれるだろうか。おれは少し泣く。

そんなこんなで、俺たちは（何故か）強くなった。

霊獣を探して東京を彷徨ったせいで、現在自分がいる場所はわからなくなったのだけ
れども。

「あ、……最初に蘭丸が落ちてきた所でありますね」

……果てしなく遠回りしたが道が分かったのでヨシ!

ナホビノくんたちは（なるべく無事に）帰りたいたい！

東京砂漠を迷い歩くと、いつしか開けた場所に出た。

そこは大戦時に陥没したのか、周囲より明らかに低い位置にあり、積もった砂はかつての東京を完全に覆い隠している。

現代人感覚だったのならサンドボードの名所だ！ と喜んだのだろうがそこらの砂を掘り返せば何かの死体が見えるのは明らかなのはわかつている。

ので、適度に掘り返して使える道具を探していこう。あ、良いものを見つけた。

「……墓暴きって言わないかなあ？」

「暴かれるような守りをしている方が悪いのでありますよ。お墓を作つてくれる主人や友の大切さが身に沁みるでありますよ」

とはいえ明日は我が身だ。全滅はしないように気をつけよう。

拾ったサンドボードを足に付けて、砂を降りていく。道中見かけた悪魔にボードの動きを見せつけてから高値で売りつけたので完全に黒字だ。元手は拾い物だけだし。

そして砂の坂を降り切ると、砂煙の向こう側にある建物が見えてきた。

あの特徴的な屋根の形は忘れられるものじゃない。国会議事堂が見えた。

周囲にいるのは天使だろうか？ 羽を持った人形悪魔がピシツとした姿でそこにいる。

『ちゃんとしているが故の異物感』というのだろうか。こんな混沌な世界ならば天使も相応にグレているのがイメージに合うのだけでも、その様子はない。

真っ直ぐ過ぎるほどに真っ直ぐだった。

「……その悪魔、止まれ」

天使がこちらを認識した事でピリつく空気、強くはないが、頼りになる空気がする。

とはいえ敵対する気はなく、きちんと『太宰ユウイチロウ』の友人だと答える。天使にこちらに連れて行かれたのだが、無事なのか？ と。

「太宰……ああ、彼か。今は奥にいる。我々の庇護下にあり、無事だとも」

それは何よりだ。彼に会いたいのだが通してはくれないか？ 俺ともう一人は彼を探して旅をしてきたんだ。

「……信じられんな。悪魔の戯言など」

「そして、もう一人とはどこに居る？ 貴様の連れているソレは人ではあるまい」

蘭丸を人扱いしないとは……見る目のある奴め

「え、何でそこで『やりやがるぜコイツ』みたく思ってるの？」

何故なら蘭丸は蘭丸だ。数え方は知らないが一人二人とは数えまい。宇宙の神秘、ランマニウムがうんたらかんたら！

「最後までちゃんとしなつて、ランマニウムがよく分かってないのは伝わったから」

「ちなみに、蘭丸達を数える単位はありますが、この宇宙の言語で説明できそうにはないであります」

……と、話が逸れた。アオガミ、連絡はついたか？

『ああ。位置情報を伝えたのもう一刻ほどでやって来る』

まあ、そういう事だ。

「手勢を引き連れると？」

「あー、一応言つとくけどこれからやってくるのは本当の『人間』だよ。日本の悪魔使いだって」

「……しかし」

「あの建物に偉い奴とか居るんでしょ？ ちよつと連絡しておけばアンタの責任は無くなくなるんじゃないかな？ ルールの中でちゃんとしました！ って」

ザコちゃんその言葉に理があるとしたのか、手下のエンジェルに言付けをして飛ばしていった。

「それじゃあ、少し休もつか」

「ちようどそこに龍脈点もありますからね」

「貴様ら、居座るのか……」

「いいじゃん、ちよつとくらい」

少し申し訳ない気はするが、どのみち選択肢はないので諦めて欲しい。

「……なんと？」

お前が拒否した場合の話だ。悪魔の力を身に付けたばかりで、俺は調子に乗っているぞ。

「人外に、魔道に堕ちる下衆が私を脅すと？」

もし交渉が拗れてしまったら、だ。アンタがちゃんとしてるなら、判断は誤らないと思うが。

誤ってくれた方が、暇つぶしにいいんだ。

「そこまで暴れたいのならば辺りの悪魔でも殺せば良いでしょうに」

なるほど、そうしよう。

「……え、そうするの？」

「マガツヒも貯めておきたいですし、構わないとは思いますが……また迷う事になりそうでありますよ」

今度は大丈夫だろう、遠くには行かないのだし。

そんな訳でそこらの悪魔をしばいて回っていると不意にメガネくんから連絡が来た。なにやら、急ぎの用事らしい。

『大丈夫か?!?生きているな?!?』

生きている。一体どうした?

『……今議事堂前に着いた。確認だがキミはまだ天使は殺していないな?』
殺していない。死んでいるのか?

『軒並みな……僕は先に議事堂の中に行ってみる。太宰が心配だ』

……わかった。死なない程度にな。

『なるべく早く来てくれ』

そんな連絡を貰った俺は二人と目を合わせて砂の山を飛び降りる。

議会へと向けて、一直線に。

爆ぜるような風の音が聞こえる。

議事堂の中では戦闘が行われているようだ。片側は間違いなくメガネくんだ。仲魔

に指示を出しているのだろう声が聞こえる。

もう片方は女性の声。やけに愉しげだ。

「まだ終わりではないだろう？」

「当っ……然だ！」

瞬間、脳内にメッセージが響く。

『衝撃と電撃、呪殺は効かないが火炎はよく通る。後は任せるぞ』

メガネくんはボロボロの身体のままに風障石を起動させる。ザン属性をカットする障壁で守りを固めて、死にかけのマーメイドを固定砲台として最後の1撃を放つつもりに、見える。

「……なるほど、面妖な手を思いつくものじゃな」

そうしてマーメイドのスキル『嵐からの歌声』が放たれた時に俺たちは着弾した。

屋根を突き破って、天井から。

「蘭丸、シュトローム！」

「喰らいなよ、火炎の秘石！」

俺の炎魔法と二人の攻撃が重なり女悪魔に着弾する。

「蘭丸、参上であります！」

「怪我は治すよ、有料でね！」

支払いはマツカで頼む。欲しい写せ身があるんだ。

「……ああー！」

その言葉と共に奥に向かって駆け出すメガネくん。手札は完全に使い切ったのだから。ここにおいても邪魔なだけだ。

「……お主、ナホビノか？」

直撃しても全く応えていない女悪魔、紅い綺麗な着物の彼女は愉快そうにそう尋ねてきた。

それを肯定すると上品に、しかし愉しげに笑い出す。なにかおかしな事でもあったのだろうか？

「いや何、主も先程の小僧も誠に面白き男よなと思っただけよ」

なら見逃してはくれないか？ 俺たちはここに居る友人を探しに來ただけなんだ。貴方とやり合う必要はない。

「しかし、戦わぬ必要もなからうて」

それもそうか。理由もなく殺し合うのが悪魔だからな。

お互いの間の空気が割れる感覚がある。辺りのマガツヒの握り合いは僅かに負けた。

マガツヒを取り込んだ悪魔の姿が変わっていく。女性の形は残したまま、蛇が大きくなっていく。

「我が名はジヨカ、貴様らの名は？」

「ユート。ナホビノだ」

「蘭丸は蘭丸でありますよ」

「……え、私も？ アマノザコだよ」

さあ、全身全霊で殺し合おう。

この場の全員は、自然と笑みを浮かべた。

ジヨカの巻き起こす嵐を抜けて俺の光剣がヒットする。薄皮一枚切り裂いた。

ジヨカの後頭部から伸びる蛇の体が俺の体を打ち付ける。直撃。左肩から吹き飛んだ。

「喰らいすぎだよ！ デイアラマー！」

アマノザコの魔法が俺を癒す。しかし引くわけにはいかない。近接攻撃が届く距離から離れれば風の魔法で塵にされる。

1秒先が見えない綱渡り。正直とても楽しい。

俺が注意を引いている間に近づいた蘭丸が渾身の太刀でジヨカを狙う。ランマニウム光が輝くその刀身が鱗を切り裂き肉を抉る。まだ浅い。

その傷を狙って炎魔法を撃ち込む。焦げるような音が聞こえる。

通つてはいる。ただシンプルに威力が足りてない。

鱗を裂けても、肉を焼けても、魂いのちまでは届いていない。

だから、威力をより高めた一撃を撃ち込まなくてはならない。マガツヒを使った大技を。

「……時にランマルよ。貴様は何故にこやつと共に居る？ 貴様がナニかは分からぬが

ナホビノと共にある理由もあるまいて」

「蘭丸がユート殿と共に居る事には……さしたる理由もないでありますよ！」

「故もなく走狗と成るとはな！」

「今は身軽でありますからに！ 戦う理由は友人であるだけで事足りるのでありますよ
！」

嬉しい事を言ってくれるものだ。

……よし、算段は着いた。アマノザゴ！

「はいよ！ 蘭丸、こつち！」

「了解であります！」

「ここで下がってどうとなる！」

防御を固めたザゴちゃんの後ろに蘭丸が引き下がる。そこに追撃でジヨカが蛇の体を向けてきた。

「いつ………たいなあー！」

そして、その攻撃に対してアマノザコのカウンター『天逆撃』が発動する。自身を攻撃してきた敵を呪うスキルだ。

「この程度の呪いなど！」

とはいえジョカは強大な悪魔。呪いは無効化されて有効なダメージにはならない。

だが、足をほんの少し緩める程度には驚かせられた。

その間に蘭丸が作った太刀をジョカへと向ける。太刀は飛翔してジョカの速度を緩める。

チャージはこれで間に合った！ ブチ抜け、『至高の魔弾・改』！

自身の魔力ではなくマガツヒを使って放つ事で最高クラスの技を再現したマガツヒ技。これはジョカの魂に届き得る一撃ではあった。

だが、命を終わらせるほどの一撃ではなかった。楽しかったがここまでのようだ。

なら、蘭丸とザコちゃんの生きる目を探すために命を捨てていこう。

とか思っていたら背筋に氷柱が突き刺さるような悪寒を覚えた。

一人の男が、ジョカの側に現れたのだ。

軍帽とマントを着込んだ男だ。おそらくはジヨカの主だろう。強い力と精神を感じる。

目の前の男は、自らを八雲シヨウヘイと名乗った。
悪魔の尽くを滅ぼす、人間だと。

「ジヨカ、遊びすぎだ」

「すまん八雲。力に溺れた下種かと思えばなかなか面白き者たちだな。興が乗ったのだ」

「ベテルの走狗にしては見どころはあるが、な」

……お前達は、何故ここを襲った？

「知れた事、悪魔どもが生きているからだ。人の世に仇なす害獣は殺す。おかしな事か？」

いや、おかしくはない。悪魔は性根が人間とは違う以上、先制攻撃で絶滅させるのは理解できる。

ならば、人間はお前の敵ではないんだな？

「さてな」

一応伝えておく。今この議事堂には東京から迷い込んだ奴がいる。ソイツは見逃して欲しい。天使に攫われてここに来ただけの奴なんだ。

「……貴様自身を見逃せとは言わぬのか？」

見逃してくれるのなら、ありがたい。だが理由もなくお前は敵に塩は送らない。そんな気がする。だから俺は、お前の腕一本は持っていく。

「……良いだろう、貴様も見逃すことにしてやる」

……理由は？

「これから多くを殺す貴様を泳がせておけば悪魔狩りの手間が省ける。その程度だ」
そんな言葉と共に八雲は去っていく。側にジョカを連れて。

どうにか生き延びた、か。

「無事か!?」

奥からメガネくんの声が聞こえて来る。側には学生服に黄色の帽子の男。太宰がいた。

なんとか生きています、と彼に伝える。

「生きていますなら今はいい。ここちに来てくれ、ターミナルを見つけた。あれを使えば僕は帰れるぞ、僕達の東京に！」

それから程なくして俺の初めての魔界体験の終わった。メガネくんの起動したターミナルで俺たちは東京に帰ることができたのだ。

そして、俺は今殺されかかっている。

目の前にいる天使『アブデイエル』によって。

「ナホビノの禁を破った者を、神の秩序は許しはしない」

そう、無慈悲に言い捨てられて。

ベテル東京支部の！（あんまり記憶に残らない！）偉い人のお話！

ナホビノの禁、とは何か。

それは考えるまでもない。俺がアオガミと融合した事だろう。人に悪魔の力を与えてはならない、とか人は悪魔の力を求めてはならない、とか真つ当に否定する言葉が思い浮かぶ。

なんだって、自分はもうアオガミと合体しているこのナホビノの形であることが自然だと錯覚しているのだ。

こんなヤバいのを皆が持つていたら日常など5分で壊れる。銃刀法みたく規制するのが真つ当な考えだ。

「……アブディエル殿、ユート殿は被害者でありますよ。『ナホビノ』という力を手に入れたことに関して、ではありませんが」

『その通りだ。責任はこの神造魔人アオガミにある。彼には容赦を願いたい』

……だが、蘭丸とアオガミには真つ当に擁護された。目の前の大天使アブディエルはとても強い悪魔であるのに、だ。

「……こんなに命かけるような奴かなあ？」

尚、ザコちゃんはアブディエルを見た瞬間に縮こまって蘭丸の背中に隠れている。毒は吐くが。

ただ、アブディエルは塵を見る目で蘭丸と俺（というかアオガミ）を見ている。弁明は無意味だろう。

「アブディエル様」

その時、俺が『嫌いな声』が聞こえた。

磯野上タオ。高校一の美少女であり、お人好しであり、人気者であり、人格者であり俺にとって、ただひたすらに気持ち悪い存在だった。

「……ああ、緊張した〜」

「磯野上！ よく大天使様を説得できたな」

「そりゃあ、聖女ですから。偉い人とのやり取りには慣れてるんだよ」

なんだかよく分からないが、磯野上は聖女サマらしい。ケツ……

「……前から思ってたが、お前磯野上の事見ると露骨に機嫌悪くなるよな」

人間的に合わない人物というのは居る。仕方あるまい。

「いや、仕方ないで済まさないですよ。結構傷ついてるからね私」

あまり関わらないようにする事で手打ちにしてくれ。苦手だからとはいえ何かをす
るつもりはない。それよりもこれからの事を知りたいから偉い人を呼んでくれ。

「うん、もう少ししたら長官が来るよ。ユヅル君も含めて半日も行方不明になってたか
ら大事になってたんだよ」

「半日……ハッ! ミヤツは! 妹は無事か!? 何かに巻き込まれては居ないだろうか
!?」

「無事だよ。けど、すつごく心配してるからちやんと連絡してあげて」

律儀に「ありがとう、磯野上!」と返してからスマホで連絡をするメガネくん。いい
兄貴をしていて何よりだ。

「それで、キミが連れてきたこの……人達? は?」

「あ、蘭丸は蘭丸であります。蘭丸星より流れてきた者でありますよ」

平然とかつ飛ばす蘭丸の世界観、蘭丸・ザ・ワールドにより思考を停止させる磯野上。
要点を掴めるようになるまで少し難しいよな。

「……ごめん、どういう事?」

蘭丸は蘭丸星という星からやって来た宇宙人らしい。宇宙から落ちて来るのをこの
目で見た。

「え、え？ ……宇宙人って、森蘭丸なの？」

そうらしい。つまり戦国時代にかの織田信長の小姓だった森蘭丸は流れてきた宇宙人の一人であり、信長はスペースパワーによって第六天魔王になったのだ。歴史スペクタクルだな。

「絶対違うと思う」

戦国時代のフリー素材である織田信長ならスペースパワーに目覚めた信長だって居ても良い。何故なら当時を実際に記憶している人はいないのだから、過去は定かではないのだ。

「そっか………そうかもしれない」

納得する磯野上。つまりはそういうことだ。

「……ねえ、アイツ絶対有る事無い事適当に吹き込んでるだけだよ」

「大まかには合っているでありますよ」

「いやアレ絶対デマカセ吹き込んで後で起爆すれば良いとか考えてる顔だよ。私も同じ立場ならやるだろうから分かる」

と、ぐだぐだな空気が始まった所でなんだか偉そうな人がやってきた。

その顔はニュースでよく見る顔、日本の若き総理大臣だった。

「皆無事なようだなによりだ。私は越水、ベテルの長官をやっている。ひとまず場所を移そう」

「それでは、何から説明しようか……」

「まず、君たちが訪れた魔界。あれが本当の東京だ。18年前に魔界に落ち、今まで悪魔の巣窟と化している」

「では、今僕たちがいる東京は?」

「秩序の神が作り出した偽物だ。神はその力で東京とそこに住む人々を再現したのだ」
偽物という事はなにか不具合、なしては不都合があるのか?

「……この東京は神の力によって維持されている。その力が弱まればこの東京は本当の姿である『滅んだ形』に戻り、魔界と繋がってしまう。そうなれば世界は滅びるだろう」
「だから、さっきのアブディエル様みたいなすごい天使が東京には来てるんだ。東京で戦える人は、みんな18年前に死んじゃったから」

恐ろしい話だ。だからメガネくんのような若造に悪魔を使うプログラムを渡しているのか。学徒動員では?

「返す言葉もない。しかし必要な事だ」

「僕はきちんと同意の元で戦うことを決めたとし、補償や給金もきちんと出る。命懸けな

事以外では悪い話ではないぞ」

「いや、命懸けな時点で結構悪い話だろ……でも、そうするのが『正しい』んだよな」
メガネくんが補足を加え、太宰がこれからのことに腹を括ったのを横目に蘭丸を見る。

蘭丸はザコちゃんと一緒に職員さんと話し込み、テクノロジーにうきうきしている。
楽そうだ。

「では、疑問に思うことはあるか？」

ある。ここにあるターミナル技術で、蘭丸を母星に返せはしないだろうか。蘭丸は宇宙からやって来たのだ。

「一番に確認したいのがソレか……ターミナルは龍脈の流れに沿って情報を転送するものだ。繋がりがない宇宙に転送することは不可能だ」

なるほど。ならば宇宙に送り返してやれるような奴に心当たりはないか？ 家路を助けてくれた友人の助けになりたいのだ。

「……他の惑星に行ったという伝承を持つ悪魔には心当たりはない。しかし、星座になった悪魔や英雄ならば何か知っている可能性はある」

了解した。蘭丸の帰る手がかりはないのは寂しいが、それならば蘭丸に東京を案内しよう。宇宙からの友人には地球を楽しんで貰わねば。

「あの蘭丸という者を本当に宇宙人だと思っているのか?」

宇宙人かどうかは半信半疑だ。だが、蘭丸が元いたところに帰りたい事、帰り方が分からないことは間違いはない。

助けてくれた借りは返したいし、友人として困っているなら力を貸したい。それだけで十分だ。

「ならばベテルとしては君に提案をしたい。ベテルの戦力になれば、魔界へのターミナルをある程度自由に扱う事を許そう」

感謝する。

それだけ言つて蘭丸達のところに歩いていく。そこではストリートビューで色々見て回っている楽そうな蘭丸の姿があった。

「あ、ユート殿! こちら、こちらのガンダムベースとやらに行きたいであります!」
「私ケーキとか、パフェとか食べたい! 奢つて!」

よし、行こう。なあに金はある。

そうして外に向かつて歩き出そうとしたら腕を掴まれた。掴んだのは磯野上、何事か?

「君、アオガミとの合体を解除して! 今悪魔の姿のまんまだから!」

……あ

「ならばアオガミのメンテナンスも行いたい。アオガミは長らく放置されていた神造魔人だ、不具合が出ていないとも限らない」

悪魔人間ナホビノンになっていたのをすっかり忘れていた。

「僕は君が一般生活に戻るか少し心配になって来たぞ……」

そんなメガネくんの言葉を流して、ザコちゃんと蘭丸と滅んでない東京観光へと洒落込むのだった。

「てか、私の人探しの事忘れられてない？」

どさくさ紛れでザコちゃんを東京に連れ込めたのでセーフで。

「入管厳しそうでありましたからねー」

尚、東京砂漠でのアレコレでキャッシュカードが砕けていたりと大変だったのを、なんか凄い坊さんに助けられたのは、また別の話。

「よろしかったのですか？ 彼をそのままにして」

「あいにく今のベテル東京支部には彼らを止める手立てはない。ならば自由を与える事

で自分の責任を自覚させたほうが効果的だ。危険ではあるが、彼自身が危険思想を持つてはいないのだから。——それに、彼を止められる戦力には、これから君がなる」

「僕が、ですか?」

「そうだ。神獣ハヤタロウ、それが君に与える新たな悪魔だ」

「神獣ハヤタロウ……」

「すみません、仲魔のストックが空いていないので少し待ってください」

「……遅くなったように何よりだ」

尚、その『少し』は3時間後だった模様。敦田ユヅルは悪魔合体に妥協しないタイプのサマナーだった。越水は、その何か悪いモノが伝染した様子ユヅルを見て、内心不安になったのだとか。

制服のヤバイ！（カレーの美味しい！）学校の話！

気分的にはとても長い間、実時間では半日の間俺は魔界で旅をしていた。

それは道を見て「あ、あそこミマンさん居そう」という思考の汚染などさまざまなのを残したが、そこは今はどうでも良い。

問題なのは、自分が学生であるという事。

そして、魔界に行った時に学生靴を落つこととしてきた事だ。

なので、俺は、致し方なく

学校に何一つ持たずに手ぶらで登校するのだった。

「……なんか適当なカバンとかなかったの？」

面白いカバンはこの前譲ったばかりなんだ。

「しかし、蘭丸が学生に紛れていても気付かれないモノなのでありますね。制服は着ているのでありますが」

「なんか、……ハイセンスな服だよねソレ」

学ランに白い百合の花柄がちよつとどうかと思うくらいに張り巡らされているこの

服か？ 服としては好きだ。学生服としては死ねと思うが。

「え、そうなの？」

着こなしの苦手な奴が着ると、悲しい事になる。

「まあ、うん。大体の人達は似合っていない感じするね」

当然だが、この学生服は生徒には蛇蝎の如く嫌われている。普通の人にはダサいし、白の花柄はカレーだとかソースだとかが目立つのだ。

しかしこの学食は何故かカレーうどんが信じ難いほどに美味しい。しかも安い。

だから、学校にエプロンを持っていく人間は多いし、なんなら紙エプロンを売り捌いてた奴もいる。

「おはよ………う？」

「……蘭丸さん、アマノザコ、どうして君たちがここに？」

と、ぶらぶら登校しているとメガネくんと磯野上が話しかけてきた。

奇妙な事を言う、学生服を着て学校の方に歩いているのだから理由は一つだろう。

カレーうどんを食べに行くのだ。

「勉強しろ」

と、『ふざけて蘭丸とザコちゃんを連れ歩いていたらなんか行けそうだった』朝の登校はここまで。着替えた蘭丸とザコちゃんにいくらかのお金と携帯を渡して別れる。

今日は学校が終わり次第魔界に行く予定だ。頑張るぞー。

と、靴を履き替えて校内に入った所であるモノを見た。

一見いじめに見える複雑な人間関係現場だ。

隅に押し込まれているのはかつてラクロス部でぶいぶい言わせていた樹島サホリ。怪我でラクロスができなくなったのだったか。

押し込んでいるのはラクロス部の連中とその友人達。

それなりに有名になってしまった学校のイベントだった。

とはいえ校門から見える範囲でやらかしているのは不味いのですこし首を突っ込もう。

学校支給品のタブレットをおもむろに取り出し、音量を最大にして動画の録画ボタンを押す。

「……あん？」

ラクロス部の友人がこちらを見る。それに対して『続けて構わない』とだけ告げてタ

タブレットを見せびらかす。

「チツ……シラけた。行くよ」

ラクロス部だった者が友人を連れて去っていく。ある意味いつもの光景だった。

「……何よ、ヒーロー気取り？」

樹島はいつも通りに、強気な態度を崩さない。このいじめっぽい問題をややこしくしている原因の一つだ。

とりあえずいつも通りに言う。

あのまま続けていれば樹島のサービスシーンが撮れたかも知れなかったので、つい録画していた。だが私は謝らない。

その言葉を聞いて初めて俺の方を向く樹島、明らかに態度が変わるのが見える。

「……気持ち悪いんだけど」

気にしないでくれ、ネットにばら撒いたりはしなないと。

「自分の際どい動画撮られてて気にしない奴は居ないでしょ」

と、文句を言いながらタブレットを奪い、録画を消去してくる。

などとやっている、背後からトタトタと愛らしい足音が聞こえてくる。

「あの！ 樹島先輩、大丈夫でしたか？」

「……何？」

「あ、いえ、その……樹島先輩とあの人達が居たつて聞いて……」
「何もなかったわよ」

と、ぶつきらぼうに言い捨てる樹島。貴様、心配してくれている彼女になんて事を！
という怒りを飲み込んでおく。

「それじゃ、行くから」

「あ、はい。あとおはようございます樹島先輩」

そんな彼女に丁寧にお辞儀をする彼女を背に樹島は階段を登っていく。だが、くらりとして足を踏み外して転びかけていた。

何をしているのかお前は

「……足を踏み外しただけ」

恥ずかしかつたのか周囲を一瞥してから歩き出す。相変わらず改善の見込みはないようだ。

「あの、先輩。ありがとうございます」

と、（俺に向けて！）ペこりと頭を下げてくれた彼女を見る。

彼女の名前は敦田ミヤズ。メガネくんの妹のメガネ女子であり、多分女神である。いや、魔界に女神はゴロゴロしていたから、超女神とかそのあたり。

彼女は穏やかだが勇気があり、誰かのために駆けつける優しさがある。素晴らしい女

性だった。

俺は特に何もしていない。と告げる。そんな俺をみて可愛らしく笑顔を見せてくるあたりこの娘は本当に素敵だ。

とはいえ流石に現実の身近にいる人間をガチ推しするのは彼女の日常に影響が出かねないので同士諸君と共にその心は隠しているのだが。

「あの、樹島先輩は本当に大丈夫でしたか？」

大丈夫だった。今回はラクロス部の連中も一緒だったからな。

「良かった……いえ、いじめは良くは無いですけど、それでも何事もなくて良かったです」

樹島がもうすこし弱ければ簡単に終わる事なのに、難しい話だ。

そんな話を話してから自分の教室に向かう。悪魔になったし魅了魔法とかその辺でどうにかできないか? と考える程度には面倒ないじめつばい現場だった。

樹島サホリのいじめつばいアレコレは非常に面倒な事になっている。

まず、樹島はラクロス部でぶいぶい言わせていた。自分にも仲間にも厳しく、友情よりも、その場の楽しさよりも、勝利を目指して励んでいたガチガチのガチ勢として。

しかし、樹島は事故にあった。その後遺症で以前のようにラクロスができなくなつて

しまった。それが始まりだ。

樹島はラクロスが好きで、ラクロスに命を懸けていた。だからラクロスができなくなつた事に心が折れて『なにもしなくなつた』

それに、現ラクロス部の連中はキレた。彼女達は鬼みたいな樹島の事は嫌いだった。しかし選手としての樹島は尊敬していた。だから、今までの憎しみを叩き返した。『早く戻つて来い』とかの気持ちが含まれていたソレで。

しかし樹島は立ち直らなかつた。というか、立ち直れなかつた。彼女は選手にはもう戻れない。ラクロス部の連中の言葉が重かつたのだろう。

ここで、部外者が入ってきた。

人間、叩かれている奴なら叩いて良いとか、強い奴の仲間になつて弱い奴を叩きたいとかそういう思いがある。だから、本人達以外にはあんまり伝わっていないその叱咤激励（というには言葉が汚いソレ）は周りにはいじめに見えたのだろう。

ラクロス部の奴らは樹島の煮え切らない態度に怒っていたし、言動はエスカレートしていった。樹島は、より腐つていった。

そして便乗して樹島を害する連中が増えてきた。

樹島は性格がキツく、妥協を許さない。結果でねじ伏せていたこれまでと違って今の

樹島には何も無い。だから、彼ら彼女らからすれば殴りやすかった。

誰かが先に殴っていたから、自分もやって良いんだ。そんな理屈で。

最初にいじめの現場を抑えた動画を撮った時、樹島は言った。

「絶対にやめて」と。

いじめにすれば、主犯格にはラクロス部の連中がなる。そうしたらラクロス部の活動が止まってしまう。そんな理由を、言外に込めて。

だから、樹島の現状はいじめではない。誰が認めても樹島自身が認めない。そんな意地だけは、守り通していた。

「はい、小テスト終わり。隣の奴と交換して答え合わせな」

教師がそんな事を言い、隣の席の人間と答案を交換する。

しまった、赤ペンがない。貸してくれ。

「……私も持ってないわよ」

なんと、ならば前の席のサトミさん頼む。

「……汚さないですよ」

と、赤ペンを2本渡してくる。

こんな関係性だから、ややこしいんだよなと

隣の席の樹島と、前の席のラクロス部のサトミさんを見て思う。

まあ、深く関わる気はないのだが。
そんな感じで、その日は過ぎていった。

校門で蘭丸が手を振っている。「ユート殿ー！」と。手を振りかえしてそちらの方に
行くと、「あの、ユートくん」と後ろから嫌な声が聞こえた。

磯野上タオだった。

「おやタオ殿、先日は助かったでありますよ」

「ううん、気にしないで蘭丸ちゃん」

「……あれ、蘭丸って女だったっけ？」

「蘭丸は蘭丸でありますよ？」

ザコちゃんの質問に蘭丸が答える。すると皆の頭の中は疑問符で埋まる。蘭丸だ
なあ……

「で、何か用なの？」

「あ、うん。学校の事で話があつて」

「で、ありますか」

壁にでも話している、と言いたいのだが。

「……なんでそんなに辛辣なのなかあ？ まあ、うん。サホリのこと」

「ならば、あちらの喫茶店に行きませぬか? 先日教えてもらったのですが、とても美味しいケーキを出すそうなのであります。無論我々に訊かれたくないのなら席は離すであります」

「ありがとう蘭丸ちゃん。ちよつと重い話になつちやうけど、ソレでも良いなら蘭丸ちゃん達にも聞いてほしいな」

と、我々は2階にケーキ屋のある寺近くの喫茶店に向かうのだった。

そして、ケーキを味わっている半裸の紅い坊さん『悟劫』と再会するのだった。……
先日はマツカの換金ありがとうございました。

頑張れ東京防衛軍！（正式名称はベテラ東京支部です）

寺の近くのカフェで飲み食いしている我々は、平然とザコちゃんにもスイーツを出すマスターに驚きつつも会議を始めた。

議題は、『樹島サホリをなんとかしたい』だ。

よし、解散。

「諦めるの早くない？」

そうは言うが、もう転校させるくらいしか無いと思うぞ。樹島にその財力がないのは置いておいて。

「それは……そうなんだけども」

と、黙る磯野上。

この女の嫌いな部分はキリがない。根本的に嫌いなものだから何をしても嫌に思えてしまうのだから当然なのだがそれはそれ。

具体的解決策を持たない事、それがこの女の嫌いな点の一つだったりする。

磯野上は『都合の良い人間』だ。誰かの為に誰かの敵になる事をしない。状況の改善のために現状の破壊を企てないし、かといって明確なルールの元に異端の排除も行わな

いどつち付かず。

だから、本題に入る為に回りくどい言い方をする。

まあ、先に嫌いだという結論ありきで考えた事にすぎないのだけれど。

「けど何とかしないとサホリ、潰れちゃうよ」

「……差し出がましいが、口を挟んでも？」

と、優雅にケーキを食べていたエクストリーム坊主がやってきた。横でこんな話をされていたらやはり気になったのだろう。

「え……はい、大丈夫です」

「うむ。その樹島という女子はどうなりたいのだ？ 聞けば、苦境にあつても善意にも

悪意にも流されていないとの事だが」

「負けたくないという事しか考えてないと、俺には見えた。」

「……負けたくないなら、私を頼つてよ」

人気者のお前に怪我を理由に近づいたクズ女になりそうな事が、負けだと思ってるんじゃないか？

「冷たく言うんだね」

他人事な上に馬鹿らしい話だからな。

「サホリの事よく見てるよね、君は」

こんな馬鹿らしい話を思いつく程度には嫌でも目に入るんだよ。隣の席だからな。「その馬鹿らしい話だと、サホリにとっては何が勝ちなの？」

本人にそれが分かかってないからぐだぐだ長引いてんだろうとは思う。

外野が話してどうにかなる話でもないんだが、なんでこんな話をしてるんだか。とコーヒーを一口飲む。あ、美味しい。

「なら、どうしたらいいのかな？」

俺が知るか。お前がやりたいんだろうが。

「ちよつと、そんな言い方は酷くない？」

「ううん、良いの。けど……『要らない』って、言われてても？」

お前は樹島にいい顔がしたいから手助けしようとしてるのか？ 優しい人だと思われたいから気にかけている素振りを見せているのか？

「違う！」

なら要らないとか邪魔だとかくたばれとか言われても問題はないだろ。その程度で悩むな、絡んでくるな、さっさと行け。

「……うん、ありがと！ 行ってくる！」

その言葉を残して磯野上は店を出て行った。ばびゅーんと音を立てていそうな程に超特急で。

「タ才殿と仲が良いのでありますね」

「口では『嫌いだー！』って言ってるのって照れ隠し？ ツンデレってやつ？」

いや、嫌いだ。二度と目の前に現れないで欲しい。

「え……コイツ、本心で思ってるんだけど。目が怖いしマガツヒが冷たい」

「なんと」

「……昨今の若者は複雑怪奇な心をしているのだな」

不愉快な話は置いておこう。せつかくの奢りなのだから……あの女ア！

「あ、レシート忘れてったね」

奢らせるつもりだったのに奢らされた。許せぬ。

……お坊さん、マツカの換金を願いたく。

「この程度なら私が持とう。一応今後この店を鼻屑にしてくれる事を条件にさせて貰うがな」

わかりました。この喫茶店の豚になります。

「そこまでもいいわ」

イケメンスーパー坊主に感謝をし、浄僧寺へと参拝をしてからベテルの本拠地へと歩

いていく。

なんだか、周りの視線が妙だ。蘭丸の容姿に見惚れるのはわかる。ウチの高校のクレイジー制服に目がいくのはよくわかる。坊さんによると悪魔は見えないらしいからザコちゃんも問題はない。

なのに、とても見られている。

「ふむ、監視ではないでありますね。見てる事を隠しては 아닙니다し」「どつちかというと、怯えてる？ アンタなんかした？」

いや、別に。いつも通りだ。

とはいえ邪魔されることはなかったの視線は無視し、道中でお菓子やジュースを買ったりとかしながら歩いていく。

すると、結界に踏み込んだ感覚があった。自分の力より弱い者を近づかせないエストマとかいう魔法みたいな奴だ。

「あれ、悪魔いない？」

「……で、ありますね。誰かが戦ってるでありますよ」

よし、首を突っ込んでみよう。ベテルは地球防衛軍みたいなモノだそうなので、きつとベテルのテーマソングとか歌ってるのだろう。混ざってこようと思うのだ。

「え、なんでテーマソング？」

知らんのか？ 地球防衛軍は戦場で歌うモノなのだ。

「そういえば蘭丸星防衛軍もよく歌っていたであります」

これはR・D・FとE・D・Fのコラボフラグでは……？

まあいいや。

視界の端に悪魔が見える。魔界での初戦闘の相手だった妖鬼ダイモーンだ。あ、今炎に弱いんだったわ。

「写せ身は便利でありますよね。見た目はただの悪魔の写真でありますのに」

ザコちゃんは写せ身をいつになつたらくれるのだろう。天逆撃使いたいのだが。

「アンタに渡すと酷い使い方されそうだからやだ」

酷い使い方か、確かにザコちゃんはサイズと性格が問題だけで見た目は良いからな。酷い使い方は割と思ひ浮かぶ。

よし、ザコちゃんの写せ身を量産出来るように頑張ろう。

「一枚だつて渡さないつての」

視界にダイモーンが電撃で撃ち落とされているのが見える。だが使い手の魔力が低いようではどダメージは受けていない。

丁度いいし、トドメは貰おう。そうれ電撃をくらえー

と、雑にマハジオを当てて、そこに蘭丸が斬り込んで終わらせる。うむ、雑魚だった。

「あ、戦っているのはベテルの方でありましたよ。太宰殿も一緒にあります」
「……えつと、どゆこと？」

ただの通り魔だ、気にしないでくれ。あ、コイツ魔石持ってたわやったぜ。
「ナチュラルに死体から剥ぎ取りしてやがる。……現実だと、グロいんだな」
で、どうしたんだ？ 半殺しにして交渉をするんだったのなら謝るが。

「……いや、助かった。現場研修って事でこの人と一緒に来たんだけど、眠らされちまつてさ」

「おい、寝てると殺しちゃうよー」

ザコちゃんがその人に治療魔法をかける。ダイヤモンドリタという回復と毒などの治療を一緒にする魔法だ。

それを受けたその人は、ザコちゃんを見て「うわああああ!?」と錯乱して銃口を向けた。

いや、流石にそれはあかんだろう

ライフルみたいな大きな銃をさつと奪い、ストック部分で一発殴る。ちよつと小突く程度で。

すると、なんか死にかけた。

「……いや、治したヤツを殺さないでよ」

「ユート殿、ザコ殿の為に殺そうとした…….のではありませんね？」

「そういえばちよつと怒った。それで手加減が効かなかったのかもしれない。ナホビノパワーで回復しておこう。」

「そんな思いから傷を治す『神霊水』を生み出そうとしたら、出てこない。あれ？」

「あ、アンタ今アオガミと合体してないじゃん」

「そういえばそうでありますね」

「アオガミとの合体は以外と大事だったのだな、と改めて思う一幕だった。」

「ところで、何をしているんだ？ バイトなのだろうか。」

「いや前にも話したろ。東京を守る為に、正しい事の為に頑張りたいんだって。だから悪魔使いの訓練してんだよ」

「面白そうだな。どんな事を学んでるんだ？」

「アプリとかマガツヒの使い方とかだよ」

「とか話していると、いかにもな集団がやってきた。重武装のフル装備、軍隊っぽい方々だ。」

「離れろ！ 悪魔あ！」

「あいつはまだ生きてるぞ！ 助け出せ！」

「ベテルを舐めるなよ！」

どうやら、さつき殴つたこの人（気絶中）とバイトの太宰を助ける為に軍隊が来たらしい。大変だなー。と他人事のように思う。

何故か銃口がこつちを向いていて、なぜか俺に敵意が向いていて、何故か悲壯な覚悟が伝わってくるが。

……面倒だし、殺して良いだろうか？

「いや駄目に決まってるんだろ！ おかしいと思えつて！」

だがこの流れだとどうせ殺し合うんだぞ？ だったら先に手を出したほうがスツキリしないか？

あと、総理大臣を殺そうとしたとか悪魔ポイント高そうだし。

「あーもう！ 分かった、分かったから！ 悪ノリで人の命を賭けんな馬鹿野郎！」
とかなんとか言いながらベテルの人を持って軍隊に寄つて必死に説得を始めた。

曰く、『頭がおかしいだけでちゃんと人間なのだ』と。その言葉を聞いて渋々と銃口を下げた軍隊さんはなんかもう駄目な人だなあとしか思えない。太宰がまともに見える程にだ。

力の差を考えたら、あの人たちでは俺たちの誰一人として殺せはしないのに、だ。

騙し討ちとか、暗殺とか、毒殺とかそのあたりを狙わないと勝てない奴に警戒を抱かせてどうするのだろう。そんな当たり前の事を考えて、『そういうベテランはみんな死んでた』という事を思い出した。

東京はよく滅んでいないなー。

「あのチョーカンつてのが強いからじゃない？ 割とアイツだけでどうにでもなるでしょ」

「確かに強い方でありましたね」

そして、めちやくちや警戒されながら俺はベテル本部へとゆくのだった。

ベテルは、ある程度ちゃんとした組織だ。ターミナルみたいなヤバげな施設を使うには事前に連絡して、ルールの中で利用しないとイケない。単純に危ないので。

また、ターミナルの管理ができる能力者も限られている。あの意味不明テクノロジーを調整する技術者とか、もし悪魔がやってきた時に殴り倒す戦力とか。

だから、いつでも利用できるモノではないのだ。

そう、ベテルの吹けば飛ぶような軍隊モドキのプライドの為だけの事情聴取に巻き込

まれて、閉鎖する時間に間に合わなくなったりするくらいには、利用に厳格だった。

これは、怒っていいんじゃないか？

「まあ、そもその話がユート殿があなたの方を半殺しにした事だったり、ザコ殿を野放しにしてた事だったりと故のある事でありますから」

「私コイツとは絶対契約しないつもりだったんだけどなあ……」

そうは言うが、悪魔との契約とかなんか怖いじゃないか。

「私だってアンタとの契約は怖いっての！」

「しかし契約とは名ばかりでありましたな。約束事をきっちり契る事が契約だと思っていました」

なんとなくマガツヒを渡して、何かをしてもらおう。そんな感じだった。

「マガツヒは元から貰ってたし、コイツからの召喚に呼ばれるなんて面倒が増えただけなんだよね」

「なるほど」

まあ過ぎた事をぐだぐだしても何も始まらないんだ。アオガミの見舞いにも行ってみよう。見舞い品は駄菓子やラムネでいいだろう。多分あいつ好きだし。

「なぜラムネ？ ……ああ、売店に一つコーナーが立っているのですからね」

「この丸いヤツもお菓子なの？ 美味しいかな？」

甘くてシユワつと弾けるぜ。

初めて本部に来た時に見た研究員の人を捕まえてアオガミの所へと向かう。

SFちつくな『ケープルがたくさんついていて謎の液体に満たされたポッド』の中でアオガミは眠っていた。改めて見てみるとボロボロの魂をしていたのがわかる。

記憶喪失になって、体も魂もボロボロで、それでもアオガミは俺を助けてくれた。けれど、アオガミに助けられる前から俺はアオガミと噛み合っていた気がした。

「……ああ、君達か」

ふと、声をかけられる。そこにいるのはベテルの長官の越水さん。いつも通りに淡々と、そこに居た。

「アオガミの治療は順調だ。数日も経たないうちに完治するとの事だ」

「へえ、良かったじゃん。たまにアオガミが抑えてくれないとコイツ駄目だからね」

「良好な関係を築けているようで何よりだ。魔界から帰還した神造魔人アオガミはベテルの希望であり、そのアオガミが最も力を振るえるのは君といる時なのだ。アオガミの為に軽拳妄動は控えて欲しい」

とりあえずザコちゃんと契約は結んだ。あと、普段は力を抑えていれば良いのか？

「そうだ。アオガミと同化した事で覚醒した君の力は果てしない。もう少し慣れれば東

京程度なら2時間程度で滅ぼせてしまう程だ。学生である君に言う言葉ではないかも知れないが、学生気分ですごきるのはやめてくれ」

面倒だ。

「力のない者たちの安寧の為に、法の神がルールを作ったのだ。力のある君のような者が割を食うのは、まあ仕方のない事ではある」

などと話していた時、ふと気になった。

アオガミの顔は、越水総理によく似ていると。まさか総理大臣は悪魔だったのか？

「……さてな。否定の言葉は言えるが、それに証は立てられない。人を模す悪魔は多いからな」

まあ、今の適当な日本のままなら総理が悪魔でも構わないのだが。貴方が気に食わないなら人でも悪魔でも殴りに行くヤツは出るのだし。

「……ならば、殴られないように努力するでしょう」

そんな話をしていたら長官が蘭丸の事を訝しげに見始めた。何か蘭丸の顔についているのだろうか？

「いや、森蘭丸とはこのような人物だったのだろうか？ とな」

「蘭丸は蘭丸でありますよ」

「蘭丸星からやってきた宇宙人、だっけ？」

そうだ。蘭丸の中の蘭丸、謎の蘭丸Xを決める戦いへの参戦を許されたほどの凄まじい蘭丸だ。

「ユート殿、照れるでありますよ」

と、事実を述べただけなのに長官は複雑な顔をしていた。不思議だ。

そんなこんなで、何かありそうで何も無い一日は終わった。

アオガミが居ないと微妙に弱くなっているの、さつさと治ってほしいものだと思いながら。

突然の襲撃！（東京はいつもピンチ！）

突然の事だった。

空が凶々しい紅色に染まり、土台である『偽物の東京』は不安定になり、その不安に惹かれて悪魔が現れた。

そんな異変が起きてからものの数分で、東京はもう滅びかけている。話は聞いていたが本当に東京はズタボロだったのだな、なんて事を思った。

それはそれとして、今マスターデュエルで昇格戦なんだが。

「アンタは本当に……」

「して、どうするでありますか？ アオガミ殿はまだ治つてないでありますよ」

戦えるには戦えるがアオガミが居ないと移動に時間がかかるからな。かといって今からベテル本部に行っても邪魔だろう。

ひとまず悪魔の入り口になつてる辺りで戦つていようと思う。蘭丸はどうする？

「義を魅せざるはなんとやら、でありますよ。蘭丸も行くであります」

ありがとう。

「……ねえ、私には聞かないの？」

ザコちゃんはもう俺の下僕だから……

「くたばって私を自由にしろよクソやろー」

そんな軽口を叩いたザコちゃんは、特に不快な顔はしていない。

ならばちよちよいと皆殺しにしようか。殺しても良い悪魔どもを。

h·r·

目の前に、ベテルの職員だった人がいる。下半身がなくなっていたので食われたのだろう。

近くに女の人が転がっている。頭がなかった。

少し遠くに命乞いをしている男がいる。腕がなく、顔は蒼白だ。もうすぐ出血多量で死ぬ。

学生寮から駅前まで2分しか経っていないのにコレだ。人間は脆弱がすぎる。ナホピノになって良かったと割と本気で思った。

こんな状況を作った悪魔達を、マハジオで焼き払いながら。

「強くはないけど、多いよコイツら！」

「出所を抑えねば手が回らないでありますよ！ 様子見は無理であります！」

同感だ。だが出所は無数らしい。連絡が来た。

各地の結界をちゃんと守ればマガツヒ不足で粗方死ぬらしいから、防衛に回れと。

「どんくらい守つたら良いのさ！ めちゃくちゃ死ぬよ！ 私たちもマガツヒ切れて殺されるって！」

「そうであります！ それに餓死する前に人を喰われればマガツヒは補えるでありますよ！」

なので、蘭丸は手当たり次第に悪魔をやってくれ。結界は俺とザコちゃんが居ればなんとかするさ。

「ッ！ 承知したであります！」

一刻を争う現状を鑑みて、蘭丸は空を駆ける。

死体を一瞥してから結界の基点である浄僧寺へと向かう。

ちょうど良いところに空を飛ぶ悪魔が居たので、交渉^{脅迫}して足にしよう。

俺は悪魔召喚プログラムのレクチャーを受けたのだから。

快く足になってくれた空飛ぶ馬の妖精ケルピーくんにちゃんとトドメを刺してからお寺に降り立つ。

そこでは、スーパーイケメンウルトラ坊主である悟劫さんが悪魔と殴り合っていた。

手が足りなさそうなので、バチバチと電撃をかましつつ、遠くから魔法を撃とうとしていた悪魔を蹴り砕く。

「少年か！ 助かる！」

そう言いながら墮天使アンドラスの遺体を盾に悪霊レギオンの首を握ぐ坊さん。やっぱウルトラ坊主だ。

残り数体はザコちゃんの疾風魔法で細切れになった。ひと段落だろうか？

「……そのようだ」

一息つきながら魔石で回復を行う坊さん、俺も一応ソウルドロップという魔力が回復する飴を舐めておく。ザコちゃんの視線が痛いので普通の飴を投げ渡した。

「ベテルに現状は伝わっているか？」

それなりに。急いでいたので見落としてるかも知れないが、結界があれば悪魔は餓死すると聞いている。だから守れと。

「そうだ。だがそれだけではない。本来この東京の結界はこの程度の悪魔に抜けられるモノではない。東京があいまいになってきているからこそ、対悪魔結界は日々強化されていたのだ」

大物が居ると？

「そう考えるのが妥当だろう。まだ東京にできては居ないだろうが、そやつを仕留め

ねば何も終わらぬよ」

……魔王軍とかいう負け犬連合だろうか。奴らの手勢は偉そうにしている割に小物ばかりだったか

「そこまでは解らぬ」

「負け犬連合って言い方は……合ってるわ」

とはいえ、今蘭丸が暴れ回っている。大物が居るとしてもそのうち死ぬ。

「過信が過ぎるのではないか？」

蘭丸は殺しに関して天才的だ。結果的に殺せれば手段は選ばないし、それを実行できる強さも汚さも、諦めない気高さもある。

それでも無理だったなら、俺たちなりを使うだろうから。

「……修羅、であるか」

蘭丸星人の普通の精神性だろう。その思考に躊躇いはなかった。宇宙は広いらしい。

「修羅の民、蘭丸星人か……この世は広いと思っでは居たが、宇宙も見ればさらに広いのだな」

さて、一息ついた所でおかわりだ。

やってきたのはそれなりの悪魔たち。凶鳥アンズーと鬼女ラミアがなかなかの数で来た。

「あの2種には電撃は効かぬ。気を付けろ」

なら殴り殺せば良い。

「道理だ!」

そんな肉弾戦をかまし始めた俺たちを見てザコちゃんは言った。

「いや、蘭丸のこと修羅とか言えないでしょこの人間ども」

爪で切り裂こうとしてきたアンズーを捕まえて首を折り、電撃を撃ってきたラミアは持つてるアンズーの爪で切り裂いた。

これで全部だろうかと見渡すと、不意に『覚えのある』モノを感じた。

上空を見ると、空がバリバリとガラスのように割れている。その割れた穴からは黒いものが無理やりに出てきていた。

呪い、恨み、怒り、そういったマイナスの感情が塊になっているようなその悪魔を見る。

その名は『邪神ラフム』黒い触手が塊になっているように見えるヤバいのだ。

アレが大将首だろう。仕留める為に電撃を放つ。通りは普通だ。

「ふん」

そして、普通に手傷にすらならなかった。

「ヒトの子程度に、我をどうにかできるとでも？」

「うわ、体力が多いヤツだよ。めんどくさ」というザコちゃんの眩きには同意するが、一応話は通じるらしい。

ここで死ぬか、逃げてから死ぬか、帰ってからいつか死ぬか、好きに選んでくれ。

「笑わせる！」

その言葉と共に呪殺を飛ばしてくるラフム。相応に強い力だ。長丁場になるだろう。そう思い防御を高めようと閻障石を起動させようとした。

しかし、手元に石はなかった。

買い込んだ石はまだ残っていた筈だと思ったその時ようやく思い出す。

俺は今、ナホビノではないのだと。

「何やってんのキアンタはあ！」

ザコちゃんに庇われて致命傷は受けずに済んだ。しかし道具を取り出す事が出来ないのは致命的だった。

ナホビノとして当たり前のように使えた『どこからともなく道具を取り出す』事。自分より強い悪魔を殺せたのは力以外で戦っていたからである。

従って、今の俺は力しかない状況でこの魔神と殺し合わなければならなかった。

「おっけー分かった。手元にあるヤツは何？」

ザコちゃんはさっぱりと理解して現状を確かめようとする。しかしあるのは人間に戻った時に手元に残していたモノだけ。ソウルドロップと、魔石と、アレだけだった。「りょーかい」

隣の坊さんに目配せをする。『正気か?』というような目が痛い。さつきまでイキリ倒していたのにやる事がやる事だからだ。

「何を企んでいるかは知らんが、生かしてはおかぬ!」

まあ、コイツの性格は理解できたのできつと無駄ではないだろう。そう思い幾度となく命を救ってくれた必殺のアイテム『くらしの玉』を使って戦いから逃げるのであった。

「少年、策はあるのか?」

浄僧寺の中に逃げ込んだ俺たちは、息を整えながら作戦を立てようとする。

疲れた頭ではさして良案は浮かばないのだが、それでも方針はひとつだ。

増援が来るまでおちよくって、アイツの魔法でやってくる悪魔を殺させる。

結界を守らなくてはならない以上、隠れ続ける事はできない。ラフムを相手にしながら他の結界を壊そうとする奴らは相手にできない。

必要な事だけを考えたら、実現可能なのはコレだけだった。

「……死ぬ気か？」

「違う違う。この馬鹿はそんな深く考えてないよ。あのラフムってヤツをおちよくりただけ。後から理屈付けてそれっぽく言い訳してるんだよ」

失礼な。おちよくりたいだけじゃない。ちゃんと殺したいと思ってるぞ。

「なお酷いわ」

そんなやり取りを見て坊さんが「こんな人物が、ナホビノなのか……」と項垂れてい
るように見えたのが印象に残った。

メガテン的女子高生問題! (友情のもつれにも気をつけて!)

ラフムを見る。使う技は主に呪殺属性、荒っぽい性格でプライドが無駄に高い。怒りで頭が茹つているからという訳でなく、シンプルに性格が不細工なのだろう。

アギを打ち込み、怯ませる。こちらに気付いたラフムはすぐにマハムドオンを放ってくるのですぐさま方向転換。悪魔の群れに突っ込んで、壁にする。

そして坊さんがラフムに一撃を加えてから俺はまた隠れる。坊さんは守りを続けてザコちゃん坊さんの回復。

そう長い時間は経っていないと思うが、それでももうネタ切れだ。

ラフムを煽るにはザコちゃんのボキヤブラリーでは足りなかったらしい。

「この、羽虫共があ!」

そう言つて、怒りに任せてマガツヒを高めるラフム。大技が来るツ!

『滅びのシルト』

その波動は坊さんの貼った閻障石と同じような結界を無視し、俺たちに大きなダメージを与え、かつ足を動かなくさせた。

そして、二発目をチャージされる。この手番でケリを付けるしかない。

マガツヒを高め、全ての力を攻撃に注ぎ込む。

俺の放ったアギラオ、ザコちゃんのジオンガ、坊さんの菩薩掌を全て直撃で貫つたら
フムは。

「その程度かあ!」

と高らかに吠えた。避けることはしていない。マガツヒを高めているからだ。ダメージは致命傷には届いていない。体力が高く、この攻撃では足りなかったのだ。

つまり、俺たちの勝ちである。

「遅くなってすまない、少年」

構わない、と答える事すらなくナホビノに戻る。これで、奴の動く前にもう一度技を出せる。

高めたマガツヒのまま、亀正連斬を。

「グッ!?!」

手応えあり。魂まで届いた。

ヤツはもう、虫の息だ。

「ふざけるな、ふざけるなあ! 我が、我はまだ死ねん! 死んでたまるか!」

その最後の咆哮は結界の穴から更なる悪魔を引き込んだらしく、更に悪魔がやってきた

それを見る事なく一目散に逃げ出すラフム。追撃に行くには目の前の悪魔達は強く、俺たちは消耗している。背を向ければ殺される程度には。

だから、先に目の前の悪魔に対処してした。

してしまった。

『少年、ベテルからの通信だ。……先程逃したラフムが、学校に侵入したと』

嫌な予感がした。根拠はない。ただラフムを見て覚えていた既視感と学校という単語が繋がりがかけただけ。

「行くが良い、ここは拙僧が何とかしよう」

悟劫さんはそう言って俺を送り出す。感謝の言葉を告げて、俺は学校へと駆ける。

そして、多くの見知った制服を見た。

白い花柄は赤く染まり、胴体が欠けていたり、頭が割れていたり様々だ。

ゲラゲラと笑う悪魔達がいた。

殺しを、力を楽しんでいた『力のある側』の奴ら。あの様子を鏡を見ている気持ちになる。

とりあえず皆殺しにして先に進む。そして、校舎に空いていた穴から校内に入る。

「ヒイツ？？」

怯えていた奴は、太宰だった。戦う気力はもう無いのだろう。邪魔だから逃げろと告げて進む。

「クソっ！ どうして僕はッ！」

傷だらけで憤っていた奴を見る。敦田だった。戦う力はないのだろう。邪魔だから逃げろと告げて進む。

そして、たどり着いた。

ラフムがいた。ラフムは、ごく自然体だった。

ラフムの側に樹島サホリがいた。その目は曇っているようで、しかし今までよりも自然だった。

樹島、と声をかける。

「……ああ、アンタか」

ラフムと共にこちらを向く樹島。『よくもやってくれたな』と二人から伝わってきた。

「アンタが、ラフムを呼び出したの？」

「違うわ。コイツは私を探してたの。私がコイツを心のどこかで求めていたみたいに」

それは、復讐の為か？

「復讐……まあそうかも。ずっと私だけ辛かった。ずっと私だけ痛かった。もっと人間らしく生きたかった。だから全部が憎かった」

曇った目で、そんな事を言う。

「それも全部、私が弱かったから。私に力が有ればよかった。全部殺して、勝てるくらい
の力があれば私はよかったの」

強ければ、アイツと並び立てると?

「……本当ムカつくわねアンタ。けど、多分その通り。タオみたくなりたかった。タオに頼られたかった。タオに好かれたかった。そんな馬鹿な事を考えてた……けど、気付いたんだラフムと繋がってようやく」

どんな事に?

「アイツは、私やアンタみたいなのに媚びを売る為にあんな風に生きてたんだって。アイツの目的は知らないけど、アイツは嘘っぱちだらけのクソ女だったのよ」

そう言って教室の隅を指差す。そこには倒れている磯野上がいた。近くには、腹に大穴が空いている女生徒が一人、頭から血を流して倒れている生徒が一人いる。

やったのは、樹島だ。

「もう全部が馬鹿みたいで笑うしかないでしょう?」

その言葉に、肯定で返す。

それはそれとして、ラフムはこれからどうするつもりなんだ？

「我は、サホリと共に復讐を果たす。我を貶め、サホリのような強者を縛る悪法を作った神を地に落とし、我の世界を創り上げるのだ！」

そうか。

薄っぺらいな。

「何？」

それは単に嫌いな奴を殺したいってだけだ。ごちゃごちゃ飾るな。

「貴様ツ！」

「その通りじゃない。私あんたがみみっちい事なんて分かりきった事でしょう？」

ついでに言うなら、樹島は新興宗教に嵌った奴みたくなくて。事実を色眼鏡で歪めてる。

「………何？」

その奴は確かに日和見のクズ女だが

クズなりに、本気でお前の事を親友だと思っていた。嘘だらけでも、そこだけは否定させない。

「……やっぱ、アンタってタオの事好きでしょ」

死んでほしいくらいには嫌いだよ。

自然とマガツヒが高まっていく。樹島はラフムの触手に掴まれ、ラフムは今までと別次元の力を放っている。

そこに『見つけたぞ、悪魔め!』と天使達がやってくる。

天使の方を見る事なく『滅びのシルト』で消し飛ばしたラフムがいた。

そして、その余波からこの体は人間を守っていた。アオガミはどうやら反抗期だったらしい。

『少年、誰に向けて言い訳をしている?』

と、俺の位置を見て樹島は動揺し始めた。

「……え、嘘。なんで? 私アイツまで殺す気は無かったよ?」

「あの女は、貴様の敵だったぞ」

「そうだけど、違う、違うのそれは。え、違うよ、私は……どうして?」

「サホリ、私の声に従え。貴様は貴様の心に正直に動いただけだ。何も間違っていない」

その言葉を皮切りに、ラフムと樹島の魂がズレていく。先程まで一つにしか思えな

かったモノが、分たれていた。

「嫌、離して！ ラフム、離して！」

「貴様が我を使い、貴様が行ったのだ」

「違うの。私は、私は！」

「サトミだけは、絶対に恨んでは無いんだから！」

俺の後ろで倒れ込み、まだ息のあるラクロス部のサトミさん。彼女は樹島の学園生活を破壊した元凶であり、樹島を憎んですらいいたが。

同じ部で道を同じくした戦友だったのだ。

「おのれッ！ 我に歯向かうか人間が！」

「黙って！ アンタだって私を人形にしようとしたクセに！」

次の天使達が窓から見えた。

旗色が悪いと思ったラフムは、樹島を連れて魔界へと消える。

この辺りは今、東京が不安定になっているのだろう。ナホビノである俺なら追いかけて行けそうだ。

「ユート……くん……」

虚な目をした磯野上が俺に言葉を投げる。

「サホリを……助けて……」

そんな言葉に、返す言葉は一つだった。

「お前がやれ」

回復の水、神霊水を生み出し磯野上にふりかける。傷は治ったし、マガツヒはそのうち貯まる。

あとは蘭丸についてだが、もうすでに魔界にいるようだ。魔界側からあのランマニウムとかいう力を感じる。

「……ねえ、私も行って良いよね」

ザコちゃんが珍しい事を言う。ぐだぐだ逃げようと思つたのだが。

「なんか、モヤモヤするんだ。だから」

そんなザコちゃんに「ありがとう」と告げて、魔界へと踏み込むのだった。

肩にベテルの聖女様をお米様抱っこしながら。

魔界のシナガワ大冒険！（したのは主に太宰くんです）

「大丈夫!?？」

悪魔との戦闘がひと段落し死体から物を漁ろうとしていると後ろからうるさいのが来る。

どうにも心配している様だった。被弾はあまりしていないのに不思議なものだ。

「え、アンタクリティカル食らってたじゃん」

俺は今物理攻撃に対して耐性を持っている。オニの写せ身でなんやかんやしたのだ。

「……まあ、邪教の世界のアレは意味わかんないよね」

言われるがままにピアノを弾いたりしたらなんか良い感じになるのだ。

「……でも、怪我してない?」

魔力がもつたないだろう。その辺のマガツヒなり傷薬なりで治る。

「なら、良いけど」

しかし、結構な人間が魔界に居るようだ。新しめな鞆だの学生証だのがちらほらある。

悪魔にとってほかの人間は餌くらいだと思っていたのだが。

「んー、多分だけど交換用じゃない? 狙いの人間を楽に手に入れられるかも知れないし」

「そうでなければ食べれば良いのか。」

「……ひどい」

ああ、酷いな。

なにせ、全く意味がない。結局殺し合うのだから。敵に力を与えかねない者を生かしておくなど百害あつて一理なしだ。

「いやいやいや、アンタ人間の事忘れてない?」

忘れていない。これから抱えきれない人間を見つけたらきちんと殺していくとも。

「何で!? 同じ学校に居たんだよ!?」

逆に聞くが、同じ学校に通つてた真つ当で弱い人間を引き連れられるのか?

どうせ守れず死ぬなら、殺した方が早いだろう。

「それは、違うよ……君の中で正しい理由があつても、それは違う」

とはいえ安全な場所を確保できればその限りではない。この辺りの力のある奴を下僕にしよう。ザコちゃん、心当たりは?

「んー……この辺りだと妖精かな? 妖精王オベロンとそのお嫁さんのティターニア。悪魔の中では比較的まともなんじゃないかな? お菓子持つてくと色々交換してくれ

たし」

ならそちらの方に行ってみるとしよう。樹島の行方についても聞けるかもしれない。

「……サホリ」

では、アオガミ。何人まで行ける？

『聖女タオの防衛能力は高い。10人程度なら支障はないと思われる。この付近の人間の気配は5つ、全員拾って行けるだろう』

了解だ。10人目以降は切り捨てる。

「それって、私が守れってコトだよね」

そうだ。お前が守りたいなら、お前が命を懸ける。

「……上等だよ、やる。これでも子供の頃から聖女だったんだから」

その返答をとりあえず信じて、周囲の人間を探索し始めた。

「それはそれとして、ちよつと言葉が足りないと思うんだけど」

「あー、つんでれ？って奴？」

やめろ貴様ら、殺すぞ。

「なあ、夢だよなコレ!?? そうだよな磯野上!??」

「……ねえタオ、私たち友達だよね? 守ってくれるよね?」

「……………なんでもまだ生きてるの?」

近くの悪魔を殺したりしたものの、案外あっさりと生徒の回収は進み、残りは一人だ。一人気絶しているし、一人は多分心が死んでいるが。

「大丈夫。私たちがいるから」

そんな彼らに『見知った顔』であり『善人』の磯野上タオはまささく救いの手に見えたのだろう。重いパニックにはならずに着いてきている。混乱している男子生徒とて、肩には気絶しているやつを抱えているのだから。

「というかアイツメンタル強いな。」

『理解が追いついて居ないのだろう。故に言われるがままに動いていると推測される』

指示待ち世代の日本男子も捨てたものじゃないのだな。などと考えていると前方から戦闘音が聞こえる。

「俺が、俺があー!」

血反吐を吐くような声がある。声の主は太宰イチロウ。先程学校に置いてきた気がするのだが、立ち直って魔界に来たようだ。

戦っているのは狼男。魔獣『ルー・ガル』

素早い動きで駆け回り、太宰の操る悪魔を切り刻んでいく。

太宰の足元には、女生徒が一人。なんともわかりやすい場面だ。

「ハアツ！」

分からないのは、なぜ太宰があれほど高位の天使を従えているのかだ。太宰の指示で動いている以上制御下にあるようだが、それにしたって天使『パワー』とは豪勢だ。よほど好かれたらしい。

とはいえルー・ガルーも強力な悪魔のようで、天使ももうすぐ死ぬだろう。

「……お願い、助けてあげて」

そんな場違いな言葉が背中からかけられる。何を言っているのか分からない。なぜアイツに情けをかけるのだろうか？

「太宰くんは仲間だよ!??人間なんだよ!??」

……ああ、そういう事か。と納得する。どうにもベテルの聖女様には太宰イチロウが死にかけていると見えるようだ。

「あ、ホントだ。エグい事するねあの太宰って奴」

やっていることはシンプルだ。耐え抜いて、敵が息切れしたところで致命の一撃を入れるということ。

ルー・ガルーがもう引き返せないタイミングまで引き込んでから『宝玉』でパワーを

治療する太宰。そして直撃を耐え、高めたマガツヒのままに『メギド』の光をルー・ガルーへと叩き込むパワー。

……あ、仕損じてる。トドメ貫お。

氷結魔法ブローラをギリギリ逃げる足を残して居た奴に叩き込む。野暮なことをしてしまった気がするが、あの機動力の敵を生かしておきたくはないのだ。

「……来てたのかよ、お前」

来ていた。磯野上が治療の術を使う。息が整うまで休め。

そう言うと、ホッと一息ついた後で

「……だけど、樹島が危ねえんだ」

なら、少しの間そっちは頼む。コイツらを安全な場所まで送るまで。

「分かった……一応、樹島はあつちに向かったよ。黒い、ラフムって悪魔に捕まってる。今にも死んでるかも知れねえ」

「太宰くん……」

「悪い、言い過ぎた……怪我、直してくれてありがとな」

それにしても何があった？ その天使といい証かされたのだろうか？

「敦田の妹が、俺を庇って悪魔に攫われちゃったんだよ」

その言葉から湧き上がる殺意を抑える。悔いているのだから、あの子の安否次第だ。

「ミヤズちゃんか？」

「ああ……それでさ、自分が本当に小さく思えちまつて。だから後先考えねえで魔界にやつてきて……アブディエル様に、力を授けられたんだ」

なるほど、悪魔の誘いに乗った訳か。

「アブディエル様は正しさを信じる事を教えてくれた。そりやおつかないところもあるさ。けど俺はアブディエル様の正しさを信じたと思って思ったんだ」

その目に曇りはなく、しつかりと今と前を見つめている。

「だから、戦うって決めたんだ。お前みたいに強くななくても、あの子みたいに」

それで、ミヤズちゃんは？

「お前と居た蘭丸って奴と妖精の森に行ってる。怪我した奴らの治療とか、助けが来るまでの避難とかそういうのを助けてくれないかって頼みに行ってる」

せんきゅー蘭丸ふおーえばー蘭丸。奴はやはり素晴らしい蘭丸だ。

と口に出しそうになるのを抑えながら、了解したと告げる。交渉がどう転ぶにしても妖精の森に居るのは確かなようだ。後ろの荷物共を置いていくついでに『オハナシ』しに行こう。

「体力も魔力も戻った。俺は行くぜ。お前は皆を頼む」

すぐに向かう。それまで死なないようにしろ。

「おう」

そうして、妖精の森へと足を進める。

東京の跡地にできた複雑な廃墟迷路を抜け、天然なのか破壊の跡なのか分からないの洞窟を抜けると大きく美しい森が見えた。

そして、そこには地味目な見た目ながらも気高く輝かしい心を感じさせるメガネ美女と性別不定形宇宙人たる蘭丸が、妖精王に傳かれている姿があった。

尚、次の瞬間オベロンは嫁さんに蹴り飛ばされていた。

マガツカ怖いぞ悪魔の巢！（倒せばボーナスがつぽりです）

蹴り飛ばされていた妖精王オベロン、蹴り飛ばしていた王妃ティターニア。強さ的にもティターニアの方が強いあたり、カカア天下なのだろう。

「ユート殿ー！」と元気に走り寄ってきた蘭丸によると、なんとあのオベロンたる悪魔はミヤズちゃんを口説こうとしたのだとか。見る目があるのは褒めてやるがその首はいずれ落とす。

「なんだか、すいません……」

しゅんとした様子で謝るミヤズちゃん。なんとも可愛らしい。愛らしい、素敵だ。

だがそれはそれとしてこんなにも悲しませたオベロンの首は落とす。なんなら晒す。

「夫が失礼を」

「いえ、こちらこそ申し訳なく……」

「とりあえず今は皆の治療をどうにかするでありますよ。急ぎで必要な物資は魔石と包帯でありますね？」

それなら在庫がある。これで足りるだろうか？

「ええ、十分です。重症の者にはまた別のモノが必要ですが一先ずは」

出先で見つけたなら拾っておく、何が必要なんだ？

「黄金のリングが必要となります。きちんとした人間の方にはきちんとした薬が必要なのですよ」

きちんとしてなければ魔法とかでいいのだな。

「うん、覚醒した人は回復魔法とかの効きが良いんだって。ベテルで教えてもらった」
なるほど。悪魔は死んでも蘇らせるからな。リカームとかで。

「意外と便利でありますよね、悪魔とは」

「そうだよ。まあ悪魔は悪魔で色々あるんだけどね」

それと、申し訳ないが後ろの連中を森に置いてくれないだろうか？ もう一人魔界で遭難してる奴がいる。そいつをどうにかしてから帰る手立てを考えたい。

「ええ、構いません。ナホビノのアナタと敵対する気は今のところありませんもの」

「まあ帰る手立てを整える必要はないと思うんだけどね。東京もうダメみたいだし」

……そんなものなのだろうか？

「ベテルの皆は頑張ってる。だからきつと大丈夫」

……まあいいか。

蘭丸、これからラフムという悪魔の所に行く。手を貸してくれないだろうか？

「申し訳ありませんユート殿、今この妖精の森を離れる訳にはいかなないのでありますよ」
なるほど、防衛か。

「はい。ユツル殿がこちらに来るまでは蘭丸が守ると約束したのであります」
いや、構わない。アオガミとザコちゃんがいれば割と何とかなるからな。

「……え、私のことそんなに信頼してるの？　すごい複雑なんだけど」

それに今回はコイツが同行する。回復はできるから、死にはしないだろう。

「……うん。任せて」

「なるほど、頼りにするでありますよタオ殿。ユート殿をよろしくであります！」

妖精の森を離れ、東京砂漠を歩いていく。

太宰から聞いた方向へ行くと、血の跡がちらほらとあった。赤い血であり人のマガツヒの感覚がある。これは太宰のモノだろうと思つたが、違う気もする。これは太宰とメガネくん両方のモノだろうか？　かなりのマガツヒが流れ出たようだ。

「……ツッ？　急がなきゃー！」

そう走り出そうとする磯野上を抑え、感覚を研ぎ澄ませる。

太宰がきちんと戦っている所を一度しか見た事はない。しかし、その一度の戦いだけ

で奴は『しぶとい』ということは信じられる。

敦田とは魔界で一緒だった。奴は力は強くないが、呆れるほどに『したたか』だった。負傷し、逃走したのは事実だとしても、この痕跡を残しているのは理由がある筈だ。

「だとしても、二人が死にそうになってたら!? 急がないと!」

だから、ちゃんと位置を把握した。どうにも『マガツカ』に囚われているらしい。

最短距離で跳んで行くぞ。

「うん、分かった!」

「そこで躊躇いなく抱きつくんだから不思議な関係だよねーホント」

ザコちゃんを掴み、磯野上を抱え、ナホビノの跳躍力で真っ直ぐ行く。このあたりは『妖獣バグス』という空飛ぶグロいぬいぐるみがあるので足場には困らない。

そうして、マガツカの中に突っ込んだ。スーパーヒーロー着地をしたところだが、あれは地味に体を痛めるのでやめておいた。

中には死にかけの太宰を守る『天使パワー』に『邪龍バジリスク』と『幽鬼ピチューシャ』が群れをなして襲っていた。パワーは当然死にかけているが、しかし全ての攻撃を防いでいる。太宰は死にかけの体を無視してパワーの治療に集中している。

そうして耐え続けている目的は何かある。そう考えて獣の気配を感じた。

そして、『行くぞ』という鋭い殺意が乗った合図が聞こえた気がした。周囲の悪魔は太

宰に惹かれて気付いていない。だから、背後からバジリスク達に対して『轟雷』を叩き込んだ。電撃に弱い奴らはこのナホビノの雷に焼かれ、ピチューシヤは耐えていたが俺とは別方向からの炎に焼かれて灰になった。

炎を放ったのは、『妖精カハク』そのサマナーは敦田ユツル。

「やつと……来たかよ……!」

「すまない、カハクの回復まで時間がかかった。もつともハヤタロウはまだ倒れているからこれ以上は難しい。大物は頼めるか?」

ああ。と頷いて剣を構える。

このマガツカの主は『邪神バフォメット』。黒い山羊のような姿で、炎を従えている悪魔だ。

理性もなく吠えるバフォメット。その体は傷だらけだ。太宰と敦田は相当にコイツを追いかけていたようだった。

放たれるのは火炎魔法マハラギオン。強大な炎で周り全てを焼き払うつもりだったようだが、この程度は問題ない。アオガミが修理された事で基本性能が上昇し、力は強くなったのだ。ナホビノとしての俺たちの力を完全に出力できるほどに。

「秘剣『逆風』」

メギドの光と同じ性質の剣をバフォメットに叩き込む。ガードして耐えようとする

も、そのガード越しに魂を消しとばした。

「それなりに使えた」と、そんな感想を呟きながらマガツカが蓄えていたマガツヒを吸収する。

「良いところを持っていかれたな」

敦田が息も絶え絶えながらも軽口を叩いてくる。トドメだけ貰うのは美味しいところだけ取っているようで、とても良い気持ちだったと言っておく。

そんな俺に苦笑を返しながら磯野上を見る。

戦いの中で迷いなく太宰の所に駆け寄って、その治療を進めていた。

まだ動ける敦田に、ラフムと樹島は何処だ? と直球で尋ねてみる。

その言葉に驚きの表情を見せてから、シナガワ駅の方を指差す。だが、こども付け加えた。

「樹島は、もう悪魔に吞まれている。ラフムの意志のままにマガツヒを渡していたよ。……こうは言いたくはないが、樹島を助けるのは二の次にしてラフムの討伐を優先して欲しい。いくらキミだとしても、迷えば死んでしまうんだ」

脇腹を抑えて、そう言葉を紡ぐ。樹島を見つけ、助けようと駆け寄り、ラフムに一撃貰ったそうだ。

そこから太宰に助けられてこのマガツカに逃げ込み、戦いながら回復を試みた。そう

いう経緯だったそうだ。

俺たちが痕跡を見つけたら助けに来てくれる、と。

俺たちが来なかったのなら、ハヤタロウ達他の仲魔も回復させて万全でこのマガツカを攻め落としたと。

こんな『回復するまでの困をやれ』という話を受けた太宰も、言った敦田もかなりイカれている。サマナーとはこういう連中なのだろう。

そんな二人でもラフムには手も足も出なかった。樹島のマガツヒでラフムは強くなり、ラフムの奪うマガツヒで樹島は強くなる。もう、止まらないと。

「大丈夫。サホリはラフムに負けないし、ユートくんならラフムをやつつけられる。私はそう信じてるから」

そう、磯野上が言う。太宰の治療は終わったようで、パワーが太宰を抱えている。その表情はどこか誇らしげだった。

「……分かった。僕も君たちを信じる。だが、決して死なないでくれ。学校で死んだ彼らに加えて君たちまでも失ったら、僕もミヤズも悲しむから」

そこでミヤズちゃんを持ち出す貴様は本当に良い性格をしている。そんなことを言ってしまうてもいいだろうか？

空気が冷たく痛々しい。シナガワ駅の奥に引きこもっているラフムが理由だろう。

磯野上は言葉を発さない。流石に緊張しているのだろう。ザコちゃんはビビりつつも自然体だ。強敵相手でも心が折れないのは仲魔として心強い。

俺は何か懐かしさを感じていた。アオガミもそうだった。これから戦う敵に、目に映るラフムと樹島という二人ひとりに。

今が、ナホビノとして戦う時だと。

嫌よ嫌よはやっぱ嫌！（好きな訳ではないのです）

東京砂漠の只中で、跡形もなく崩壊しているシナガワ駅。

樹島サホリは静かに佇み、磯野上タオは一步踏み出せずにいる。

空気を読まずに俺から行こうかと考えたが、ザコちゃんがそれを止める。

そうして、ようやく磯野上が声をかける。か細く、弱い声で。

「……サホリ、帰ろう？」

もう届かないと薄々分かっているのだろうか。

「タオ……私は帰れない。沢山、沢山殺したんだよ」

「だとしても、私はサホリに帰ってきて欲しいよ」

「できる訳ないでしょ!!? 私は人殺しだし、ラフムはもつと人を殺すの！ ラフムの誘いを私は断れないし、私はラフムの力から離れられないの！ 今だってタオを殺したくてたまらないの！」

そんな言葉と共に呪殺魔法が放たれる。無意識のモノだろう。雑で弱いものだった。

もちろん、磯野上を殺せる程度には強かったが。

それに対して一歩も動かない磯野上、不安があつても、目を背けることだけはしてない。

魔法は俺に当たりそうだったので数歩動いたが、磯野上に当たりはしなかった。
複雑な友情め。

「サホリ」

「お願い、もう帰つてよ……私にもう関わらないで」

「サホリが心の底からそう思つているとしても……私は嫌だよ。親友だから」

「そんなタオだから嫌なの! そんな事を言つてる癖に、『私たちみたいなの』なら誰でも良いんでしょ!? タオの言葉はあつたかいよ、優しいよ……でも、本当じゃないんだよ」

その言葉に、言い返そうとして言葉に詰まる磯野上。その数瞬でラフムは樹島を取り込んだ。

「サホリの心は言っている。貴様を許さないと。我の心も言つておる、貴様のような偽善者を殺せと! 貴様はサホリを救おうとしていない! その場その場だけの言葉を紡いでいるだけだ! 貴様のような者がいるから、サホリは!」

なるほど、馬鹿らしいと思わないか? アオガミ。

『キミの意見に賛同はできない。だが、ラフムが間違えている事は確かだ』

「何を言うか!?? 貴様とて、心を喰らった悪魔だろうに!」

……アオガミは俺だし、俺はアオガミだ。そういう関係なのは変わらない、お前の言う通り、心を喰らい合って混ざっているのは正しい。

だけど、俺の怒りはアオガミの怒りじゃないし、アオガミの使命も俺の使命じゃない。同じだけど、違うんだ。

「あ、分かったかも。ラフムは樹島って子のつもりになって怒ってるんだ」

そんなザコちゃんの平熱の言葉にハツとしたラフム。中の樹島もきつとそうなのだろう。

「それが真実で、何が変わると言うのだ!??」

何も変わらない。理由はどうあれお前は決断している。樹島も、言い訳がましいが腹は潜っているだろう。やることはお互い変わらない。

どうせ、殺し合うだけだ。

「ユート君!??」

行くぞ、邪神樹島サホリラフム

天よりの豪雷をラフムに叩きつける。ラフムは堪える事なく俺に触手を伸ばし、呪いを放ってくる。

どうにもラフムの全身を覆う触手が盾になったようだ。近づかなければダメージは

与えられない。

だが触手からの攻撃を全て避けるのは難しい。手数が多いし、速い。

故に『神奈備ノ守』という障壁を展開して全て受け止め、被弾しながら突っ込んでいく。

「アホー!」と良いながらザコちゃんか俺に回復魔法をかける。傷は癒えるが、すぐにまた増える。障壁で弱めていなければ一撃で俺の命を落とし得る呪い達だ。生きているだけで十分。

ラフムに剣が届く距離まで近づいた。腕に剣を作り、その体に叩き込む。触手の一本を盾にして防がれた。

一本は切り落としたが、すぐに再生する。マガツヒ消費は軽いようだ。

そして残りの触手全てが泥のようなものを放ってくる。先に届いた一発目を回避すると、当たった地面は黒い泥に溶けていった。マガツヒを喰らう類の技だと判断し、回避に専念する。一発擦っただけで足が重くなる、面倒だ。

「ディアムリター!」

磯野上の治療魔法が飛んでくる。しばらくショックで固まっていたようだが、どうにかなったらしい。

「……なつてないよ。それでも私は、死なせたくは無いの!」

よし。コイツがマトモに動くなら防御に力を回さないで大丈夫そうだ。触手を消し飛ばす。

広範囲に衝撃魔法『マハザンマ』を叩き込み触手全てにダメージを与える。そして怯んだ隙にもう一発を構え、反撃の呪いと同時に解き放つ。

多方向からの呪いの全てをまとめて吹き飛ばす事はできなかったが、そのダメージはザコちゃんと磯野上が治療する。そして風はラフムに当たり、触手を切り刻みすつきりとさせた。

触手の鎧は死滅した。再生成されるよりも早く俺の剣の間合いに入れられる。

しかしラフムは躊躇う事なく突っ込んできた。距離を離すのではなく詰める事で先手を取ったのだ。

その巨体を生かしたボディプレス。カウンター気味に直撃した。剣を生み出していた右腕は千切れ飛び、傷口からはマガツヒが流れ出る。

その流れでるマガツヒをそのまま力にして、ナホビノの轟雷をぶちかます。ラフム本体に直撃した。

お互いにクリーンヒットだ。だが俺から流れたマガツヒでラフムは回復し、ラフムから流れ出たマガツヒで俺は身体を再生させる。

痛み分けだ。だがマガツヒの総量から言うとならフムはまだまだ問題は無い。俺はあ

と数回でマガツヒは尽きる。

ラフムは、触手に回していたマガツヒを全て攻撃に使ってきた。正確に命を奪う魔法たち。氷結と呪殺だ。また牽制として黒い泥を放ってくる事もある。当たれば、鈍る。足が止まれば分が悪い。体力自体はラフムの方が多いのだ。

『少年、作戦を提案する』

アオガミの言葉に即答し、指示を任せる。俺はひたすら魔法を避け、防ぎ、稀に近付き切り付ける。

そうしていくと、次第にラフムの動きが鈍ってきた。俺はラフムの動きを見切りつつあり回復は減り、マガツヒの消費も減っていく。

ラフムの傷口からマガツヒが流れ、ラフムの持つマガツヒは少なくなっている。

「何故だ、何故だあ!?? 何故だサホリ!?? 我に、もつと力をー!」

ラフムの声が虚しく響く、しかしその声に樹島サホリは応えない。

『……樹島サホリのマガツヒはもうじき尽きる。完全に合一神と化していない貴様は、我々よりも長く戦えないからだ』

樹島エンジンの効率の差だ。噛み合いが悪ければ無駄に燃マガツヒ料が要る。

「なん……だと……?」

このまま勝負の見た戦いをする前に交渉だ。樹島サホリを解放しろ。お前は樹島

と一緒に死にたい訳ではないだろう。

「……貴様ツ！」

「私は、もういい」

ラフムの中から樹島が言葉を放つ。諦めの色の濃い言葉だった。

「アンタが怒りに狂つてる理由も、ちゃんと分かった。だけどそれに私を重ねないで。

私は、アンタになれないよ……」

その言葉が最後のきつかけとなり。ラフムは体内から樹島サホリを解放した。

事実上の、降伏宣言だった。

解放された樹島は、ふらふらと磯野上の元へ向かう。磯野上はラフムに目もくれず、

樹島の元へと駆け寄った。

樹島は普段学校で見っていたような空気を取り戻し、それを磯野上は喜んでいた。

そして樹島はごく自然に磯野上を殺そうとした。磯野上を守ろうと、俺の身体は動いていた。

そして、あっさりと俺は殺された。

似たモノ同士の僕たちは

初めて会ったのは、高校の入学式の時。ほどほどに近い席となり、やんわりと自己紹介をしたくらい。

その時の第一印象は、『生きにくそうにしている』という事だった。

それを見て、反発心が生まれたのだと思う。

だから『もっと優しい人でいよう』と思い、そうしてきた。

だから『もっと正直にいよう』と思い、そうしてきた。

『自分に正直に生きている姿』を見て、なんだか嬉しくなった。自分が自由に生きているようで。この不自由は嫌いではないけれど。

『自分を削って生きている姿』を見て、無性に腹立たしくなった。自分の生き方が否定されているようで。否定されても構わないけれど。

そうして、彼に対して一方的に好感が高まっていた。

そうして、彼女に対して一方的に嫌悪感が高まっていた。

そんな彼は、ナホビノになっていた。自分の意思で世界を変えられる強い力の悪魔

に。

そんなアイツは、ベテルの聖女を押し付けられていた。他人に押し付けられた、重い役割の聖女に。

どこまでも自由に生きる彼は、それでも確かに自分を持っていた。

どこまでも不自由な彼女は、それでも確かに自分を持っていた。

『友人』を大切にするという、シンプルで分かりやすい『自分』を。

けれど、やはり自分とは違っていた。

友人の為なら命だつて捨てられると考えている彼は、自分を勘定に入れていない。

友人の為なら自分の命だつて捧げられる彼女は自分を勘定に入れていない。

だから私はサホリが私を殺そうとした事を受け入れて、それで良いと思った。

だから俺は、樹島がアイツを殺そうとしたときに、守ろうとしてしまった。

その結果、俺生きようとした自分が死んで、私死のうとした自分が生き残ってしまった。

馬鹿らしい、話だ。

「……お互い、似たこと考えてんだね」

磯野上タオの声がする。目の前は真っ暗で何も見えない。目を閉じている時よりも視界は暗く思える。

自然と、死を感じてしまう。

「……それは、そうだよ。多分これって死ぬ前の走馬灯みたいなものだから」

走馬灯の中でお前を見ることになるほどの罰ゲームを受けるほど罪深くは……まああると思うが。

「え、思っちゃうの？」

悪魔を気分で殺してきたのだから、呪いの類は受けているだろう。それ以前に好き勝手に生きているのだから、気付かぬうちに罪の40や50はしてる筈だ。

「……そこまで自覚あるのなら、もうちよつと抑えられなかったのかなあ？」

え、やだ。

「悪い子だね」

柔らかに笑っているような声と共に、そんな言葉が聞こえる。不快だ。

「……坊主憎けりや袈裟までつて言うけどさ、それにしたつてちよつと酷くない？」

知るか。まあそれはそれとして出来る事を把握したい。

俺は致命傷を受けた。状況から考えてお前も殺されたんだろう。とすると、ラフムに

食われてる最中だな。ならば今から魂を暴れさせれば腹を下させるくらいはできそうだな。

「それはやめて欲しいな。まだ、終わってないんだ。だから、キミが心から生きたいって思えばまだ立ち上がれる」

……そうは言うが、心から生きたいとはどうすれば？ 特に憎しみの類はないし、使命の類も持ち合わせていないぞ。

「なら、生き返ったらやってほしいことがあるんだ。きつとそれがキミの理由にもなるから」

聞くだけ聞こう。

「サホリを助けて」

それは「私がやれって言うんでしょ？ 分かってる。けど、出来ないから」

「キミは、私の命で生き返るの」

ふぎけないでほしい。なぜそんなものを押し付けられなければならない。

「そう言われてもさ、もうやった後なんだよ。だから私の魂はあなたと繋がってるの」

何故、そんな馬鹿な真似を？

「キミと同じだよ」

「体が勝手に動いてた、それだけ」

視界に色が戻ってくる。瞼の裏から光を感じられるようになってきた。

「キミが起きなかつたら二人とも死ぬ。けど、キミが起きれば死ぬのは私だけ。それしかないの」

……俺が生きようとしなければ、お前は無駄死ににしかないんだな。

「うん。だからお願い。キミはキミとして生きて。キミ自身の心で」

命を押し付けておいて酷いことを言うものだ。生き返らせてくれなんて頼んだ覚えはないし、お前の願いなど聞くつもりはない。

だから後悔しながら死んでくれ。お前は無駄死になるだけだ。

そんな言葉を聞いた磯野上タオは、笑った。

「ずっと思ってたけどさ……キミって、意外と嘘が下手だよね」

目が覚めた。

体の内側から凄まじいマガツヒを感じる。磯野上のモノではない。それはもう俺の身体を治すのに使い切っている。

これは、俺自身が生み出しているモノだ。人の心の情動が強いマガツヒを生み出すとか、そんなことを何処かで聞いた気がした。

そんな俺を、死んだような目で見ている悪魔がいる。人を取り込んで合一神と化した

ラフムだ。

自然と身体が構えを取る。ラフムもそうだ。お互いに心が定まらないまま、衝動だけで目の前の悪魔に襲い掛かる。

獣のように荒々しく、鬼のように力強く、人らしく愚かな暴力だった。

互いに殴り合って感じる。

目の前のコイツは死にたがっている。樹島だった部分もラフムだった部分も。

しかし自死を選ぶ気概もなく、ただ意地だけで『戦う事』を選んでいる。

その心が手に取るように分かるから、尚更殺したくなかった。

ラフムの崩れた体の上に乗る、何度も殴る。殴つても心は晴れず、思わずに叫んでしまっそうだ。

そうして殴る拳が血に染まった時に、ようやく腕が止まった。

「殺さないの?」

掠れた声で、樹島サホリは言った。

「お前は、苦しんで “から” 死ね」

そんな答えが、勝手に出た。

それがこの戦いの結末だった。

気絶していたようだ。横になった記憶がないのに空を見上げている。体じゆう痛まないところはなく、気分は最悪だ。

だが一応やるべき事はやっておこうと身体を起こす。周囲の地形は一変していた。ナホビノが二人暴れ回ったのだから『こうなるな』という得心がある。

樹島も俺も自然と近づかなかった被害のないあたりを見る。そこは俺が死んだあたり、一人の人間の死体がある場所の筈だ。

そこにいたのは血まみれのザコちゃん。周囲には戦闘の跡があり、マガツヒは枯れている。

そしてそこには『磯野上タオの死体』はなかった。

ラフムは近くで倒れたままだ。死んでないが、動ける体ではない。ないが、意識だけはこちらに向けている。

回復魔法とマガツヒで治療をする。外傷はさほど深くないようで、すぐに喋れるようになったザコちゃんは言った。

「あの娘の身体……盗られた」

淡々としたようで、しかし後悔の念しか感じさせないその言葉。

生き返った矢先にコレとは、本当に生きるとは難しい。そんな事を思っていた。その時、廃墟の窓ガラスには悪魔のような笑顔が写っていた。

優しき（ハーベストな!）女神達!

「……ねえ、何で私こんな事してんの?」

働かざるモノ食うべからずと言うだろう。そういう事だ。

「いや働くってか騙くらからかす算段をつけようとしている風にしか思えないんだけど」

「しかし、『作るモノを適正な価格で欲しい人に届けたい』という事になったのでありますよ?」

「そーそー。私たちは美味しくてマガツヒたっぷりのリンゴを食べられれば良いんだつて」

目が死んでる樹島の言葉に答える蘭丸とザコちゃん。それに一言付け加える悪魔がいる。

「ククク……生産を独占しているのですからそこから先はどうとでも出来ますからね」

最近ちよつとした事でボコボコにして、命だけは助けてくれと助命してきたので契約で縛り仲魔にした『魔王ロキ』だ。

「……ねえ、ちよつとした事なの?」

「後腐れなく終わったのですし良いと思うでありますよ」

「そーそー、細かい事は良いんだって。……ホント、考えてると頭痛で死ぬから」
何を言うか。ちよつとした意見の食い違いを殺し合いで解消しただけだ。

「そこの方、休むのはお仕事を終えてからにして下さいませんか？」

と、意見の食い違いの原因である『女神イズン』がやってきた。彼女は魔界で一番のリンゴ農家である。黄金のリンゴという魔界随一のブランドを持っており、ロキはそれを流通させるブローカーとして一旗揚げしようとしたが俺が潰したのだった。

「しゅ、宗教も神話も何もかもが消えてる!?？」

そちらには詳しくない。だから聞いた事で判断してるのだ。

「ええ……」

とはいえイズンのリンゴ農園に与えたダメージは大きく、俺たちはエンヤコラつと働いているのだった。

やる事は良い感じにマガツヒを渡すだけなのだけれども。

さて、のんびり林業というのも悪くないが少しだけ経緯の整理をしていく。

まず、ひとまず樹島を持って妖精の森に一時帰還した。磯野上が死んだ事には悲しまれてしまったがそれで足を止める人間は居なかった。

とはいえ、人間全員傷だらけだった。魔界で戦闘に巻き込まれたり色々あったのだろ

う、なので、治療のために黄金のリングを求めてイズンの元に訪れたのだ。

そして、ロキがいた。

今この瞬間にイズンを誘拐しようとしていたロキは、『え、マジかよ』という顔を見せてから商談を持ちかけてきた。

その話には俺は怒り、その怒り方にイズンがキレた。その結果農園はボロボロとなったのだった。

「いや、アレは私だってキレる。アンタに人の心がないのは知ってるけど、あそこまでは思わなかったから」

……おかしい。真つ当な事しか言っていない気がしたのだが。

ロキは単純に「イズンを捕らえて脅せば『黄金のリング』を独占できる!」という事を言い。

俺は「それだとイズンが存分に働かず、生産量が足りなくなる。捕らえるよりも農園をノウハウごと盗めば万事解決だろう」と言い。

イズンは、「盗める程度のノウハウだけでウチのリングが作れるかあ! 林業舐めんな素人も! 土の中からやり直せボケカスがあ!」とブチギレて言ったのだった。

返す言葉もなかったが故に、俺もロキも反省して働いているのだった。

「……てかき、何で私らまで働かなきゃならないの？」

そんな折、樹島がそんな事を言う。何を言っているのだろうか？　と思うと同調者が現れた。

「そうだよ……そうだよね！　何で！　私は！　当たり前みたいにな！　コイツの！　尻拭いを！　してるのさ！」

ザコちゃんである。言いたい事は分かるが、意味はない。

みんなは一人のために！　仲魔は俺の為に！　という風にできるのだし。

「思い直して、あの日の私い……」

「ホント、ごめんね」

ザコちゃんには、『契約の内容はきちんと確認しましょう』という当たり前の言葉をあげよう。俺もやった時は別に騙すつもりはなかったけれども。

「しかし、ナホビノの悪魔召喚は不思議なモノですね。『悪魔に身体を与える代わりにその全てを支配する』とは。契約によって互いの利益の為に使い使われるのが悪魔使いだと思っていました。自由意志の否定まで出来るとは素晴らしい話です」

ああ。これなら裏切りの心配をする必要はなかった。道すがら命乞いをしてきた奴らはちゃんと仲魔にしてやろう。

と、そんな風に口を動かしながら後始末諸々を終わらせた。給金代わりの黄金のリングは先払いで妖精の森に送ってあるので現地解散だ。

「それでは、（ゴ）機嫌よう」

そんな言葉を言いながら内心では『次はねえぞわかってんな屑どもが』という空気が伝わってくる気がする。そんな女神様だった。

あ、それはそれとして

林業いつもお疲れ様です。黄金のリング、とても美味しかったです。また買いにきます。

その言葉に、イズンは心から笑っていた。

さて。

現在、俺たち縄文高校魔界遭難隊には東京に帰る手段がない。

それは品川からベテルの転送装置のある議会まで歩ける真つ当な道がない事、無理目な道は悪魔だらけで間違いなく死者が出ること、そもそも人間という美味しい『餌』は探して追い詰め食い殺す! というスタンスの悪魔が周りに多すぎる事が理由だ。

その辺りに対処する為に俺は活動している。『ラフムは完全に俺の制御下にあり利用できる』として連れねきた樹島と、仲魔のザコちゃんと、深い理由なく着いてきてくれ

た蘭丸を引き連れて。

あ、さつき仲魔になったロキの事忘れてた。

「んで……次どこだっけ？」

「予定はないですありますよ。向こうとも連絡は取れたのでありますし、急ぎでしなくてはならない事はないであります」

「それじゃあ！」

ああ、ようやく魔界探索だ。

ザコちゃんをぶちのめした存在。それは『悪魔っぽい』存在だったようだ。容姿は人間大で、青白い鋼のような体皮に金色の骨組みだけの翼を持つモノ。

いつのまにかそこにいた『不安定なモノ』だったとかなので、次も同じ姿とは限らないが。

「とは言ったものの、アテはないんだよねえ……」

「なら、傭兵殿を訪ねてみてはどうでありますか？」

傭兵殿？

「はい。ミヤズ殿と皆を助けていた時に手を貸してくれた方であります。名を『フィン

「マツクール」と

「……あれ、どつかの神話の人間じゃなかったっけ? その人。聞いた事ある」

悪魔は、語られたり知られたりする事で情報が集まり、そこにマガツヒが肉となり生まれる生き物だ。昔の人だつてたくさん話されたら悪魔にだつてなるだろう。多分。

「あれ、どこでソレ聞いたの?」

「……どこだつただろうか? 忘れた。」

大体合つてるだろうし、良いのではないか?

尚、そのフィン何某は傭兵としてぶらぶらしてるらしく結局アテはないには変わらなかつた。

その苛立ちをそこらへんの悪魔にぶつけていたら「ハーベスト!」と声がした。

何ぞや? と声の方を見ると、女神がいた。

その姿を見て、イズン以上の何かを感じた。こう、『農』な感じが。

「アナタ達! とつてもとつてもマーベラス!」

そんな事を言うマーベラスでファーマーミングな貴方は?

「あら、ごめんなさい。私はデメテル、魔界の土地に作物を実らせたくて色々やつてる女神よ!」

「あ、ファームिंगで合ってるんだ」

して、どのあたりがハーベスト？

「ええ！ 貴方が倒した彼らは、土地を汚す困ったちゃん達だったの！ 彼らのライフスタイルだから仕方ないとは思うけど、ダーティー過ぎるとお互いにバッドなの！ 綺麗じゃないと汚せなくて彼らはマガツヒを得られないしね！」

とはいえ、綺麗な土地でなければ農業はできないのでは？

「それはノーよ！ 綺麗過ぎる土には栄養が足りないもの！ 草木は育つだろうけど、ファームिंगはできないわ！ そんな土地を農地にしたら東京はもっともっとハードな砂漠になってしまうの！」

「へー」と全員の声が揃う。

「……それならば、悪魔どもを殺した報酬をいただけませぬか？」

と、ロキが一つ提案をする。別に構わないのだが。

「そうね……あげられるものはないわ。ごめんなさい。けれど、何か力にはなれると思うわ！ 言ってみてちょうだい！」

なら、探し人……ならぬ探し悪魔を。

と、ザコちゃんを襲った悪魔の特徴を話すが知らないとの事。しかしながらフィン何某の居場所なら考えがあると」

「フィンちゃんに会いたいなら、依頼をすれば良いのよ！
もいたから、とつてもハーベストね！」
私にもなんとかしたい悪魔
そんなことになった。

魔王軍撃退戦！（みんなやる気はありません）

妖精の森近く、崩れた建物の廃材を使って作られたカフェテラス。そこに俺たちは居た。

テーブルの上にあるのはなんと蕎麦。魔界で作れそうな作物を探していたが土地に合わなかったらしく、仕入れた種を粉にして製麺したとのこと。

「今の魔界に合わなかったのは残念だけど、ソバはソバでベリーグッドね！ とつてもデリシヤス！」

デメテルはギリシャ神話の神であり、この日本、というか東京魔界砂漠には詳しくない。故に多くを学び、多くを試し、魔界に実りを増やそうとしているとの事。

「悪魔にも様々な方がいらっしやるのでありますねー」

と、のほほんとして蕎麦を啜る俺たち。フィンIIマックールとの約束を取り付けた事、妖精の森にいる人間達の食糧事情のこと、そういった諸々とデメテルのフィーリングが噛み合い、炊き出ししながら待とう！ という事になった。

当然タダでやる事の裏には理由がある。それはギリシャの悪魔達が人間を取りこみややすくするイメージ戦略など。

とはいえそれはそれ。デメテル個人は頭が農家であるので、特に拘ることをせず妖精の森にいる人間と接していた。

その結果として、『蕎麦食いてえ……』という声が届いたとの事。

「……それで、神デメテル。話を先に進めて良いか？」

それを言ったのは金髪の美丈夫。フィンⅡマックールという悪魔であり、俺たちのか細いアテの一つだ。

出会い頭に「心当たりはない……」と言われたのもうアテではないのだけでも。

「そうね。まずは確認なんだけど、ベテルが千代田区に攻め込む！ つて話は聞いている？」

「東京に攻め込んだ連中が軒並み死んで戦力が減った。ここを攻め時と見ない奴はいないだろう」

「襲われたのは東京の人間だけで天使はあんまり死ななかつたんだよね？ で、主力は蘭丸とコイツがザクザク殺したからかー。魔王軍も落ち目だねえ……」

その襲撃に乗ったラフムはどうにも座りが悪いようだ。樹島が内心で言葉のドッジボールをしているのがその表情からよく分かる。

「そのせいでベルフェゴールちゃんが面倒な事になってるらしいの。えっと……ミコシ、であつてたかしら？」

今、天王洲のあたりには魔王軍がいるらしい。

その部隊の大將は魔王ベルフェゴール。俺でもなんとなく名前を知っているくらい
の悪魔で、当然強いのだと。

近々ベテルの天使達が魔王軍本拠地の元東京駅にカチコミに行く時その時にベル
フェゴールは戦力を纏めて天使軍の背中を襲うつもりだ。

……という風に思わせていると、デメテルは言った。

品川付近の悪魔は、どうにも全体的に自由だ。魔王軍の結界破壊に乗って人間界を襲
う奴等もいれば、冷蔵庫で冷やしてのほほんと過ごしやすくしてる奴らもいる。

強者に頭を押さえつけられていないのだ。

つまり、ここ品川付近で強力な一団の大將にされてしまったベルフェゴールは果てし
なく邪魔なのだ。本人にとってさえ。なので『力のある奴』と『それなりに戦い』、『参
戦しない理由』にしたい。

そんなのが、デメテルから聞いたベルフェゴールの話である。ベルフェゴール本人は
山の上で怠惰に過ごしているのが好きなヘンテコである。強いし、魔王だが、品川の連
中からすればそんな認識なのだ。

「けれどベルフェゴールちゃん**の強さは本物**なの。フィンちゃんだけだと普通に殺されてしまうから、貴方達はちようど良かったの! ナホビノさんが二人もいれば、イージーな話ね! ベイビーサブミッションよ!」

うきうきと話すデメテルの話を苦虫を噛み潰すような顔で聞く金髪イケメン剣士が居た。この話**に頭を抱えている程度には常識的な考え**を持っているらしい。

「……報酬の野菜の類は貴重品だ。依頼そのものも別におかしくはない。だから拒否はしないが……しないが、何だコレ?」

コレを理解できていないとは頭に野菜が足りてないのではないか?

「いや、頭の中に野菜はねえよ」

「え? あなた、野菜が嫌いだったの? それはとっても悲しいわ。けれど、そんなのは本当に美味しい野菜を食べればノープログラムよ!」

「あー、わかるかも。私もデメテルのくれたの食べるまで野菜つてただの不味い草だと思つてたし」

「魔界では作物の類は難しいのでありますね」

土地が死んでるからな。栄養もマガツヒもないし。

「話を野菜に持つてくくな農業に持つていくな面倒になる……それよりも魔王軍側の実際の戦力はどうなんだ? ベルフェゴール本人にやる気がなくても、結集する程度にはや

るつもりなんだろう？」

「本人以外で強い者というと、この国の悪魔のテング達がいるわね！　空を自由に飛び回って剣や術を使う、とっても速いアヤカシよ！」

「え、天狗居んの？　私顔合わせ辛いんだけど……」

天狗と何かあったのか？　事と次第によっては落とす首の数が変わるが。

「私を殺して済まそうとすんなし。口だけじゃなくて実際にやりかねないのが怖いっての」

「……今のに平然と返すんだ」

「なんか慣れちゃった」

「話が逸れちゃったわね！　お話が弾むのは素敵な事だけど、きちんと決める事は決めていますましよう！　その方がもつと素敵なティータイムになるわ！」

とはいえ、フィンが話を受けるならば決める事はもう無いのでは？　俺たちは連携が取れるほどの関係ではないのだから。

「それもそうだ。お前達は正面で暴れる。陣が崩れれば俺がベルフェゴールをやる」

……なるほど、簡単で良い。

「ノープラン？」

この時、樹島サホリはまだそんな事を言える程度には人間性を残していた。

うきうきと歩く蘭丸がいる。

怠そうに飛んでいるザコちゃんがいる。

ニヤニヤと悪辣な事を考えていそうなロキがいる。

色々と嫌そうな樹島がいる。

そして、これからがとても楽しみな俺がいる。

特に思想などに囚われる事はなく、なんとなくの方針だけで目の前の悪魔を殺す。そう思うと心がとても軽やかだ。

学校が襲われてから押し付けられていた面倒なモノから解放され、好き勝手にやる。それが正しいとは思わないが、『しない』と『できない』では心の持ちようが違うのだ。

「来たぞお！ ナホビノだあ！」

上空で警戒していた天狗の一体が叫ぶ。

一応いきさつは聞いているので、戦闘を始める前に声をかける。

『降るのと逃げるのは見逃すが、他は全て始末する』

それだけでその軍勢はたじろいで、一部の奴らはスタコラサッサと引き返す。

天狗の中の強そうな奴、クラマテングが声を荒げる。

「アマノザコ！ 我ら国津の悲願を忘れたのか！」

そのように叫んでいるが、ザコちゃんはその天狗を可哀想なモノを見る目で見ていた。

「……なんだその目は!?」

「昔はコレを怖いとか思ってたんだなあ……みたいな懐かしさ？」

心境の変化でもあったのか？

「あんたとつるんでて、アンタ以上にヤバい奴は蘭丸くらいしか見たことないからねえ……」

なるほど、慣れたのか。

そんな開戦前からの緩さに耐えられずにブチ切れた連中が奇声を上げながら襲いかかってくる。

なので雑に轟雷で焼き払う。溢れた奴は蘭丸とロキが始末する。混沌の軍勢で、魔王軍なのになんとも『自分がない』連中だ。右に倣えの精神なのか？

などと気を緩めそうになったところで、鋭い視線を感じる。反射的に剣を作って首を守るが、その剣を作った手首が根本から切り落とされた。

なるほど、分かっていたがかなりやる。

これが、『幻魔フィン＝マックール』か。

「……驚きはしないのか。一応コレは裏切りだったんだが」

お前は蕎麦に手をつけなかった。その時から警戒されているのは分かっていたし、そもそも話としてお前は傭兵だ。理由があれば立場を変えるだろう。

お前は、ずっとラフムを殺そうとしていた。

「ああ、確かに。フィン殿は義理堅いでありますからね」

「ベルフェゴールはもう切った。デメテルへの義理は果たした以上躊躇う理由はない」
そんな平熱の俺たちに、樹島は問いかける。

「……私を、殺したい理由を聞いて良い？」

「不思議な事はない。お前が殺した奴に頼まれたのだ。お前を殺してくれ、と」

ラフムは多くを殺してきた。恨みも当然買うだろう。ならば仕方ない。

樹島、手助けはしないで良いんだな？

「……うん。決めた事だから」

「貴様の仲間ではないのか？ ナホビノ」

2つ約束がある。

コイツを自殺させない事。コイツへの報復を止めない事。

理由としては、この程度だ。

「殺されたいのか？」

「……そうよ。私は自分のやった事全てが許せない。私を殺したい人がいるなら、殺されても良いって思ってるくらい」

「なら、潔く死ね」

フィンの魔剣が樹島を襲う。流れる水のように綺麗で鋭かったその剣は樹島に直撃する。

そうして肩口から切り裂かれた樹島は躊躇わず呪いを纏った拳『黒龍撃』をフィンに叩き込む。

渾身の一太刀の後で回避できず、直撃を貰ったフィンはニヤリと笑う。楽しそうだ。

「けど、私にはまだやらなきゃいけないことがあるの。だから、まだ死ねない。まだ殺されてやれない。だから！」

悪魔じみた表情で、けれども目元だけは泣きそうな樹島はナホビノとしての力を強くした。

姿はヒトの形のまま、力の質が変わっていく。混沌そのものに。

「我はナホビノ、我はラフム、……私は、タオに会うまで死ねないの。だから、アンタを

殺す」

ラフムとサホリとマツクール！（天狗さん達はキンクリです）

ラフムとは、どういう悪魔なのだろうか。

メソポタミア神話にて、アプスーとティアマトという神様が交わり最初に生まれたのがラフムなのだろうか。

神話にて天地が分かれて世界が形になるより昔、始めての神として生まれた。世界が作られて、多くの神が栄え、貶められる今までを見てきたのだ。

だから、ラフムは忘れていない。上位のモノによつて踏み躪られる事を、下位のモノが踏み躪られた事も。

そうして多くの争いがあったが故に、世界は続いているのだから。

……だが、世界を獲つたのは秩序の神だ。

メソポタミアの流れにない神は、世界を望んだ形に変えた。今まで世界の礎になった神々は悪魔され、力と威光を失った。

そして、誇りを奪われた。

これはラフムに限らず多くの悪魔がそうなのだろう。だから魔王軍にいる悪魔達は、自分を取り戻すために戦っている。

踏み躪られた過去の怒りから、荒ぶる悪魔になっていたのだ。

「本来は、命を育む河川のようなあり方だったのでしょうにね」

ロキが、そう補足する。

その怒りが泥シルトとなり、目の前の敵を殺そうとしている。

しかし、フィンマックールには通じない。どれだけ力があっても、どれだけ怒りが強くても、当たらなければただの隙だ。

樹島とラフムの攻撃は、何一つ通じていない。技の合間合間に丁寧丁寧に切り刻まれている。

「しかし解せませんね。貴方の契約があるにしても、ラフムがああのサホリという少女に固執する意味はありません。ヒトの中の『知恵』が望みだとしても、彼女だけが『知恵』の持ち主ではないのですから」

そうロキは言う。俺はナホビノとしてアオガミと噛み合っている。それはアオガミと対応する『知恵』を俺の魂が持っているからだろう。

だが、その知恵は特別なモノではない。人間が生まれ、血が交わり、多くの悪魔の知

恵が混ざり合い、伝播した。情報がコピーされて伝わっていくように。

故に樹島は「完成度の高い『知恵』のコピーデータを持っている人間」というだけでしかないのだ。

理屈の上では、だが。

「アオガミ殿は、何故だと思われませんか？」

その言葉に、久方ぶりにアオガミが声を出す。

『……それでも他人には思えないのだ。私にとつての少年のように』

自分がアオガミである事を忘れそうになる程に、と俺の心には伝わってくる。自分も同感だ。

実際、アオガミの感覚だと『アオガミの相方になれる人間は何人か見つけられた』魔界に落ちてきている人間は多くないのだ。

相方であるのは別に俺でなくても良いのだろう。必要があれば俺を切り捨てるシビアさをアオガミ個人は持ち合わせている。

「……なら簡単な話なんじゃない？ ラフムはサホリの事を気に入ったんだよ」

「それは面白い話ですね。あの怒りしかなかったラフムにそんな可愛らしい所があるな
どつ」

そう嘲笑うロキ。

目の前の戦況は悲惨そのものだ。樹島はがむしゃらに暴れているだけ、フィンに傷一つ付いてはいない。

フィンの剣で幾たびも斬られ、ナホビノの再生力で命を繋いでいる。

「……諦めろ、お前は弱い」

「知ってるわよそんな事は!」

樹島は叫ぶ。

「私が弱かったから沢山殺した! 私が弱かったから大切なコトを間違えた! 私が弱かったから踏み躪られた! 私が弱かったから……大切な居場所を失った!」

「そう叫ぶだけならば! 後悔のままに屍を晒している!」

「だけど、生きるって決めたの!」

ラフムの意思が混ざっているその言葉には、樹島の言葉があった。

……もしかしたら逆なのかもしれないが。

剣を身体で受け止めて、再生する事で肉で剣を掴み取る。そして、ゼロ距離からラフムの泥が放たれた。

フィンに、ようやく入った一撃だ。

「……そうか」

フィンの傷は浅い。剣を手放して離れたかはだ。樹島の傷は重い、身体を貫く剣はそのままにあるからだ。

しかし、目だけは死んでいない。

そんな樹島を見てフィンは言う。

「……やめだ」と。

何故に？ と声が出る。

樹島を刺していた剣はマガツヒに解け、それが治癒魔法に変わり傷を治す。

「今殺すのは惜しくなった。理由としてはそんな程度だ」

再びまみえた時に生かす理由がなければ殺す。そんな事をフィンは言う。

優しいのか、甘いのか、どちらなのだろう？

「優しいで良いと思うのでありますよ」

優しいから、見ず知らずの人間の何にもならない頼みを見無視できなかったのだし

優しいから、樹島サホリの『生きたい』を見無視できなかったのだろう。

そんな所か。

樹島は膝をつく。意識は朦朧としており、しばらくは何もできないだろう。

そう思って周囲を見回す。

屍の山がある。天狗や墮天使、そういつた集結していた連中はもうほとんど殺した。

「……しかし、弱かったでありますね」

「当然でしょう。力を第一と信ずるモノならばとつくの昔に魔王軍に集っています。ここにいるのはただの風見鶏ですよ」

「天狗連中も下つ端だけみたいだし、色んなところから溢れた悪魔が来てたんじやないかな?」

「……なるほど、だからフィンは一人でベルフェゴールをやれたのだな。」

「……ああ、そつちのナホビノ。少し良いか?」

構わない、とフィンに言う。

「お前の言つたタオという女も見知らぬ女神も知らないのは確かだ。だが、ソイツは世界の主になる者を導く”類の奴だろう。随分と昔、そんな役割の奴がいた」

……何故、そんな風に思った?

「ラフムのナホビノは、ソイツを理由に立ち上がった。そうして歩いていくうちに世界を統べ得る『コトワリ』を見つけられるだろう。そういう良い女になっている」

そうなるように誘導されたと?

「ああ。だからナホビノとして戦っていけば向こうからやつてくる。それまでに力を付けておけ」

「あれ、なんかサホリに優しくくない？」

「消去法だ。コイツには『コトワリ』の下地があるが……お前にはない。お前には力があっても、創世の意志がない」

喧嘩を売られている……訳ではないようだ。事実だし。

俺はやはり雰囲気で生きているし、何となくで戦う。『コトワリ』とはなにかよく分からないが、未来への意志の強さとかそのあたりなら誰にも勝てない自信がある。

「うわ、そこ自信満々で言うんだ」

「しかし、ユート殿らしいであります。良くも悪くも『今』しか見ていないでありますから」

照れるぜ。

「行き当たりばったりって言われてんだってば」

当意即妙とも言おうだろう。その場その場で良い感じになんとかすれば良いのだよぞ
コちゃんや。

そんな話をしながら、俺たちは妖精の森に帰る。フィンと魔王軍とペテルの戦争がもうすぐ起きる千代田区へと向かった。なにかあれば教えてくれるだろう。

そしてその日、俺と太宰、そして敦田兄は一足先に東京に戻る事となった。ペテルの戦争の話があるらしい。

そんな事を、通信越しで長官は言った。

ターミナルを用いて東京支部に戻る。すると、目の前には大天使アブディエルがいた。

「……貴様らか」

「アブディエル様!」と喜ぶ太宰。訝しげな表情でそれを見る敦田。なんとも信頼度が目に見える場面だ。

「……聞いているだろうが、貴様ら東京支部は不要だ。我らベテルの軍勢は魔王軍程度に負ける事はない」

「……僕達の、東京の未来がかかっているのです! それなのに戦うなど!?」

「そうだ。貴様らは弱く、数もない。ここでの参陣は無駄に命を散らすだけだ。何故分らない?」

それでも! と声を上げそうになる敦田を強い視線が押しとどめる。視線の主は東京の総大将、越水長官だ。

「彼は人一倍東京を守りたい気持ちが強いです。ご容赦を」

「元より何もせん。功を焦って東京の守りを疎かにするなよ、コシミズ」

そう言い捨ててアブデイエルは去っていく。不思議な事に俺に、というより『ナホビノ』に対しての殺意の類が薄かった。

カミサマ至上主義だったろうに……と不思議に思う。

すると、ターミナルの管理をしている職員さんが耳打ちしてきた。

「アブデイエル様つて、タオちゃんの事結構気に入ってたんだよ。だから、タオちゃんが守った命はできるだけ守りたいんじゃないかな？」

そういうえば磯野上はベテルの聖女として育つたのだ。現在天使のリーダーであるアブデイエルとはそれなりに付き合ってもあったのか、と納得する。

“理由が明確になるまで殺すことはしない”程度の後回しだろうが、楽なのはありがたい。それなりに強いので、殺すのは面倒なのなだ。

「さて、先程聞いた通り我々東京支部はこれからの魔王軍攻略戦に参加を許されていない。だが、そうも言っていられない理由がある。着いてきてくれ」

越水長官についていくと、出たのはベテル東京支部、というか支部のある大学の屋上だ。

そこからは、東京がよく見えた。

「ツ!??!これは!??!」

「なんだ……コレ!??!」

その東京の姿は、滅んでいるように見えた。魔界にある東京砂漠の姿のようだった。しかし、瞬きすれば普通の東京に戻る。おそらくだが、目の前の景色は東京と魔界が重なっているのだ。

「時間がないので簡潔に言う、ベテルの主要悪魔に1秒でも早く接触したい。この東京をなんとかできるのは『ナホビノ』と彼らだけだ。故に、君と太宰くんは無理矢理でも参戦してもらいたい」

「……マジか」

「ツ!? 長官! 僕も行けます!」

「敦田ユツル、君にはやるべき事がある。東京を守る戦力はほとんど残っていないのだ」
その発言に違和感を覚える。理屈としては正しいが、ナニカが違っている感覚だ。

「それと、アオガミのメンテナンスを行う。アオガミは神造魔人であるが故に、致命的な不具合が起きる危険性があるのだ」

『了解した』とアオガミとの合体を解く。違和感が止まらないが、それが何かは分からない。
い。

「けど、コイツがナホビノじゃなくなったら、やばくないですか?」

「心配無用だ、彼はアオガミとの合体により覚醒している。今のアオガミが付いていけない程度には、その魂は強い。それに、アオガミの調整が終わり次第現地で召喚した方

が手っ取り早く済む」

『了解した』

悪魔召喚プログラムによるアオガミの召喚。人間界にいる悪魔を魔界から召喚するというのは少し不思議だが、たしかに早く済む。

そんな話をしてから、すぐに魔界へと向かおうとする。

だが、気になった事があった。今日感じた違和感とは別の、ふとした疑問だ。

「東京以外は、どうなっている？」

その言葉に長官は言う。

「なにも変わらず、いつも通りだ」と。

東京都千代田区魔王城！（切符はあなたの命です！）

東京砂漠を飛び越えて、魔王城（勝手知ったるトウキョウ駅）へと向かっていく。

そして俺たちは目にしたのだ。飛んで火に入る夏の虫というコトワザは正しかったのだと！

「虫じゃねえよ！ 天使様達だよ！」

などと太宰が喚いている。羽が生えてるし似た様なモノだと思ふのだ。

とはいえ一応味方陣営だ。炎の巨人スルトが作っている炎の壁はどうにでもなるが、そこに飛び込んで消えていく天使はそのうち弾除けとかになる。

「……どうにかなるの？」

アレを殺せば良いのだろうか？ なら遠距離から大技使ったりすれば良い。そういう技術はどこにでもあるだろう。ミサイルみたいなのとか。

実際、今の俺でも可能であるのだし。

「なんと……ユート殿は随分と力に慣れたのでありますな」

「え、慣れの問題なの？ ……あ、コレが若者の人間離れってヤツか」

などと馬鹿らしい話をして居ながらも、周囲の景色はとても破滅的だ。

どこを見ても死体だらけ。マガツヒに解けて消えたのも含めると犠牲になった悪魔は万単位なのではないだろうか？

あ、さつき殺したキマイラの死体あそこに積みば近道できるな。ポイツと。

「……………え、この上通んのか!?」

太宰が喚くが、これは致し方ない犠牲だ。人間の脚力でもマガツヒで強化すれば地番沈下と崩落だらけのこのあたりを抜けられるだろう。だがしかし、そうやって跳躍すれば流れ弾が当たるしなんなら狙われもするだろう。

この戦場で強いと感じる奴らは、どいつもこいつも一筋縄ではいかない連中なのだから。

「あれは……………アブデイエル様！」

そんな時太宰がアブデイエルを見つけた。

ゆつたりと歩きながら片手間で悪魔を殺している。

「……………貴様は、太宰イチロウだったか？ 東京支部が何をしに来た」

「俺たちも悪魔達から東京を守りたいんです！ だから、戦いに来ました！」

「愚か者が。貴様程度の力では何もならず死ぬ。死体が増えたところで悪魔どもはど

うにもならないという事がなぜ分からない？」

「それでも、『正しき』を信じて居たいんです」

そんな（こちらの事情を放り捨てた）太宰のキラキラ忠犬わんこな雰囲気のかアブ
ディエルはひとまず秘めていた殺意を納めたようだ。

「……ならば貴様に天使を付けてやろう。ここまで来たならばどの道戦うしかないの
だ。ならば秩序のために戦え」

お目付役、あるいは東京支部への密偵だろうか？ 偉い人たちは大変だ。太宰は知ら
ないフリをしておくは無難だぞ。多分。

「だったらそれ口に出さないでくれねえか!??……いやいやいや！ ソロネ様もドミニ
オン様もありがたい限りですから！ 間違いなく！」

早速天使どもに媚び諂っている太宰よ。きつと彼は天使の手先として勤勉に働くの
だろう。ああ、楽しみだ。

「……えつと、どゆこと?」

今の太宰と殺し合うのはきつと、面白い。

そんな事を言外に匂わせると、あからさまに顔を顰められた。不思議だ。

「……狂犬が。私を手づから躡けてやろうか?」

その時はベテルの大将がいなくなるわけだが、問題はないのか？

「ナホビノの姿ではないと言うのに口だけは達者だな」

アオガミが抑えて居ないからな。それにこんな戦争日なのだから気分が高揚するのも仕方ない。実際、貴女もそうなっている。

その言葉に鼻を鳴らし、アブディエルは去っていく。太宰に『その男にも他の悪魔にも殺されないようにな』と。

「なんで大天使様に喧嘩売ってんだよテメエはあ!?？」

そして太宰がキレる。

なぜと聞かれても良い感じに揉めれば殺せると踏んだからだ。

「……いやいやわかんねえから」

樹島の件だよ。あんなのがベテルの頭だと、ちゃんと対応しなきゃならなくて面倒だろう。

「ああ……って納得できるか！　ちゃんと話し合え！」

でも面倒じゃないか？　どうせ結論は変わらないのだし。

「なんでそんな事思うんだよ？」

なんとなく。

「根拠ゼロか！」

そんなこんなの俺たち特攻野郎 B チームのイカれた面子を紹介するぜ！

俺！ 太宰！ 蘭丸！ ザコちゃん！

以上4名！ 終わり！

樹島は妖精の森で留守番をしている。生徒達はやはり極上のエサであるし、そもそも妖精どもが反旗を翻したら大変だ。

樹島は不満そうにしていたが、古巣を襲うのは気が引けたのだろう。最終的には不承不承了承した。

さてさて、現在の戦況はとても悪い。

総戦力では負けていないが、スルトを筆頭に大物を狩れる奴が少ないのだ。

アブディエル、メルキセデクというペプシマンみたいな見た目の大天使、フィンⅡ マックール、あと俺と蘭丸。見かけたのはこれくらいか？

そんな事を考えながら片手間で悪魔を始末する。氷結魔法で固めた悪魔を武器にしての大暴れ。やれないことはないのだな。

「そういやお前さ、なんかナホビノ？　になつてる時より強くなつてないか？」

「それは蘭丸も不思議に思つていたでありますよ。悪魔の身体がどうたらというお話ではなかつたのでありますか？」

それについては俺もよくわからない。ナホビノだった頃に蓄えたマガツヒで俺が強くなつたとかそんなのではないだろうか？

と返すと「それは違う」と隣から声がした。

ザコちゃんの声だった。

「ザコ殿？」

「……あれ？　えっと、私？」

「なんか、『それは違う』つて言つてたけどどうなんだ？」

「ああ、ソレか……うん、違うよ。コイツはなんとというか、慣れたんだよ。マガツヒに」
訳知り顔でザコちゃんが言い始める。

「コイツは悪魔の身体を一度手に入れて、マガツヒを知覚した。アオガミの補助があつて、使い方を理解した。それでこの前、コイツ自身の感覚でマガツヒを使い方を習熟したんだよ。ほら、技術つて頭でも身体でも慣れなきやじゃん？」

「あー」と納得の声が出る。その理屈にようやく納得が来た。

「アマノザコ、だったか？ よく知ってんな」

「まあねえ。私なかなかの神様だったっぼいし。wikiあったからね」

「知名度の基準そこかよ!?」

そんな話をしながらスルトの炎の結界の前にやってきた。

まずは小手調べ。スルトの頭上に雷を落とす。直撃、しかしダメージは少ない。

スルトがこちらを見る。そして火球を放り投げってくるが、それを蹴り返してついでに雷を込める。

手傷は与えられた。ならば時間の問題だろう。などと思ったところでスルトの傷が癒えていくのが見える。

あの巨体を癒すマガツヒは多い、そう長くは戦えまい。とフラグを立てたのがいけなかったか、どうにも致命傷まで届かない。

これ以上は無駄だろう。一旦退く。

この時、俺の姿を見ている悪魔どもは、俺を化け物を見る目で見ていた。目の前のスルトでさえも。

今日の天気は晴れ時々雷、たまに地獄の炎！（ハラスメントは基本です）

戦つてみてわかった。スルトを殺す事は不可能じゃない。

「えっ？」

何を驚く？ スルトの治癒能力は他人から付与されたモノだ。本人はひたすらデカくて頑丈なだけだ。

だから、治るより先に殺し切れば問題はない。

「ええ……？」

「それで死ねば確かに問題は無いけどさ、なら何さつきはやらなかったの？」

「ああ、面倒になったのでありますね！」

その通りだ蘭丸。

「認めんのかい……」

一応補足するならば、無理やり寄つて切り捨てた方が消費が軽いと思つたからだな。だから、ちよつと火に強い悪魔の写せ身に付け替えてから突っ込む。

「それなら蘭丸も」一緒するであります！　なんか行けそうだったのでありますよ！」

心強い。

「今更ながらこの宇宙人は何でこんなに強いのか？」

「……蘭丸つて宇宙人でいいのかわ？」

「そうだ。センゴクジダイより日の本に居たランマルⅡモリの系譜が無いわけでは無い気がする蘭丸星の蘭丸だ。凄かろう。」

「相つ変わらず、何言ってるのかさっぱり分からねえ。俺がバカだからか？」

「理解できるのは脳みそに瞳があるとかの狂人だけだから、何も問題はないよ。うん」
失礼な事を言うな。俺はまだあそこまで啓蒙高くはあれて居ないぞ。

「はいはい」

とかなんとか言いつつ龍脈溜まりを探す。写せ身を扱う機材のある邪教の世界に赴くためには、龍脈溜まりから飛ばなければ行く事はできない。

……のだが、見つからない。不自然なほどに全く。

近場で死にかけていたヴァルキリーに尋ねるが、彼女も知らないとのこと。

困った。

「……それならば、この国の悪魔達、国津神に頼るのはどうでしょうか？ 彼らは火に強くなる呪法を持っているのだとか」

「うえ、国津神かあ……」

知っているのかザコちゃん。

「ほら、私を担ごうとした天狗共。アイツらの大将だよ」

「なんか聞いたことあるわ。アマツカミとクニツカミって奴ら」

なるほど。つまりそいつらをぶちのめしてザコちゃんを頭に据えれば、ザコちゃん王

朝の誕生になる訳だな。

「しれっと何押し付けようとしてんのさ」

いや、言ってみただけだ。ザコちゃん王朝という単語を思いついたので。

「愉快な奴め……」

などと言いながら笑みを見せるヴァルキリー。もうすぐ死ぬというのに、綺麗に笑う

モノだ。

「アンタはこれからどうするんだ？」

「私はもう一度戦いに行きます。仲間の仇を討つ為に」

「そっか……頑張れよ」

そう言つて最後の命を燃やして戦いに向かうヴァルキリー、その顔はとても楽しそうだった。

あんな風に死にたいモノだ。と素直に思った。

神田明神に向かつて歩く。その辺りは秋葉原があつた場所であり、魔界になつた当時はノリに乗っていた電気街にはとても面白い気配が沢山ある。

例えばプリクラ。なんか風情があるし、何故か知らぬがジャックフロストが筐体に描かれている。あの雪精が自由なのか、このプリクラを作つた方々が自由なのかどちらだろう？

例えばパーツショップ。残骸しか残っていない為全ては理解できてはいないが、それでも『ニッチ』な方面に特化しているのが伝わってくる。

現代の秋葉原とは趣が違うが、どちらも根にあるのは愉快なモノなのだろう。拝金主義が目に見えるかどうかの違いだろうか？

まあいいや。

適当にしびき倒しながら先に進む。

すると、見慣れた石畳が見えてくる。少しづつ緑が増えてゆき、日本っぽい神聖な空気が伝わってきた。

「何用だ？ 人の子よ」

国津神のタケミナカタがそう問いかけてくる。その問いに対して、スルトに近づいた

めの呪法を教えてほしいと素直に告げる。

「怒れる巨人に手を出すか。愚かな」

返す言葉もない。スルトを治療してる奴を殺すには近づかないと難しかったのだ。スルトが雷に弱ければもう少し楽だったのだが……

「分不相応な事をするものではない。東京に帰り安穩と暮らせ」

とても穏やかな声で、そう語ってくる。それなりに良い神様なのだろう。多分。

と、こんな時に天気が変わった。

空から飛んできた火球を雷で吹き飛ばす。『戦ったら殺される』みたいな臆病さで苛立たせないで欲しいものだ。もっと魔王らしくどーんと構えていられないものか？

あ、どこまで話しただろうか？

「……何者だ？ 貴様」

ベテルでナホビノをやつてる者だ。……相棒は今メンテ中だが。

「これが……ナホビノツ……？」

「ヒトにしか見えぬ……？」

「人と悪魔が交われば、どこまで……？」

なんか素直に褒められてる。何故だ。

「アンタはどんな反応を期待してたのさ」

「どんなのだろう？」

などと気を緩めていたからこそ、その言葉は印象に残った。おそらく、聞き逃してはならない大切な言葉として。

「ライドウや共にいたあの少年のようだと。」

ライドウとは、東京が砂漠に落ちこちる前にブイブイ言わせていた悪魔使いらしい。今の俺に出来ることは、日本に古くからいる神様からすれば『ああまたこんな事になったのだなあ……』という風を感じるのだとか。似たような事をしてる奴らは沢山いたのだと。世界はやはり広い。

そんなライドウ だとかの方々は、しかし今では誰も生きてはいない。どんなに強くても人間であるから、『地球が無くなれば貴様は生きてはいられまい！』という感じになつたのだとか。

どんなにヤバイ生命体でも星ごと爆破すればみんな死ぬという銀河一のバウンティ

ハンターのやってる事は正しかったのだろう、うん。

「なんか、シャギョームジョー？ な感じ。どれだけ強くても、ダメな時はダメなんだね」

「てかさ、東京が魔界に落ちたつて本当にヤバイ話だったんだな。話としては分かってたけど、全然理解してなかった」

スケールの大きい話だからな。実際俺もよく分かってはいない。

東京が滅んだという話だったが、なんだか東京以外が滅んだという解釈の方がしっくりくる。だが、それもどちらかと言えばという話で、この解釈も違うのだろう。

「なんかさ、東京以外を見ればはつきりしそうな話じゃない？」

ザコちゃんの言葉にハツとする。俺は東京から出た事が無かったが、太宰はどうだ？

「ああ、俺も俺も。てか、俺らの世代だとそんなもんじゃねえか？ 修学旅行なくなったし」

それにウチの高校つて他県の奴らいないしな、と太宰は言う。

なんだか、今まで暮らしていた世界が急に狭く苦しく思えてきた。ゴタゴタが終わったら旅行に行ってみよう。

そんな事をなんとなく考えていた。

「んじやあ、俺はこの辺で。お前が戦ってる間に周りを調べて、スルトを治してる奴を見つければ良いんだな？」

ああ。もうちよい言うなら殺すところまでやってくれない。お前ならやれるだろう。

「頑張りをするけど、お前見てると俺が強くなつたつて全く思えねえんだよなあ……」

そんな事を言った太宰は悪魔召喚プログラムの中にいる天使共に慰められている気がする。見た目美人であるのに同情の心すら芽生えるのは何故だろうか？

スルトの炎の境界を、貰った刀でスパッと切り裂く。日本刀など初めて振ったが、思ったよりうまくいった。蘭丸の動きを見ているからだろうか？

そうして炎の壁を越えた先には、炎の巨人スルトがいた。怒り狂った様子は見えず、むしろ静けさすら覚える。

その手にあるのは魔剣レーヴァテイン。炎がそのまま棒状になっているナニカだ。

言葉ではなくマガツヒでスルトの思いが伝わってくる。名前を尋ねられた。

言葉ではなくマガツヒで俺の答えを返す。己の名前と、アラマサというこの刀の名

を。

いざ、尋常に！

見るがいい（コミュ力微妙な）人類の極点を！

目の前の巨人を見る。

怒りや恐怖、そういつた余分な感情が全て消え、純粹な戦意だけがその目にあつた。

アラマサとレーヴァテインは互角ではない。

俺の持っている刀は所詮付け焼き刃、タケミカヅチから貰つた『錬気の剣』に自分の力を込めて作つたモノだ。結界を破るためだけに。

対して、スルトのレーヴァテインは本物だ。スルトと共に戦い抜いた過去が、その輝きをより強くしている。

あと数回剣を合わせればアラマサは消し飛ぶだろう。遠距離戦で本領を發揮できていないのはスルトも同じだったらしい。

「足元！」

ザコちゃんの声がした。スルトが振つた剣の『余熱』が足元を溶かし、足を取られたタイミングで炎を叩き込む算段らしい。

溶けて消える前に前に飛び出し、雷を放つ。『ジオダイン』、雷の魔法の大技だ。

だが、空中に飛ぶ事はスルトにとっては計算内だったのだろう。雷を受け止めながらレーヴァティンをしつかり構え、俺に直撃させてきた。

ガードはしたが踏ん張れない空中では衝撃は殺せず、ビル群への弾丸ライナーが決まってしまった。ボールが俺でなければ拍手喝采だったろうに！

ダメージは中々に大きい。しかし回復に時間は割く事不可能だ。

火球の雨が間髪入れずに俺のいるあたりに降り始めたからだ。一発一発の火力は程々に、ダメージを負った俺を仕留められる程度。見た目に似合わずクレバーな奴！

瓦礫を抜けて火球をかわしていく。しかしスルトは俺を見逃さず、レーヴァティンから伸ばした炎の斬撃で狙ってくる。

火球の雨が天井となり、回避に使えるスペースはほとんどない。

そんな中で、身体は勝手に動いた。火球の天井と斬撃の間に体を潜らせて前に一回転、そのまま速度を維持して火球の範囲から抜ける。

体育の授業がこんな時に役立つとは、義務教育は捨てたモノではないらしい。

「蘭丸の事を忘れて貰っては困るでありますよー！」

そんな時、しつかりちやつかり間合いを詰めた蘭丸が暴れ出す。

無数の刀がスルトの喉元を切り裂き、反撃の炎を回避した後レーヴァティンを持つ腕を切り刻む。

スルトの巨体は大怪獣の如きものだが、それ故に小回りが効かない。

定石通り、間合いの内側に入れば有利に戦えるようだ。

「蘭丸！ 長居すると焼け死ぬよ！」

「理解しててでありますよ！」

とはいえ、それはあくまで有利というだけだ。スルト本人の熱だけで有象無象は焼き払えるのだ。どんなに強い奴でも、その熱は手傷になり得てしまう。

強い強いとは思っていたが、ここまでとは。

もしかすれば、スルトを遠距離で仕留めようと思いついたのは『近接戦闘をすれば殺される』という恐怖がどこかにあったからかもしれない。

だが、そんなことはどうでもいい。

スルトは今、致命的な隙を晒している。俺への攻撃でのマガツヒ消費、蘭丸からのダメージ、それらが重なったが故だ。

そう判断して全速力のままでスルトに突っ込み、奴の頭にアラマサを突き刺す。

そしてそのまま雷を解き放つ体内からの雷はスルトの体を焼き尽くし、その命を焼き払った。

再生はしない。どれだけの治癒能力があるかと、一撃で命を落とせば意味はない。楽しかったとスルトの死体に告げた後、俺たちは魔王城へと進むのだった。

魔王城へと進む俺たち。不思議なことに襲われる事は少なくなった。本拠地なので腕利きの連中がゴロゴロ居ると思っていたのに残念だ。

そんな事を思っていた時だった。

「……ユート殿、ザコ殿」

蘭丸から、ピリついた声が聞こえる。蘭丸の指差す方を見れば、そこにはマガツヒに解けかけている死体があった。

蘭丸の仕業ではない。蘭丸だとしてもここに転がっている連中を仕留めるには時間がかかるからだ。

太刀筋はもう読み取れない。死体は消えかかっているからだ。だが、刀でやられたモノ、銃で撃たれたモノもいるような気がする。

「……ねえ、一旦下がらない？ これは私たち要らない気がするよ？」

そんな気がしないでもないが、下がったところでどうしたという話になる。

どこにしようとして、コレを作った奴と戦うのならば誤差でしかない。

スルトやメルキセデク、アブディエルと同格の超強力悪魔が瞬殺されている、この首塚を。

「ほう、ナホビノの姿ではないのか」

東京砂漠にて出会った強者。

軍帽マントに日本刀、肩に風切る悪魔狩り。

八雲シヨウヘイがそこにいた。

「……ヤバい」

ザコちゃんが反射的に戦闘姿勢に移っている。逃走を考慮に入れる事ができないが故にだ。

蘭丸は刀を無数に展開し、マガツヒを全力を込めていた。

そして、俺の身体は実力を『理解できた』事に震えていた。

自分が、好き勝手に振るっていたナホビノの力の片鱗。その数倍の力を八雲は持つて

いる。

俺に出来ることで目の前のコイツに出来ない事はないだろう。俺は流れるままに強くなつた結果であり、コイツはその先なのだから。

「……貴様、何故笑う？」

そう言われて気付いた。俺は笑っているのだと。

目の前の強敵に、勝てる訳のない戦いをする。そういうのが楽しいと思うからだろうか？

それとも、ただの強がりなのだろうか？

まあ、どっちでもいいだろう。理由が分からなくてもやる事は変わらない。

押し通る。目の前のコイツが敵ならば。死力を尽くすしか道はない。

俺と八雲は笑いながら刀を打ち合わせる。アラマサの刃は容易く砕けた。

蘭丸が刀だけを飛ばして包囲網を作る、マントを振るっただけで全て撃墜される。ザコちゃんの風が放たれる。八雲のマガツヒだけで無惨に散った。

無理矢理近づいて頭突きをかまそうとする。速度が乗り切る前に刀の柄で撃ち落と

された。

ザコちゃんが治癒魔法をかける、傷が深すぎて致命傷のままだ。

そして蘭丸が本命の一太刀を解き放つ。俺たちを囿にして力を貯めた一撃だ。

流星のように蘭丸は飛び、絶殺の一撃が放たれた。

そして、その流星は八雲の左手で掴み地面に投げつけられた。

そして俺に刀を、蘭丸に銃を突きつけた。

俺も蘭丸も最後の力で絶殺の間合いからは逃れたが、それ以上何か出来る余力はない。

「……なるほど、多少はやるようだ」

完膚なきまでに負けた。

死んでないだけでこれ以上なにもできない。命を捨てても、傷一つにすら届かない。それが理解できるほどには、賢しく強くなれてしまった。

その上八雲は死屍累々の俺たちを前にしても隙を見せない。眼を曇らせない。呼吸ひとつするだけで切り捨てらる確信がある。

そんな極限の緊張の中で八雲は一つ声を出した。

「貴様、ナホビノにはならんのか？」と。

それになんとか『今は相方も別行動をしている』と答えられた。

「ならばまだ使えるな」

目の前の男はそんな事を言つて武器を収める。何が目的だ？

「貴様はベテルの狗なのだろう？　ならば東京駅に行くがいい。貴様なら連中を多少は

崩せるだろうからな」

……ベテル側は、勝てないと？

「貴様が居なければスルトで全滅していただろうに」

『だから先に魔王城の連中を殺していたのだな』という納得がある。ベテルが全滅するのなら、魔王軍を滅ぼせば全部死ぬ。そういう事だ。

だが、何故俺を見逃す？　絶対的な力の差はあるが、それは今この瞬間の事でしかな

い。

「それは貴様らが無価値だからだ。どれだけ強くなろうが信念も決意もコトワリもない貴様には負けはせん」

つまり、舐めてると？

「舐められる程度のモノしか持ち合わせておらんだろうが、貴様らは」

ブチ殺す

世界がクリアになる。マガツヒの流れがどこかに流れている事も理解できた。その使い方も。なら、その流れからマガツヒを掬い上げて力にできる。

抜き打ちで放った至高の魔弾に似たナニカ。それは八雲の手で弾かれた。しかしその力は空気中に拡散し、蘭丸の元へと届いたのだ。

「……マガツヒではない？」

これは『ランマニウム』という宇宙物質らしいぞ。とある宇宙人の力の源だそうだ。

蘭丸が折れて転がっていたアラマサを握る。その柄からランマニウムで新たに刀が作られる。

反射する光の中に銀河があるような、奇妙な大太刀が。「いくであります」

蘭丸からの平坦な声がある。大太刀に乗った蘭丸は、今までの比較にならない殺意で流星になった。

八雲は刀を抜き、八度振る。

八度の音が鳴り響き、八雲に8つの傷がつく。

「蘭丸ウウ……シユトラール」

そして、蘭丸の本命が放たれた。星を征く蘭丸の光。その一撃を八雲は刀で防御した。

「今だよー！」

ザコちゃんがなけなしのマガツヒで回復を飛ばしてきた。これで限界を超えた動きがまだできる。そして、もう一度ランマニウムを精製して放出。それは蘭丸の背を押す風となり、八雲の防御を貫き吹き飛ばした。

「ユート殿！ ザコ殿！」

「わかつてる！ アレで死ぬ訳ない！」

ザコちゃんの回復の間合いに入り、防陣を組む。蘭丸も残りの力は少ない。ランマニ

ウムは一時的に作り出したモノでしかなく、もう使い切られている。

俺は当然死にかけだ。傷はギリギリ大丈夫だが、マガツヒが空である。気合いが、戦うだ意志が切れたらそのまま死ぬ。

八雲が立ち上がりこちらに向かってくる。片手に刀を持ち、もう片方に棒状の何かを持って。

「見逃すと告げたつもりだったがあな」

そう八雲が言う。しかしそんな事は理解している。

単純に腹が立ってブチ切れたただけだ。

「そうであります。蘭丸星には、故のない侮辱は1000倍で返せという決まりがあった気がするのでありますよ」

「……まあ、コイツらは雰囲気で生きてるからね。なんかするとは思ってたのさ」
「凶星を突かれたから、という訳ではないようだが」

俺に価値がないのは俺が一番知っている。たまたまアオガミと会っただけの人間で、自分勝手に生きている。だから俺への侮辱は正しい。

だが、俺にあるのはお前程度に舐められるモノだけじゃない。少なくとも友人については宇宙に誇れると。

「なるほど、ジョカが気にかけるだけのはあつたな。謂われない侮辱については詫びよう。だが力の差は変わらんぞ?」

「力に差はあれど、生きれば勝者で死ねば敗者でありますよ」

「まあ、私は見逃してくれるってんなら逃げるけどね!」

さあ、続きをしよう。そう八雲に向けて言えば八雲は刀を収めた。

「愉快奴らだ。殺すのは最後にしてやろう」

……嘘だな?

「さて、どうだかな」

そう、獯猛な笑みを浮かべて八雲は去っていった。先にあるのはベテルの陣地だ。

そんな無警戒な去り際に一撃入れようとするも「やめんか」と叱責される。

八雲の、仲魔ジョカだった。

「勝ち取った命を粗末にするモノではない。あの八雲に謝らせたのだぞ? あの一意専

心カタバツ馬鹿をだ」

「アンタ、相方に酷い言い方するね」

「半身であるからな。己程度にはわかつておるよ」

見逃される理由は、魔王軍を俺に殺させるためか?

「お主は誘導せんでも勝手にやる類の人間だろうに」

それはそうか。

「主らは、八雲の敵になったのだ。世に蔓延る悪魔害虫でなく、誇りを持って斬り合う敵敵な。だからこそよ」

それはなんともありがたい限りだ。どの道殺し合うのなら、気持ちよくやりたい。

だが、そういう語らなかつた胸の内を勝手に語るのは酷いのではないだろうか？

「なあに気まぐれよ。そちらの方が面白いとの思いつきとも言える」

良い性格の悪魔だコトで。

そんな俺の軽口をジヨカは聞き流し、八雲の方へと向かっていった。

東京駅はもう目の端に映っている。もうすぐ楽しい城攻めとなるだろう。

魔王城の三柱！（仲良くないけど仕事はしてる）

地母神イシュタルという悪魔がいた。

彼女は狡猾で、戦争を理解していたのだろう。悪魔が死ぬ時に散るマガツヒの流れを自陣側に引き込んでいた。それにより戦えば戦うほどに魔王軍は強化されるという寸法だったのだ。

そして、やがて龍脈すら巻き込んで我がモノとしたのだった。

正直に言っただけともう少し遅れていたら大変な事になっていただろう。スルトを狩るために消費したマガツヒの全てが敵側に回ると言うシステムなのだから。

とはいえそれは机上の空論。どれだけマガツヒを集めても陣を作ったのはイシュタルでしかない。

マガツヒ全開のイシュタルを殺せれば、何一つ問題は生まれなかったのだった。

という訳でこれよりネオ東京駅見学を始めたいと思います。悪魔の悲劇的ビフォー

アフターは楽しみだ。

椅子に髑髏の装飾とつけているのだろうか？

「なんでそんなウキウキしてんのさ。さっきまで死んだ目してたのに」

「首を取った達成感からではありませぬか？ 蘭丸も正直ダレてましたが、やはり大物の首は良きものでありますよ」

うむ。と蘭丸に深く頷く。

イシユタルはまあそれなりに強かった。しかし死にたくないが為に自己回復しまくるのはどうなのだろうか？ 打開策がないなら相打ちを取る為にマガツヒを温存するモノではないだろうか？

終わった事終わった事、と心に再び生まれた虚無感を放り投げる。戦いの末にイシユタルは死に、東京駅への門は開いた。それで良いではないか。

ちやちやつと行こう。

すると遠くから太宰が声をかけて来た。

「……すまん！ 俺の中には行けねえ！」

なにか『するべき事』を見つけたのだろう。おそらく必要なコトだ。

何かは分からないがとにかく任せてみよう。悪いことにはならない筈だ。

「それって、興味ないって事？」

まあ、うん。

「言い淀みやがったよこのアホは」

正直、なんか考えるのめんどくさい。とても、疲れている。

3人で東京駅に踏み込む。

そこは何というか……何だこれ？ 迷路？

「マガツヒたつぷりの防壁をここまでトチ狂った風に並べるセンスが分かんないかなあ。絶対住み辛いよねコレ」

赤黒い模様のついた立体的な壁がごちゃごちゃしている。トンネルみたいに下を潜る場所もあればジャンプして足場を飛び移る場所もある。

その上妨害は風により進行を妨害するトラップなど様々だ。これはまさに城だ。迷路によって攻め手を疲労させ、罠によって命を獲る。正直とても素晴らしい。

だがしかし、まるでせんぜん、俺の命を奪い去るには程遠かった。

……そう、程遠かったのてただただ面倒なだけなのだ。あ、この道さつき通った！
わかりやすいように又エの首で目印置いてこう。

「……わかりやすくキレてるし」

「城としては良い出来なのでありますよね。敵を迷わせ時間を稼ぐという面だけを見れば」

「でもその辺の悪魔も迷ってたよ？」

「彼らは鉄砲玉でありますから。余計な話を耳に入れるのは避けたのでは？」

そんな緩い愚痴を吐きながら東京駅要素を放り捨てた迷路を彷徨う。

もう既に大勢は決した。悪魔の主要なメンツは死に絶え、ベテルの天使はそれなりに生きています。

切り札だったイシユタルを殺したのだから盤面がひっくり返る事もない。戦争は終わっているのだ。

だからこそ、この迷路に腹が立つ。負けを認めてさっさと腹を切れ。日本に住んでるのだから日本の習慣に従うべきだ。

中途半端に抵抗を続けても守れるのはプライドだけだろうに。

……まあ、舐められたままで終わりたくないのは分かるけれども。

「ねえ、もう私が先導していい？」

「ザコ殿、道が分かるのでありますか？」

「分かんないけど、頭茹だつてるコイツよりはまともに進めると思う」

失礼な俺はまだキレていない。俺をキレさせたら大したモンだぞ。

「はいはい。じゃあまずあそこの風使つてジャンプして」

ザコちゃんに言われるままに天井近くまで飛び上がる。

「そしたら、このまま飛んでいくよー」

そしてザコちゃんに掴まれて、空中散歩する事に……え？

「ザコ殿、力強くなつていませぬか？」

「そりゃアンタらがバカス力皆殺しにしてんだから、おこぼれのマガツヒでも十分強くなるつて」

なるつて」

し、しかし……空から見渡しても行くべき道は分からないのではないだろうか？

「え、方向だけ合わせてあとは壁プチ抜けばいいじゃん」

なんと……

俺は知らぬ間に『迷路をちゃんと進まなくてはいけない』という常識に縛られてし

まっていたようだ。

それをザコちゃんに指摘されるとは、ヒトとして恥ずかしい。小賢しくなければ人間などただの裸ザルではないか。

「……え、そんなにシヨック受ける事？」

ザコちゃんの成長と俺の退化の差にとても落ち込む心で奥へと進む。

八雲とやり合ってからどうにもシャンとしない。イシユタルは殺し続ければ死んだし、警備に残っている悪魔は歯ごたえがない。

消化不良極まりない。

そんな心は最奥部にたどり着いた瞬間に消し飛んだ。

最奥部から研ぎ澄まされたマガツヒを感じる。全てを喰らい尽くすような魔王の気配。

「貴様がスルトを倒した人間か」

荒ぶる心を無理やり押さえ込み、殺意を滾らせた魔王がいる。

そうだ、と答える。

「ならば聞け、我らの言葉を」

魔王アリオク、魔王軍の長。

というか、長になってしまった悪魔だ。

魔王ルシファーが消え、他の魔王も散り散りになったその動乱。ルシファーの軍勢は『とりあえず』で大将を決めた。

そして、その時に決まった『とりあえずの魔王』が目の前のアリオクなのだ。

力は、最強無比という訳ではない。

志は、気高い訳ではない、

情は、熱い訳ではない。

それでも、彼は魔王であり続けていた。

「スルトは、北欧の巨人だったモノだ」

そんな彼が、語り始めた。

「奴は世界を終わらせる炎として、神との決戦の為に牙を研いでいた。その勝利の為に」

あの巨人を思い出す。彼は強大な力を『戦う為』に扱いきっていた。いつか神を殺す為の技として。

「イシユタルは、女神として讃えられていた。豊穡と戦を司り、時に敬われ、時に畏れられていた」

イシユタルを思い出す。彼女は強大な力を戦いにも癒しにも使っていた。女神だった頃の在り方のように。

「他の悪魔とて大差は無い。秩序の神は、奴以外全てのモノの『生き様』を奪ったのだ！それは人間にも同じ事！今のまま飼われていれば、全てが奴を崇める木偶に堕ちる！」

「理解しているだろう！ 貴様なら！」

そのアリオクの言葉には、不思議な熱があつた。

アリオクが魔王軍の総大将になった理由は『たまたま』なのだろう。だが、総大将を続けている理由はこういう所にあるのだろう。必ず復讐の牙を突き立てる、そんな気がする。

だが、認められない理由がある。アリオクの主張が正しいとか、秩序の神がクソツタレであるとかは『どうだつていい』。

神を殺すだの世界を変えるだのは勝手にすればいい。だがそのために関係ない連中を巻き添えにする連中は認められない。それだけだ。

とはいえごちやごちや語る意味はないだろう。どうせ殺し合う結論は変わらない。

「理解したとも。貴様もまた、我らの復讐の障害だと！」

そうして、アリオクがマガツヒを高め『陣』を描く。

その手には2つの石。見覚えはない。ナホビノの知識にも、どこにも。

「招来石ツッ!?」

ザコちゃんが驚きの声をあげる。そして使用を止めようとするが、間に合わない。

二つの召喚陣からは、2柱の悪魔が現れた。

一体は炎の巨人スルト。ビルを越える怪獣の大きさを捨て、人間サイズと戦えるよう

なサイズで。

一体は地母神イシュタル。雷と回復しか使わなかったかつての女神。

そのときようやく気付いた。目の前のコイツは『牙を隠したのだ』と。

「アナタは強い、信じられないほどに」

イシュタルは愉しそうに語る

「けど、決して無敵じゃない」

そして、魔王城全てのマガツヒが目の前の3柱に集まってくる。

「死ぬまで殺せば死ぬ道理は、貴様とて同じ事！」

「死ね、ニンゲン！」

スルトの炎の剣、イシユタルの畏怖なる光輝、アリオクの渾身の剣、それぞれの必殺が放たれた。

その時、『少年、召喚を』と耳に馴染んだ声が聞こえた。

迷わず召喚、そして同時に合一神と化す。

敵は誇り高き三柱の魔王、相手にとって不足なし。

「何ッ!?」

アリオクとスルトの剣を受け止めて、イシユタルの雷を己の雷で相殺する。

いざ、戦闘開始だ。

終結の大決戦！（未来に希望はありますか？）

『少年、今の出力は高水準で安定している。多少の無茶は効く筈だ』

心の中で頷き、マガツヒの剣を作り出す。今、目の前の3柱は俺の一挙手一投足に注視している。

つまり、蘭丸が暴れる時間だ。

「いくであります！」

刀に乗って飛翔する蘭丸が3柱を小刀ビットで切り刻む。スルト、イシユタルにダメージを与えつつアリオクの耐性をチェックした。

「見えた！ 斬撃はちやんと通るよ！」

ザコちゃんの指示にニヤリと笑い、蘭丸はアリオクに一直線へ進路を変える。

使える刀が一つ増えたただけなのに自由度が段違いだった。ああ、貰ったアラマサ（故）よ、いい仕事だ。

蘭丸の突撃によりアリオクは串刺しになり、そのまま浮いている小刀を手を取った蘭丸の殺意あふれる一撃を受けた。

「サマリカーム」

そして、『そこで死ぬ事』を前提とされたイシュタルの蘇生魔法によりアリオクは蘇り、全方位に氷結魔法をぶつ放した。

蘭丸の回避は間に合ったが、余波で手足が凍り動けない。

そこを、スルトは見逃さない。レーヴァテインに全力を込めた斬撃、『ブレイブザツパー』を放とうとした。

そう、ようやく俺から目を逸らした。

『神矢来』

無数のマガツヒの矢を解き放つ。ナホビノの力であり、万能属性の広範囲攻撃だ。

蘭丸を襲うスルトの足を止め、アリオクの体勢を崩し、イシュタルの腕を吹き飛ばす。

そして、四肢が凍れども蘭丸は蘭丸である。当然に追撃をかまそうとして、即座に踵を返した。

イシュタルのマガツヒが高まったが故に、だ。

「なんであんなびんびんしてんのさ!?!?」

ザコちゃんが悲鳴を上げながら蘭丸を回復する。イシュタルは高めたマガツヒを回復に使い、向こうも立て直しをした。

結果としてはお互いにノーダメージ。仕切り直した。

「根性ってだけじゃないよね、あのタフさ」

ザコちゃんが呟く、根性の割合の方が高いとは思いますが、しかし仕掛けはあるだろう。この城そのものが奴らの電池というなら、話は早いのだが。

「消耗戦は、避けたいでありますな」

そう、そこなのだ。

目の前の3柱は全身全霊のヤケクソだ。全てのリソースをここに注ぎ込んで一発逆転を狙っている。

そういう連中は時間をかけて心を折るのが楽ではあるのだが、それは補給と退路があつてのこと。

ここは敵の本陣。こちらにも消耗戦に付き合つて集中力を切らせれば、仕込まれた罠に食いちぎられる。

「臆したか？ ナホビノ！」

アリオクの声が響く。この状況で臆さない奴つているのだろうか？ と思いつながらあたりを探る。ぱつと見で不自然なモノはない。

よし、場を荒らして様子を見よう。そんな雑な考えから再び『神矢来』を放つ。

防御、あるいは回避されろくなダメージにはならないのは分かっている。だが何かしらヒントは得られる筈だと考えたが、やはり無駄に終わった。

「甘いぞ、ナホビノ！」

矢を弾いたアリオクが全身する。剣から放たれる『渾身剣』は俺をしつかりと捉えた。技を放った後の隙は消せず、直撃を貰ったが致命傷ではない。そしてアリオクは蘭丸の斬撃を防いだが敵陣までに押し返された。

そして、スルトが炎を解き放つ。部屋全体を消し炭にするような凄まじい火力だった。

ザコちゃんが火障石により防壁を貼ったが、それはアイテムでギリギリで防げただけ。

敵は、イシユタルによって回復されていた。

俺たちが手傷を負って、また仕切り直し。

周辺に変化はなし。マガツヒの流れも変化はない。

ならば、とイシユタルを狙う事を考える。

そこで『イシユタルを瞬殺する事が難しい』という経験がその考えを否定する。

先程駅前で戦ったイシユタルは信じがたい生き汚なさを発揮した。命の全てを一撃で吹き飛ばさなければ、殺す事はできない。

そんな大技は当然潰される。命ごと。

「あらあら、そんなに悠長にしている良いのかしら？」

その言葉と共に俺たちの動きが鈍る。デバフ魔法のマハスクンダだ。

『逃げる』という事が頭に浮かんだ瞬間にコレとは、本当に強かな奴らだ。

「戦力で勝つてても戦術と戦略で負けてるよ！ どうすんのさー！」

そういう時の定石は決まっている。ユニット性能で敵の考えを越えれば良い。

まずは、下がった能力を上げる。マガツヒを高めて大技を使う。

妖精の悪魔の写せ身より学んだ力、『妖精王の宴』。

自分達の能力を極限まで強化する能力だ。

これにて下がった能力は戻り、僅かな間とはいえ能力は倍増した。

だがそれは切り札を先に切ったという事。『これを防ぎ切れれば勝ちだ』と考えている

のが分かる。まさしくその通りだ。

防ぎきれれば、の話ではあるのだが。

蘭丸と俺が同時にスタートを切る。

敵の3柱は纏まって防陣を組んでいるので、一撃では殺せはしない。

だからまずは、数を叩き込んで崩す。

「ッ!?」

まずはアリオクが反応する。飛ばしたマガツヒの斬撃は剣で防がれた。そのまま俺

は加速する。

次にスルトに刀が直撃した。蘭丸の飛ばした小刀ファンネルの一つだ。蘭丸はそのまま加速する。

次にイシユタルに斬撃が当たる。俺の飛ばした斬撃だ。速度そのままに俺は連中に回り込む。

次にアリオクとイシユタルに刀が直撃する。蘭丸の飛ばした小刀だ。蘭丸は俺とは逆方向に回り込む。

「捉えられないッ!?」

「此奴ら、嵐を作る気か!?」

嵐とは面白い表現だが、そんなに間違っではない。

アオガミが思い出した技、『荒神螺旋斬』それは敵を螺旋の中に閉じ込めて切りまくる乱撃技。しかしあの3柱を止めるほどの拘束力はない。

蘭丸が使えるようになった技、『オーキッドラウンス蘭丸・ストラッシュ（未完成版）』は敵を小刀で

切り刻みながら大太刀による一撃を打ち込む技。しかし大太刀の攻撃に移行するタイミングが隙になってしまう。

つまり、蘭丸の小刀が拘束力を補い、俺の乱撃が蘭丸の隙を潰す。これが！

「マガツ・蘭丸・ストリイイム！」

二重荒神大連斬！

「技名揃ってないッ!?」

ザコちゃんの声が響く。技名はお互いに今決めたのだ。これから協議の末になんやかんやする！

「ふざけた態度をッ！」

「アリオク！ 防ぐ事だけに専心せよ！」

もうスピードは十分に高まった。止められるものなら止めてみる！ 蘭丸の刀ファネル以外では止まらんぞ！

と、ここでスルトが二柱を庇い出す。先程のゴジラサイズではなくなったが十分に巨体であるため、かなりの刃をその身で遮断できている。

だから、先にスルトを仕留め切る。

高まったスピード全てを破壊力に変えた一撃をスルトに叩き込む。それは圧縮された嵐であり、ナホビノの渾身の一太刀だ。

ダメージを多く受けていたスルトはその一撃をその身で受けた。アリオクとイシユタルには大きなダメージはなかった。

そしてスルトはその身を二つに分け、火の粉すら残せない死体になった。

「耐え切ったぞ！」

「アリオク、ぶちかましなさい！」

アリオクとイシユタルは、残ったマガツヒ全てをアリオクに集め、『禍時・蛮行』を引き起こす。それは魔王のマガツヒによって技の威力を倍増させる奥義だ。

そして、アリオクの氷が放たれる。

その魔法の位階は、『バリオン』

『マハブバリオン』という全てを凍つかせる絶技が、マガツヒによって高まった力で放たれた

……かに、思えたのだろう。

「獲った！ であります！」

アリオクの魔法は結実する前に霧散した。

蘭丸の大技が直撃してアリオクが死んだからであり。

そして、アリオク達に流れ込むマガツヒの量が減少していたという理由でもある。

最高位階の魔法を扱うには、アリオクの力はほんの少し足りなかった。だからあらゆるやり方で自らを強化して盤石にしていた。

その強化の一つが剥がれ落ちた故に、蘭丸の一撃の着弾に間に合わず、アリオクは息

絶えたのだ。

「……ツッ？」

息を飲むイシユタル。そしてその体にザコちゃんの使った『封技の秘石』が直撃する。これでイシユタルは回復の技を扱えない。

動きを止めたイシユタルの首を、『逆風』にて吹き飛ばす。これで終わりだ。

h r

まだ死に切れていないアリオクの魂が、語りかけてきた。

「貴様、いつのまに我らの集魔陣を……？」

集魔陣というのは奴らがマガツヒを集めていた呪法の事らしい。ならば答えは簡単だ。

『誰か』がそれを止めたのだろう。

この戦場に居るのは俺たちだけではない。

なら土地のマガツヒを使いたくなる奴もいるだろう。

そういう事じゃないか？

などと適当に答えを返す。『実際はなんとなく奴らのマガツヒが減ってるなー』というくらいの緩い判断基準だったのだが、格好つかないので言わないでおく。

「そんな、コトで……」

とはいえ本当に驚いた。お前ほど強い悪魔がチームプレイで戦ってくるとは思わなかった。やはり絆というものは馬鹿にならないのだな。

だから、誇って死んでいけ。

その言葉にアリオクは、怒りと後悔と、そしてほんの少し別の表情を浮かべて死んだ。とりあえず、これでひと段落だ。

東京をなんとかする方法とか、蘭丸を宇宙に帰す方法だとか、他にも色々含めて探す余裕は産まれるだろう、きつと。

そんな風に、先のことを考えられた。

「……ユート殿？」

蘭丸とザコちゃん、不思議な目で俺を見る。何かあったのだろうか？

「……なんか、アンタから優しい感じがした」

「いつもは少し無理をしている気がしてたでありますよ。若干であります」

「まあその若干の時点で違和感バリバリなんだけどね。キャラじゃないからやめない？」

正直似合わないよ」

失敬な、俺ほどに優しく穏やかで公明正大な美少年はそういない。

そんな冗談を交えた雑談をぐだぐだとしながら、魔王城を後にした。

ターミナルを用いて、東京に帰ってきた。

蘭丸とザゴちゃんは妖精の森に行っている。

『ちよつと探し物のついでに自室に帰ろう』なんて考えながら電車に乗ったら、なんとびつくり寝過ごした。加えて言うならそもそも乗る電車を間違えていた。

こりやまたやらかしたなあ、と電車から降りようとしたその時。

俺の目には、世界など見えなかった。

目に入る全ての人々がヒトではなく、目に映る全てのモノが偽りで、目に映る全ての世界は何もなかった。

17年前、東京は魔界に落ちた。そして秩序の神がそれを元に戻した。

だから現代の東京はおかしいのだと思っていたが……

果たして、偽造されたのは東京だけだったのだろうか？

「そんな当たり前の事を疑問に思うな、貴様は仮にも人間なのだから」

恐るべき悪魔召喚士八雲シヨウヘイの声がした。

彼は、超然とした目で俺を見た。

「これが今の世界だ。悪魔に迎合され、現実を見ないゴミ屑の人形どもしか居ない。故に、全てに価値はない」

彼の言葉が、響く。

「俺は天使も、悪魔も、人形も、尽くを滅ぼしてヒトの世を取り戻す」

彼はそれ以上何も言わなかった。その滅ぼす尽くの中身には、俺の想像と同じものが入っているから。

妖精の森開拓中？（アイドル農家はまだいない）

「……あの、大丈夫ですか？ 先輩」

優しい声がかけられる。どうやら相当に参っているように見えたらしい。

感謝の言葉を伝え、体を起こす。眠った覚えはないが、寝ていたらしい。

目の前にいるのはミヤズちゃん。女神よりも神々しいを持った女の子だ。彼女はど
うやら、妖精の森で苦しんでいる生徒の助けとなるべく今日も今日とて東奔西走して
いるようだった。

「先輩、こんな所で眠ると風邪ひいちゃいます」

そんな風に彼女は言う。この場所はシナガワの南にある水辺近くだ。確かに川沿い
というのは色々と危ないし、当然冷える。気を付けよう。

風邪をひくようなまっとうな肉体ではないとは思っけれども。

「それで、どうしたんですか？ 調べ物だとかで蘭丸さん達と別れてたって聞きました
けど」

……言葉に詰まる。が、よく考えれば何も問題はなかった。

調べ物しようとしたら電車で寝過ごして東京の外まで行ってほとんど何も出来ず、不

貞腐れて寝ているだけなのだし。

「あー……疲れてるとそう言うこともありますよね。私も正直、今東京に帰ったら寝過ぎしちゃうと思います」

ミヤズちゃんはとても頑張っている。だが体力の限界を越えられるわけではないのだから、休めると思えたら体は勝手に眠ってしまうとも。日本の電車は席にさえ座ればとても快適なのだし。

そんな言葉に柔らかく笑う。なんとも彼女らしい姿だった。

「そうだ。これからご飯なんですけど、先輩って食べられないモノありました? 果物で」

これでも健康優良男子高校生だ。食べられるモノならなんでも食べる。毒の類は避けられるなら避けたいとは思うが。

「普通の人は毒物食べると死んじやいますからね」

ジトつとした目で釘を刺してきた。

なんというか、気をつけます。ハイ。

そんな様子でミヤズちゃんと一緒に水を汲み、妖精の森のキャンプ地へと足を進める。

……辛くは、ないのだろうか？

そんな言葉が出てしまう。

「辛いです」

そう、彼女は素直に言う。

「私たちはみんな傷だらけで、明日生きていられる保証もなく、とても怖いんです。けど……お兄ちゃんや先輩みたいに、頑張ってる人がいるって思うと、頑張ろうって思えたんです」

ミヤズちゃんは、そんな風に強がりながら笑っていた。

「ユート殿！ ミヤズ殿！」

「あ、やつと来た」

ザコちゃんと蘭丸が出迎えて来た。知らぬうちに妖精の森にはログハウスやらができていて、雰囲気は変わらせずに便利な感じになっていた。

自然豊かで素材があるとはいえ、よくもやるモノだ。

そんな、暖かい集落を見て『それがどれだけ脆いモノか』が見えた。

今も、心が死んでる奴がいる。

今も、人を喰おうと目論む奴がいる。

そして何より、外からの脅威に脆すぎる。

戦わなくてはならない。俺のような化け物は、自由の代わりに責任を背負っているのだから。

などと、真面目な事を考えていると目の前に凄まじいモノが現れる。

アップルパイだ。そう、ただのアップルパイだった。……見た目の上では。

まず匂いが違う。焼きたてのパイ優しい香りの中にリンゴの冒涇的とさえ言えるモノがある。

そうして一口食べてみれば、口の中に黄金が広がっていた。パイの味も、リンゴの味も、バターの味も、全てが金色に輝いて思える。

そして、一切れのパイを食べ終えた俺が口にしたのは『ご馳走様でした』という感謝の言葉であった。

「はい! お粗末さまでした!」

ニコニコと、素敵な笑顔でミヤズちゃんが声を出す。

こんなに美味しい食事だからか、生徒たちにも少しだけ笑顔が戻っているように見えた。作った奴は誰なのだろう。その悪魔のいる神話に対しての好感度が上がりそうだった。

すると、樹島が一切れのパイを持ってこちらにやってきた。彼女も食事の魅力には勝てないのだろう。ちよつと『やったぜ』感が出ていた。

「樹島先輩！ 今日も美味しかったですよ！」

「別に……イブンのリングゴが美味しいだけでしょ」

なんとびつくり、このアップルパイを作ったのは樹島らしい。意外がすぎる。アレと同様に料理の類は微妙だと思ったのだが。

「夕才のやらかしを見てたら普通程度に料理できるようにならないと、とは思うわよ。小学校の頃病院沙汰になりかけたからね」

「ああ……磯野上先輩って、昔から料理壊滅的だったんですね。寮のキッチンが爆発した時になんか間違えただけじゃなくて」

え、なにそれ知らない。

「現場にいた全員で隠蔽したから……」

遠い目をする女子達。樹島とミヤズちゃんだけでなく、そのへんで蹲ってる連中もだった。

「……はい、この話終わり。それで、アンタはちゃんとやったの? タオの件とか」

手応えはさっぱり。磯野上関係の奴は見当たらなかった。手がかり無しだ。

「……あの優男、適当言ったわね」

樹島が『なんか適当に暴れてれば出会えるだろう(意識)』とのフィンマツクルの言葉を貶している。

まだまだ戦いは激化するのだから、間違つては居ないとは思うのだけでも。

「てかさ、アンタつて何調べに行つたんだっけ?」

そんなザコちゃんへの問いに対して、東京の治療法、というか17年前に起きた事についてと答える。

『秩序の神とやらがどうやって東京を救ったのか』という感じの具体的なやり方を調べようとしたつもりだった。

まあ、『シヤカイナグロリー』と呼ばれてる事しか分からなかったが。

「しゃかいな?」

「グロリー?」

何故そんな風と呼ばれているのかは誰も知らなかった。名前つけた奴徹夜明けだったんじゃないか?

まあ、その程度だ。寝過ごした事は黙っていよう、うん。

樹島の『使えないわね……』という目線を受け流し、水を一口飲む。あ、美味しい。そんな時、なんだか見覚えのない悪魔が目についた。彼女は？ とミヤズちゃんに尋ねる。

「彼女はイシスさんです。ベテルのエジプト支部つて所からの援助を纏めてくれてたりするんですよ」

エジプト支部からの助けとは、ワールドワイドな話だ。

やはりオシリスだとかオベリスクだとかが有名な神様なのだろうか？

「……オベリスクつて神様の名前じゃないらしいですよ」

え、マジで？ と思ったらアオガミが補足をくれた。

『少年、オベリスクとはエジプトにおける神殿の記念碑の事を指す言葉だ』

……なんで石碑が神のカードの一角になったのだろう。格好いいから良いのだけけれども。

半日はぐだぐだ出来そうな雰囲気であるのだが、お仕事をしなくては。いつかやって来る日に本当に滅ぼされてしまう。

さて、今なにが足りないだろうか。砦？

「まあ、確かに防衛施設は足りないよね」

「地形は防衛に適しててありますが、洞窟を封鎖されたら退路は限定されるでありますよ」

そう話していると敦田兄の姿が見えないことに気がついた。こういう時こそメガネくんの頭脳が必要だというのに。

「……大丈夫だつて、ハヤタロウさんは伝えてくれたんですけどね」

長官とねんごろな関係だから、未来の総理大臣だとかそういうポストへのキャリアを積んでいられるのかもしれないな。

「長官? 総理大臣?」

東京防衛軍ベテルの長官は、なんと総理大臣の越水さんなのだ。

「ええ!?」

「……なんか今の総理大臣が人間じゃないって聞いたことあったわ。仕事量的な意味で」

実際ナニカサレテル類の生物らしい。ただの人間じゃないから労働基準法だとか過労死だとかそのあたりの問題は無いのではないか?

「……話脱線してない?」

樹島がそう口にする。脱線してるが、本線が途切れてるのだから仕方ないのでは?

と俺は思う。

と、ここでイシスがこちらにやって来る。どうやら食事を終えたらしい。

「こんにちは、ベテルのナホビノ。ミヤズとサホリも」

「こんにちは、イシスさん」

「……どうも」

なにか用事でもあるのだろうか？ エジプト神話の方々からしたら名もなきフアラオなゲーム漫画の話はタブーだったりするのだろうか？ それならエジプト支部を滅ぼすしかないのだが。

「ちよいちよい、気軽に戦争起こそうとしない」

冗談なのだが。

「あまり笑えないわね」

申し訳ない。

そんな訳でイシスさんの話を聞く。なんだか色々言われた気がするが、要するに『ホルスという悪魔の首が欲しい』という事なのだとか。

ああ、それならばとナホビノ式四次元ポケットから投げ渡す。

どこでやり合ったか忘れたが、なんか首がマガツヒに解けず残ったから持っていたのだ。

「ええ……?」

「先輩ってこういう人なので……」

そうやってホルスの首を受け取ったイシス。

彼女は躊躇いながらこうも付け加えた。

「これはエジプト支部の、あなたの敵になるかもしれない勢力に力を与えるのだと理解している?」

そうイシスは言う。だが、その何が問題だと言うのだろうか。

殺し合う時は正直力の大小は些細な問題でしかない。死ねば負けだし殺せば勝ちだ。ならばその時に心が軽くなるように動くのは当然のことではないだろうか?

「……アンタってそもそも『どんなに強くなられても自分より弱い』とか見下してたりしない?」

……: どうだろうか? 力に溺れる程度の心なのはないわけではないと思うが。

「違うよサホリ、そういう少し先の事を何も考えようとしてないだけだって」

「そうでありますね」

ザコちゃんと蘭丸がそれを否定する。

最近は割と先のことは考えているのだけれども。多少は。

そんな事を言っていたらイシスがため息を吐いた。

「なら貴方も一緒に来る？　必要があれば考えるみたいだし」

そんな真意の微妙に見えない言葉から、俺の今日の予定が決定したのだった。

なお、エジプト支部の連中はお台場に陣取っているらしい。某TV局とか残っていたらアレを球にサッカーしたいな。なんて事を思った。

ナホビノくんの小旅行！（区切るところが見つからねえ！）

お台場にやってきた。ザコちゃんも蘭丸も連れずに一人で。あ、アオガミと一緒に……どうカウントすればいいのだろう？まあいいや。

イシスの話だ。彼女がホルスの首を求めたのはホルスの首の太陽パワーをエジプトの連中に返す為、といった感じらしいが、なぜにこうも警戒されているのだろう？先程ぶちのめした『セト』という邪竜はなかなか強そうだった。

「……おそらく、測りかねているのでしょう。貴方のことを」

イシスはそう言う。それにしてもなかなかの洗礼だった、セトという邪龍はシンプルに強く、交渉する前に襲ってきたのだから。

「そんなセトを小鳥のようにあしらった貴方だから、警戒されているのよ」なるほど。と、納得はしたものの理解できるかは別問題なのだけれど。

閑話休題、テクテクと歩いて行くと廃材を使つてのちよつとした神殿が造られていた。

その中に入ると、頭に月の飾りを付けている男性型の悪魔が見えた。

「コンス様、イシスです」

「……すると、そちらがナホビノか？」

ドーモと挨拶をする。彼がエジプトの大将らしい。

「正直、イシスの冗談だと思いたかったよ。どうしてこんな所まで来たんだい？」
イシスに誘われて、なんとなく承諾した。正直に言えばそれだけだ。

だが、何故エジプト支部が妖精の森にアレコレしていた理由はわかった。

「……へえ、その理由ってのは？」

ミヤズちゃん

そう口にした瞬間にコンスからの殺意が高まってくる。そして、そのマガツヒも。

そのマガツヒは、ミヤズちゃんから伝わってきた感覚にとてもよく似ていた。

ならば伝えるべきは素直に感謝の言葉だろう。

コンスがミヤズちゃんに何かをした。その結果彼女は病弱だった身体を気にせずにいられる。その理由がなんであれ、ミヤズちゃんの命が救われたのは事実なのだから。

そんな事を伝えると、コンスはため息を吐いた。

「……」つちも理解した。君は相当にイカれてる」

その言葉を無視して、ひとまずやるべき事をやる。まずは、ホルスの首を渡した。

イシスがそれを受け取り、しっかりと保管用の壺へと入れていた。不思議な話だ。

「……お前は どうしてホルスの首を持ち歩いていた?」

コンスが尋ねてくる。正直に言えばこれも『なんとなく』でしかないのだが、一応理屈をつけるなら死者にはそれなりの礼儀は尽くすべしと教えられ育った日本人だから、というのが理由だろう。

「……教育、か」

なにやら考え込むコンス。彼らエジプト神話の連中から見ると秩序の神の世界で育った俺のような奴も、醜く思えるのだろうか?

まあ、どうでも良いか。俺は帰るが、お前はなにかあるか?

「それならば、問いをひとつ。君は、これから先の闘争についてどう考えている? 東京の奴にその力を捧げるつもりか?」

微妙だ。越水長官の言ってる事はそんなに間違ってもいないだろうし『とりあえず』で味方をするなら彼だろう。

もちろん明確な理由があるのなら袂を分かつつもりではいる。そのくらいだ。

「では、君自身が玉座に着くつもりはあるのかい?」

他に適任が居なければやるが、やりたくはない。

「……ひとまず方針は決まったよ。君の動きに合わせてどうこうというのは、無軌道に

「しかならないようだ」

「……ああ、これは同盟の誘いとかその辺りだったのだろうか？　個人の話と思い適当に答えてしまったのだが。」

「結ぶべきかを考えてはいた。キミ個人をそう見るべきだと思つてたからね。だが……約定がどうこうで縛れはしないだろう、キミは」

「そんな事をコンスは言う。行き当たりばつたりで生きている自覚はあるので、全くもつてその通りだった。」

「というか、現在の雇い主（仮）である長官だろうが理由があれば敵対すると言つただからそりや深く関わりたくはなくなるだろうな、うん。」

「さて、無駄話が過ぎたがホルスの首の受領は完了した。この辺りを見て回るのなら口添えくらいはしよう」

「コンスのその言葉に否定を返す。使うかどうかはともかくとして、備えなければならぬ時期なのだから。」

「そんな感じで俺はお台場から去っていく。コンスという男は信用に足る。いざという時の逃げ場として提案くらいはしておこう。」

「去っていく最中にコンスの意思が響く。」

「守ってくれている事には感謝するが、それはそれとしてミヤズに手を出したら殺すと。」

その思いに深く了承の意を返す。

俺はミヤズちゃんを内心で女神と称えたいのであつてねんごろになりたい訳ではないのだ。

びよんびよんと砂漠を飛び越えていく。

ナホビノになった頃は移動一つにしても大変だったが、慣れというのはあるものだ。かつては出来なかつた空中ダッシュも、魔法を使えばなんとか出来なくはなかつた。

……消費するマガツヒが重く、大した距離も飛べないので趣味以外で使う事はないだろうが。

などどうでも良い事を考えていると目の前の岩山が動いていた。

よく見ると、それは悪魔だった。オオヤマツミ。たしか神田のオオクニヌシ達天津神の仲間だったか?

ちよつと挨拶しようとして前に降り立つ。

オオヤマツミは明らかに正気を失っている、昔に受けたダメージが原因だろう。

恐怖は感じなかった。今の俺はただ一人、かつて死をもたらしかけた相手を前に、冷静さを崩してはいない。

どうしてコイツは、今も『戦い続けている』のだろうか。そんな疑問が浮かぶ。

傷にのたうち回った結果としての災害はあるだろう。オオヤマツミの巨体は凄まじく、普通に動くだけでも多くのモノを踏み潰して破壊している。

だがそれは、ダメージが原因で誰が敵なのか認識できていないだけなのだ。

その魂はずっと覚えている。戦うと決めた理由を。だから、狂っていても折れていない。

『……少年』

アオガミが声をかけてくる。

その言葉に肯定を返して、俺はオオヤマツミの『調伏』を始めるのだった。

オオヤマツミは今、真つ当な状態ではない。故にまず会話が通じるように思考を戻す。

『あれは、マガツヒの肥大化が原因の一つだろう。戦うための巨体が邪魔になっていると思える』

アオガミの言葉に従って、オオヤマツミの身体を削り始める。

奴は頑丈ではあるが、剣などに耐性を持つてはいない。今の俺では末端を切り刻んでも核にダメージを通してしまっただろう。故に身体を削るための効率的な方法、それはやはり水だ。奴にはそちらへの耐性を持っている。

幸いにも、アオガミの技には水を、というか海を操る技があつた。

「アオウナバラ 滄海原ノ禍」

海を作り出し、波を操る事でダメージを与える一発芸だ。殺傷力なら他の技の方が高く、『海を作る』ために生活面での色々な応用は効かない。

だが、今の状況には適した技だつた。岩を削り、小さく丸い優しいモノに還すために。

「……アア」

波に削られ身動きが取れなくなったオオヤマツミは、少しの発し始めた。

「スサノ……オ……」

それはアオガミの素体になった悪魔なのだろう。疑問よりも納得が先に来た。めちゃくちゃに有名だつた。なんとなくだが俺でも知っている。暴れん坊な日本の神様だ。

『どうやら、そうらしい』

そういう事ならアオガミの力の方向性には納得だが、それはそれとしてスサノオさん本悪魔からしたら『自分の死体を改造人間の素材にされた』ようなモノではないだろう

か。

本人がどう思っているのかによってはぶちのめす敵が増えるな。

『実際私は造られている。本人の納得はあったか、もしくは了承だとかは得られないほどに弱っているのではないだろうか』

確かにそうか。

と、脱線していた俺とアオガミの意識をオオヤマツミに戻す。

理性はある程度戻っている。ならばハイとかイエスとか答えられるだろう。

『オオヤマツミ、お前を一度要石に封じたい。お前の安定化のためだ。封じた後は神田の寺にいるお前の仲間の元へ帰す事を約束する』

アオガミの実直な交渉。それをオオヤマツミは承諾した。それにより調伏は完了しオオヤマツミは封じられ、小さな石へと姿を変えた。

これは……ミニサイズオオヤマツミ？

なんてどうでも良い事を呟くもツツコミが来ない。アオガミのスルースキルはとても高いのだ。

ノってくる蘭丸やツツコんでくるザコちゃんがいなければ、意外と寂しいものなのだろう。

寄り道が続ける。神田の寺まではなかなか遠いが、急げばどうにでもなる距離だった。

こうして余裕を持って東京観光はしたことがなかったか? と思っていると視界の中に天狗が入ってくる。

東京タワーの根本でなんやかんやの準備をしているようだった。というか、そんな最中にザコちゃんが居た。

何をやっているのだろうか? と近づいてみる。ザコちゃんは「……ヤバい、ヤバいつて! 逃げないと死ぬからアンタら!」と必死な声を出す。

天狗達は不審に思っているが、不審に思っているのは俺もだ。どういふことなのだろうか。

「い、いやー……アレだよアレ! 古巣に忘れ物があつたから届けて貰つてた……的なの?」

「何を言うかアマノザコ! 我ら国神の為に力を貸してくれるとの言葉は偽りか!」
「微妙に偽りじゃないからその話は後で! マジでお願いだから!」

む? ザコちゃんは攫われたとかではないのか……
「残念そうにすんな」

ザコちゃんからの説明(というか天狗達の弁明?)はこんな感じ。

国津神のパワーを高める為にザコちゃんの力が必要だ！ 故にザオウゴンゲンという悪魔に助っ人交渉人を頼んだのだ！

そこまで言われたんなら一肌脱ごうじゃあねえか！ とザコちゃんが了承した、と。そんな感じの事を高いテンションからなる破茶滅茶な言い方で言ってきた。だから何故にそこまで隠すのだし。

『少年、アマノザコは恥を感じているのではないだろうか？』

「そんなわけないから！ ……まあ？ ちよつと最近世界の中心が私じゃない感じがして？ もうちよい活躍して見返してやろうかな？ とか思っただけじゃないからね！」

なるほど、特訓をしようとしていたのか。

「アマノザコ、貴様は天津神を滅する為にアマノサクガミの復活に力を貸すとの言葉はやはり偽りか！」

「あのお馬鹿を産み直して何かなる訳ねえでしょうが！」

「なんだか天狗連中と話が拗れているようだった。アマノサクガミとは何者だろうか？」

「アマノサクガミとは、我ら国津の九天の王よ！ 荒神を統べる大悪魔の力をもって天津神を殲滅するのだ！」

それで、そんな儀式を前にザコちゃんは何をしようとしていたのだろうか。生み出し

たそいつをしぼいて下僕作るつもりだったり?

「……大体合ってるのが本当にヤダ」

ならば手を貸そう。さあ、儀式を続けてくれ。出てきたそいつを大人気なくボコせば良いのだな?

「……あのね? 私にも情とかあるのさ。あんまり仲良くはなかったけど、自分の子供をそんな死刑台に送る為に生み出すような真似はしないから」

ザコちゃんは続ける。

「私がアマノサクガミの儀式をしようとしたのは、確信が欲しかったからなの。私がアマノザコで、スサノオから産まれた悪魔なら……つて」

あー、ザコちゃんとアオガミは兄弟的なサムシングなのか。

「やっぱアンタはスサノオだよねえ……」

「なんと、お主はスサノオのナホビノであったのか! これはめでたい!」

『簡単に言うならば、スサノオとは高天原を追放された神であり、国津神の大元だ。故に彼ら国津神に連なる悪魔から見れば偉大な悪魔がナホビノとして戻ってきたと言えるのだらう』

なんだか、今日は『なるほど』とか『どう言う事だろうか?』とかのテンプレートな事ばかり言っている気がしてならないがそれはそれ。

ザコちゃんは何を確かめたかったのか、については問わない。彼女にとって大切な事なのだろうか。

まあ、既に全てがぐだぐだになっているのだけれども。

「誰のせいだ誰の」

ほんきでぐだぐだしていたら儀式を行う月齢が過ぎたらしい。『それでいいのか天狗？』と訝しんだが、国津神の連中は誰も儀式がまともに進むとは思っていなかったとのこと。

だからこそその助っ人のザオウゴンゲンさんが呼ばれたらしい。ヤバい事になった際に対処する為に。

儀式をしていた天狗くんは知らなかったので「ま、誠ですか!?!」と狼狽えていたのだが。

尚、ザオウゴンゲンさんは語らずに一礼だけして去っていった。彼の目の中であつた安堵とザコちゃんへの深い感謝は……まあ色々あつたのだろう。うん。

「間違ひなくアンタと殺し合わなくて良かったって思ってたからだよ」

しかし、アマノサクガミ関係の事は謝罪するべきだろうか？　そこまで深く思い悩ん

でないように見えたのだが。

「……まあ、ね。自分の子供と殺し合う覚悟はあったけどやっぱりやりたくはなかったし」

そこまでして確かめたい事なのか?

「うん」

ザコちゃんは、しっかりと言葉を発する。

「……ねえ、アンタは神様になつたら何したい?」

……なる予定はないのだが。

「もしもの話だよ、もしもの。アオガミの為に、天津神として多くの神と悪魔の世界にしたい? 今まで見たく、秩序に守られた世界にしたい? それとも……」

「全部全部、なにもかもなかったことにしたい?」

ザコちゃんの目は、縫っているように見えた。俺に対してでも、アオガミに対してでもない。

ならば、答えは素直に俺の事だけ考えていればいい。

「外宇宙その友人に、誇れるようにしたい」

口がすんなりと動いた。その言葉でザコちゃんはニカつと笑い。

「なんか、すつごく良いね!」

と大きな声で口にした。

「まあ、具体的には何も考えてないって事も分かったんだけどさ」

それは仕方なからう。神様なんぞやりたい奴がやれば良いのだから。

少なくとも俺はやりたくない。

「はいはい」

ザコちゃんはなんだか『あー、またなんか馬鹿考えてるよこの馬鹿親父は』とても言いたげな目でこちらを見ていた。

「あー、また言ってるよこの馬鹿は」

というか、口に出して言いやがった。口に出してはいないぞ。

「目は口ほどに物を言うとか、そんな感じで」

このやろう

国津神連中にオオヤマツミを引き渡して感謝され、ついでにまた刀を貰った。あの神社なんでもかしらんが錬気の剣が沢山ある。神田あたりで暴れていたサマナーが『捨てるのも勿体無いから』と残したモノらしい。

この刀はザコちゃんのパワーを込めてザコちゃんソードにしてみようか？ と尋ね

るも否定された。『絶対にヤダ』との事。

そして、妖精の森への帰路につく。なんとなくだがシナガワ周りに近づくほどに妖精の影響力が増しているようだ。

妖精達もやはり善意だけではないようだ。構わないとはいえ、しつぺ返しに巻き込まれたくはない。

「大丈夫じゃない？ アンタをどうにかできるようなしつぺ返しはそうそうないし」

ザコちゃんの言い方はとても雑だが、間違っではないのだ。いないのだが……

「あ、デメテルだ」

ザコちゃんが指し示す。そこには土に紙を刺して何かを記録している彼女がいた。

ザコちゃんの声かけると、元気に手を振りかえしてくれる。良い奴だよな本当に。

「やつほー、何やってんの？」

「拾った本を参考に、土の性質を調べてたの！ サイエンスって素敵ね！」

紙で調べるとは……リトマス試験紙？

「そう！ 作ってみたの！」

この女神様本当に農業技術についてはノーブレーキだ。そのうち大規模野菜工場とか作りそう。

だが、そういう調べ方をしてもどうにかできるものなのか？

「もちろん！ 汚染だとかの『不確定な状態』のままでは対処するよりも、原因を特定して『定義した原因』に対処するのが良いらしいの！」

……すまん、分からん。

「私もあんまり分かってないわ！」

マジか。とびつくりした所でザコちゃんの解説が入る。

「……情報に関連性を付けてるんだよ。『リトマス紙で調べた結果』と『その対処法としての過去の情報』に」

「マーベラス！ もっと教えてくれないかしらアマノザコー！」

「ほら、悪魔って情報生命体だから。悪魔連中の残したあれこれだって情報をマガツヒで形にしているのさ。だけどそういうのは不安定だから、他の情報で性質を上書きできるのさ。測って定めれば」

……それは、レッテルを貼ったらその通りになるという事だろうか？

「貼るにしても根拠は必要だけどね。今回みたく『見えないモノ』に対しては効果あるんじゃないかな？」

ほら、土の汚れ具合とか普通測れないしね。との言葉が加わる。

だがそれならばデメテルほどの悪魔なら気合い一つで豊かな土地にできるのでは？

「出来るんじゃないかな？ 豊穡の女神の加護によつて、土が綺麗になつた！ つて説得力が足りてればさ」

「……それが原因なら、やっぱり私の力が衰えたからかしら」

そんな風に落ち込むデメテル。ザコちゃんは付け加える。

「情報を定義する主体は人間だからね。誰も見てないところだと、デメテルが何かしても根拠にならないんだよ」

「センキュー、アマノザコ。そっか、だから試験紙なのね。人間の歴史が、科学が情報のバックボーンになる！ とつてもとつてもハーベストね！ 素敵だわ！」

落ち込んだ調子が一瞬で喜び由来のハイテンションに切り替わる。素敵な心の悪魔だな、本当に。

「……あ、ごめんなさいいついついこつちに夢中になつてて用件を忘れていたわ！ 私、貴方達に用があつて来たの！」

デメテルは言った。

「魔王軍の残党の魔王モロクを倒してくれないかしら？」

……理由を聞いても？

「彼は、生贄をするタイプの魔王らしいの。それ自体は別に構わないのだけど、彼の生贄のやり方が問題でね、子供を炎に焚べるのよ」

「……え、魔界で子供？」

「そう！ だから子供って所を諦めて『新しく産まれたモノ』を燃やしてるの！」

……新芽？

「ザッツライ！ だから仕留めたいんだけど、ホームの味方は頼りにならなくて助っ人を頼みたいの！」

「こんなにも母親じみているデメテルから頼りにされないとか、ギリシャ連中は泣いて良いのでは？」

「などと思ったが敵についても理由についても嘘は言ってはいないのだし、利用されてもいいだろう。了承だと返した。」

「センキューソーマツチ！ 代わりにやって欲しいことは何でも言つて！ 力になるわ！」

蘭丸を誘うついでに妖精連中に聞いてみよう。

デメテルを連れて森に入る。蘭丸はすぐに見つかった。蘭丸は樹島と共に色々作っていた。食事の準備のようだ。妖精達がつまみ食いしようとして、蘭丸の小刀に追返されている。

「ユート殿！ ザコ殿！」

「ああ、戻って来たのね」

「ただいまー」

「お帰りなさいであります!」

作っているのは炊き込みご飯と汁物、具材は魚が多めだった。肉はその辺にあるだろうに何故だろう?

「ずっと肉ばっかだったからよ」

樹島はそう言う。肉ばかりだと魚が恋しくなるのだろうか? と思ったが食ってる肉がその辺で殺した悪魔の肉ならばナーバスにもなるか、うん。

「それにしても、蘭丸もサホリも手際良いよね」

「……まあ、ずっとミヤズにやらせる訳にもいかないから」

「ミヤズ殿は頑張り過ぎてしまおうでありますからね、手早くやらねば起きてしまおうのでありますよ」

なるほど。いい話だ。

だがそれは急ぐ理由であって手際が良い理由とは違うのでは?

「……うっさい」

「花嫁修行として仕込まれたというのは別に隠す事ではないでありますよ。蘭丸のも究極の蘭丸になる為に鍛えた技術の一つでありますから」

なるほど。現実に帰ったら『素直に真面目に花嫁修行に打ち込んだ前時代的価値観の

樹島サホリ』についておちよくってやろう。恥じる事では決していないが、割と面白い反応が返って来そうだし。

生贄の神モロク様! (いつもお世話になってます!)

ふらりふらりと歩いていく。

東京駅周辺は基本的に大惨事であり、道という道は存在していない。

ぐちゆりと音がする。足元をあまり気にしていなかったせいかな、悪魔を踏んでしまったようだ。トドメになったな。

「気づいていたでありますよね?」

けど、そこに居たし……

「え、それ言い訳のつもりなの?」

魔王の首を獲りに東京駅近くまでやってきた俺たちの目に入ったのはまさしく惨状だった。建物は崩れ落ち、かつての東京の名残はさらに砂に消え、焼け残りがその砂に埋もれている。

後片付けが果てしなく面倒なので、メギドとかで更地にする方が再開発とかには楽そうだ。だれもこんな土地に住みたいとは思わないだろうけども。

「うわあ……土地からマガツヒの気配が無いよ、カケラも」

「あれほど多くの悪魔が死んだのに、でありますか？」

「うん。全部イシユタルのアレに吸われたみたい。土地のマガツヒも含めて全部」

モロクはどうしてこの辺りから動いていないのだろうか。この辺りに未来はないのだから、他所をぶん取りに行つた方がいくらか得するだろうに。

などと思っていると、少しばかり土に生気が戻ってくるのが見えた。ほんの少しだが、確かに。

「何用だ」

それを成したのは、目の前の悪魔。牛に似た姿の邪神だ。

単刀直入に要件を言う。お前の首を取りにきた、と。

「……走狗が」

モロクはこちらを見て、そう吐き捨てた。

モロクが炎を巻き起こす。多くの命を燃やしてきたモロクの炎は悍ましく、呪いを帯びていた。

それをナホビノ殺法『逆風』にてぶつた斬り、モロクへの道を作る。足を止めずにそ

のままモロクに雷を叩き込むが、モロクは雷を弾いてその巨体で俺に一撃をかましてくる。

モロクの一撃『メガトンプレス』を全力の拳で正面から迎撃した。

威力は互角。

しかし、俺の体はモロクに絡め取られた。モロクの尾だ。

間髪入れずに俺の頭を食いちぎろうとするモロク。体勢をあえて崩してモロクの口から逃れるも、避けられる事は想定されていたらしい。

モロクの瞳は決して俺を逃さず、モロクの炎は俺の体を直撃した。

「今」

ザコちゃんはモロクの『勝利の確信』の瞬間を逃さない。炎が着弾する寸前に俺にかけられた回復魔法は、モロクの炎を耐え切る事を可能にした。

そして、ゼロ距離で隙を晒したコイツを逃すつもりはさらさらない。放ったのは暗夜剣、封技の呪法が込められたその二連斬はモロクの芯を逃さず、怯ませた。そして満を辞して蘭丸が放った奥義一閃がモロクに着弾し、モロクの体は真つ二つになった。

どこか淡々とした、一つの戦いだった。

モロクの遺体をどうするか、それは俺も蘭丸もザコちゃんも満場一致で決まった。

モロクの体はこの砂漠に埋められ、新たな実りの為の養分になる。

それはさりとて困る事でなし、モロクの遺体も埋めておこう。となつた。

この辺りで死んだ悪魔達と同様に、土地に戻るマガツヒの一部として。

モロクが多くを埋めたのと同じように。

そんな時、背後から『ハーベスト!』と声がした。デメテルが様子を見にきたらしい。

「流石ね!」

笑顔でそう言われた。

デメテルに、一つ聞かなければならないことがある。と切り出す。

「何かしら?」

モロクは、アンタ個人にとって悪だったのか?

「……いいえ。敵であつても悪ではなかつたわ」

ならば納得する事にする。騙された訳ではないし、不利益があつた訳でもない。

利用されても構わないと思える程度にはデメテルの事を好ましく思っているのには変わりはないのだ。

「モロクは、貴方にはどんな悪魔に見えたの?」

そんな、穏やかな問いかけがある。

その問いに、俺は明確な答えを返す事ができなかった。

「……やめやめ! こんな所でぐちやぐちやシリアスっぽいことしたって暗くなるだけだからね。それより、デメテルはなんでここに来たの?」

「そうね! やるべき事をやらないと!」

そう言った彼女は、ビニール袋を取り出した。手元に本を出して、『悪魔もゴーグルは付けた方がいいのかしら?』と口にして、まあいいや! と切り捨てた。

「私はこれからここに畑を作り始めるわ! 悪魔の毒を中和できそうな気がするアレコレでね! さあ! ハーベストの為にレッツファーマーミング!」

デメテルはそう口にして、土地に吸われたマガツヒをより広く、豊かなものに変える為に行動を開始したのだった。

「あ! お帰りなさい!」

ミヤズちゃんが声をかけてきた。妖精の森はほんの少し見ぬ間に森というより村とか集落と言える程度に発展をしていた。

「皆様、頑張ったのでありますね!」

「ハイ! 先輩や蘭丸さん達が助けた皆が、ちよつとずつできる事を、つて動いてくれた

んです！」

見れば、作業をしている面々の中には蹲って何もしていなかった奴がちらほらと見える。

きつと現実逃避する事には飽きたのだろう。魔界は東京とは違いなかなか暇であるのだから。

「ミヤズに触発されたとかじゃないんだ」

もちろんミヤズちゃんが率先して動いてる事が大きい要因ではあるとも。だが、そもそも暇を覚えなければ自分も頑張ろうなどとは思わないぞ絶対に。

「そんなもんかなあ……？」

あんまり理解していないザコちゃん。一日中手元にスマホがある生活に覚えがないと現代人の感覚は理解できないのだろう。悪魔用のスマホとか出たら理解されるだろうけれども。

なんて緩く気を抜いていたら通信が来た。

着信の音が脳内にダイレクトに響いてうるさくてたまらない。アオガミとの合一が深くなっている事が原因だろう。

通信の内容は『仕事なので本部に戻れ』だった。バックレたい。

『少年、明確な理由のないサボタージュは推奨できない』

アオガミからも釘を刺されたら仕方ない。ちよつくら顔を出してこよう。

蘭丸はどうする? 来るか?

「行くであります。この時期の呼び出しならば、間違いなく重要な情報がありますから」

「今更だけど、蘭丸は仲魔じゃないんだよねえ」

「仲間ではありませんよ。ユート殿を主人とする気がないだけです」

酷い言い方になっていて少し面白い。蘭丸星人の主という『超スーパーアメイジングマスター』みたいな区分に入れる気はしないけれども。

「それなら、お兄ちゃんに伝えてください。私は元気でやつてるって」

健気やなあ……と浸りたくなるのは後にして、ぴよんぴよんと議事堂にあるターミナルへと向かう事にした。

議事堂前には、太宰がいた。天使達を従えながら、背負ったリュックをパンパンにして。
て。

「お前も呼ばれるよな、そりゃ」

太宰は笑顔でこちらに手を振って来た。後ろの天使共がこちらを微妙な目で見ているが、殺気がないので放置する。

太宰は何をしていたのだろうか? と尋ねると

「資材集めだな。魔界の素材とかをベテルに持つてつて、加工した奴を皆の所に持つて行って……みたいな」

その言葉に、妖精の村には『皿やタオル、石鹸といったもの』がちやんとした物に切り替わっていた事を思い出す。良い仕事してんなあ……

「へへッ、俺も捨てたもんじゃねえだろ」

太宰を連れて議事堂内部へと入る。ベテルの職員さん達が太宰を見て「お疲れ様」と声をかけているあたり、人間関係は良好なのだろう。天使共みたいな地雷に粘着されているのに。

準備は整っていたようですぐにターミナルは起動され、俺たちは見知った東京へと戻ってきた。

案内の元作戦室へと進む。

深刻そうな顔をしている敦田と、鉄面皮な越水総理がいた。

「来たようだな」

威厳のある言葉に緊張してガチガチになる太宰を見ると、逆に安心する。この人相手に緊張する事はあんまりないけれども。

「君達には私の護衛をしてもらいたい」

前置きをすつ飛ばしての言葉。護衛を必要とするほどに弱くは見えない、と部屋にい

る全員の思考が一致したのはさておいて、長官は話を続けた。

「明日、ベテル各国の首脳陣が集まつての万魔会談が開かれる事となった。そこでの結論は間違いなく『これより戦争を始める』となる」

「……戦争?」

「と、止めないんすか?!?てか何で戦争なんて事に?!?」

混乱しながらも太宰はそう言った。しかし長官は「不可能だ」と一蹴。

「日本支部を狙わない理由はどこの勢力にも存在しない。ナホビノの力を有しているのだからな」

ならば自分が日本支部から離れるならば止められるのか? と疑問を返す。

「可能性は低いだろう。異なる神話形態の神々が力を合わせたのは悪魔から世界を守るためののだから」

共通の敵がいなくなれば、本来の殺し合う関係に戻る、と。

「質問は?」

あんまり理解していない様子の太宰は置いておく。イジると楽しそうだけれども。

敦田に何があつたのかを尋ねてみる。

「……薬が、手に入らなかつたんだ」

そう、口に出した。

「薬？」

「ミヤズの薬だ。ミヤズは昔から身体が弱かったから、薬で色々予防していたんだ」

「……マジか」

「その薬つてさ、他で代用できたりは……しないか」

聞けば、病院も薬局も存在が不安定になってしまっているとの事。薬の原材料から作るうにも、その原材料すら存在が不安定になっており、いつ消えるとも分からない。

必要なものが滅んだ状態に戻る可能性はとて高いのだとか。

「東京を救わなければ、ずっとこのまま変わらない」

だから、戦争を起こしてでも最短でどうにかしなければならぬ。と。

「……敦田」

「すまない、完全に私情だ」

そんな悩みの中にある敦田は、その目の鋭さだけは消していなかった。

「てか、戦争なんかやってどうするのさ。他の神様全部ぶちのめしたら東京は治るの？」

「……万魔会談の結果次第だ。ペテルの最高機密である以上、まだ口外することはできない。そういう契約だ」

方針は予想できているが具体的に何をすれば良いのかは分からなかったもので、個人的にはありがたい。

かつて秩序の神が世界を救ったやり方の、一端くらいは理解できるだろう、きつと。

そうして、敦田以外はいつも通りに日は進み、万魔会談当日はやって来たのだった。